

---

# 学生時代

山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学生時代

### 【Zコード】

N48710

### 【作者名】

山

### 【あらすじ】

キャラ

やまもとれんじ

山本連碁

かんさきかなこ

間先加奈子

あかさきねこ

赤崎禍見

おかさきみみ

岡崎眞魅

おかさきまみ

リオ・リファイル

コレット・ファラ

俺は・・・もう学校を辞めたいと思った  
だが・・・5人の女子が辞めさせてくれない・・・  
そう・・俺の最悪?な学校生活が始まるのだ・・・

## 山本連喜（やまもとれい）（前書き）

はじめまして～？

はじめてみた方ははじめまして山です。

前の小説を見てくれた方はお久しぶりです。

今回は一応恋愛として・・頑張っていきたいと思ひます・・・一応あらすじでは最悪？？と書いてますが・・今後みんなが幸せになるような小説にしようかな？と頑張っていきます・・誤字脱字がかなりあります・・何かあつたら感想に書いてくださいねとすくべ助かります。では～

## 山本連碁（やまもとれいじ）

今自分はこの学校を辞めたいと思つた。  
なぜなら・・・

「山さん帰りましょ。」

「山ちゃん帰ろう。」

「山様帰りまよ。」

「山君帰りましょ。」

「山せん一緒に帰りませんか？」

つと5人の女の子が一緒に声をかけてきた。

そして・・うちは・・

「断る権利は？」

と言つたとき5人は同じことを行つた。

「・・・「ありません」」

と言われた。そして俺は・・落ち込みながら  
「分かつたよ・・・」

と心の中で泣いて一緒に家に帰つた。

なぜいつも5人と一緒に帰らないといけないのは  
自分が原因であつた・・・。

まずは・・・自分の名前からだ・・

俺の名前は山本連碁やまもとれいじ

わけがあつて今は1人で小さなアパート生活を  
送つているのだ。ん?なぜ1人でアパート?  
と思った?それは・・もう親がいないから・  
俺が中学に入る前に親が事故で亡くなつて  
親の親戚から俺を引き取ろうとしたけど  
俺はもう1人で歩くことを決心をして断つた  
しかし・・・俺は1人で生活をするのは  
初めてであり、おばあちゃんからいろいろ

家事やバイト探しなど手伝ってくれた。

だが・・俺が中学2年のときおばあちゃんも病気で亡くなつてまつた。しかもおばあちゃんの家を使ってもいいと言つたけど俺は断つた。

こんな人間がおばあちゃんの家を使ってもいいはずがないから・・だから自分は親が住んでいた。

アパートの家に1人ぐらしで住んでいて1人で生活をしていた。それとおばあちゃんの家は親戚の人気が管理していくつか使うときは

言つてねつと伝えてくれた。それはありがたい。

なぜならまたおばあちゃんの家にこれるからだ・・

そして・・俺が中学に入る前に2人の友達がいたけど親がなくなつておれも別の学校に変わつたのでもう合わなくなつたが・・まさかの高校であつてしまつた。

そこから・・俺の最悪な出会いが待つていたのであつた。

(第1章終わり)

## 間先加奈子（かんさきかなこ）

彼女との出会いは・・俺が小学生に入った時初めて声をかけた人だった。

「君の名前は？」

と彼女が言つてきたので俺は

「山本連碁だ（やまもとれんご）」

と言つた。そして彼女は

「山本連碁か（じやあこれから山ちゃんと呼ぶね

私の名前は間先加奈子

加奈子つて呼んで～」

と俺たちはそこで友達になつた。しかし俺は元々友達を作るのも苦手で1人にいるのがとても好きだつた。だから幼稚園では友達を作らなかつた。小学校で自己紹介をした語俺は誰とも付き合わなく1人で本を読んでいたら

「なんで1人で読んでるの？」

と加奈子が声をかけてきた。俺は

「1人のほうがいい」

と言つたら加奈子が

「それは悲しいな（じやあ私とあそぼ）

と言つてきたので俺は

「いや、いい」

と言つたけど加奈子は

「だ（め）行くよ

と俺を引っ張つて加奈子は俺とよく遊んだが

中学に入る前に俺は親を亡くし学校を転校することになつたが加奈子に何も伝えず俺は学校を去つた。

そして普通の高校に入つて俺の前に1人の女の子がいて

「山ちゃん？」

と声をかけられたので俺は  
「ん？」

と返したらいきなり俺を殴つて他の奴らが唖然をしていった。

そして加奈子が泣きながら

「なんで・・なんで・・私に何も言わずに勝手に転校するのよ！  
すごく悲しかったのよ・・・なんでかつてにいなくなるのよ・・・」

と泣きながら俺に行つた。そして俺は

「すまん・・・」

と言つた。そして加奈子は

「まあ・・また同じクラスになつてよかつた・・・

「これからもよろしくね！山ちゃん」

と言つて加奈子は笑顔になつた。俺は

「よろしく」

と言つた。だが・・俺は・・もう友達を作りたくない  
と思った。なぜなら中学校で1人だけ知り合いが居て  
その子に裏切られてもう作らないことを決心をしたので  
加奈子には申し訳ないけどもう付き合つことはないと思い  
学校が終わつた時に急いで俺は教室から出て行つた。  
「これから・・大変な学校生活になるだろ？・・・  
と俺は・・思つた。（第2章終わり。）

## 赤崎糞見（あかさきれみ）

彼女の出会いは・・・俺が小学校に入った時  
加奈子と出会いその数カ月後加奈子から

「やまちゃんちょっとといい？」

と言われ俺は

「なんだ？」

と聞かれて加奈子が

「出できて～」

と言われ恥ずかしそうに出てきたのは

「は・・・はじめまして・・・私は

あかさきれみ  
赤崎糞見と呼びます。

糞見つと呼んでください・・・

と恥ずかしそうに言つた。そして

「よろしくな・・糞見」

と言つたら彼女は恥ずかしそうに下を向いて  
俺はどうしたのだろう？？と思つた。そして  
加奈子と糞見はよく俺を誘つて遊ぶけど俺は  
飽きないのか？俺と付き合つてつと思い

よく3人で遊んだ。そして・・・

親を亡くした俺は何も言わずに学校を転校をし、  
まさかの出会いで高校で加奈子とばつたり  
しかも同じクラスでそれで勝手に転校したことで  
なぐられてしまい、加奈子は少し泣きながら  
教室から出た。そして俺は何も言わずに外を見たら  
1人の影が俺の近くに来た。そして・・・

「もしかして山さん？」

と声がしたので俺は顔をその声の主の前に見たら

「もしかして糞見か？」

と俺は声を出した。そして糞見は

「加奈子がいきなり教室を出たからびっくりして  
中を見たらもしかして・・・と思つて声をかけたの」  
と言つて俺は

「そつか・・・」

と答えた。そして糞見は

「お久しぶりね。元気だった?」

と少し恥ずかしそうに言つた。俺は

「ああ・・・まあ・・元気と言つたら元気なのかな?」

と答えた。それを聞いて糞見は

「そつかーでも・・・いきなり転校しちゃつたときは  
私と加奈子はすぐ泣いたよ・・・でもまた会えて  
よかつた・・・」

と言つた。それを聞いて俺は

「あのときはすまんだつた・・・」

と言つたら糞見は

「気にしないで、でも・・加奈子が殴つたのは  
許してあげて。加奈子もかなりショックで  
数日までたちなれなくすごく泣いてたから・・・  
高校にあえて本当にうれしかつたけど・・・  
あの時の悔しさでつい殴つてしまつたと思うから・・・  
と糞見は言つた。それを聞いて俺は

「気にしないよ・・俺も勝手に転校したから責任で  
殴られるのは仕方ない。糞見は・・殴るのか?」  
と言われ糞見は

「私は・・・また会えただけでとてもうれしいよ。  
殴るまではしないけどどうして・・・何も言わずに  
私たちの前から転校したの?」  
と聞いてきたので俺は

「ああ・・・中学校に入る前に親が事故で亡くなつてさ

おばあちゃんにお世話になつて学校を転校したわけだ」と言つたら糞見は

「そつか・・・山さんも・・・大変だつたんだね・・・

今もおばあちゃんと一緒なの?」

と聞いたので俺は

「もうなくなつたよ・・・中学2年で病氣でさ・・・

仕方ないけど今は1人でアパート生活を」

と言つたら糞見が

「そつか・・・じやあ・・・今度遊びに行つてもいい?」

と恥ずかしそうに言つた。それを聞いて俺は

「ん・・・?まあ・・・來てもいいが何もないぞ?

てか・・・糞見・・・お前積極的に言えるようになつたね。驚いた・・・あ。でもバイトで遊べない時もあるから

そのときは勘弁して・・・

と言つて糞見は

「うん!分かつた。私が積極的に言えるようになつたのは加奈子と山さんのおかげだよ。2人がいなかつたら今頃ね・・・

あ、加奈子を探してくるね。また後でね!山さん」と言つて糞見は教室から出て行つた。そして・・俺は

「これから大変になりそう・・・

と落ち込みながら外を見た。(第3章終わり。)

## 岡崎眞魅（おかざきまみ）

俺は加奈子と糲見と高校で再会した後の放課後バイトのために早めに帰宅をしてる途中で1人の彼女が俺の前に現れ

「山君帰ろう~」

と俺に声をかけた。俺は

「別にかまわんが」

と言つて彼女は

「ラッキーじゃあ一緒に帰ろう~」

と俺と彼女は一緒に帰つた。そついえば彼女の名前は岡崎眞魅おかざきまみと言つて俺のおばあちゃんの

親戚の娘で俺の先輩であった。俺が親を亡くして

おばあちゃんのお世話をしてたときに初めてあった。

最初のほうは俺が親を亡くしたせいであまり暗かつたそうで彼女もあまり声をかけなかつたが何回か会つたときに彼女から

「山本連碁君やまとひときだよね？」

と声をかけたので俺は声を出さずにうんと頭を振つた。

そして彼女は

「私名前は岡崎眞魅おかざきまみつていうの

これから眞魅まみって呼んでね~」

と明るく声をかけた。しかし俺は親がなくなつて当分立ち上がらなくよくおばあちゃんから俺の話を聞いたらしくおばあちゃんがいないうきによく俺の相手をしてくれて何回かして俺は

「俺と一緒にいて面白いのか？」

と言つたら眞魅が

「やつと話してくれた・・・ん~私も友達そんなに居ないし山君のことが気になつてから~面白いって

言つて一緒にいて山君のことを詳しくしりたい。」

と言つた。そして俺が少しだち治つて中学校に行けるようになったが中2のときおばあちゃんが病気で亡くしその後いじめにあつて俺は何も言わずにいじめを食らつていつた。それを眞魅が気づいて俺に声をかけた。

「山君何か困つたことある?」

と言つて俺は

「別に今までの通りだよ。」

と答えた。その数カ月後いじめが突然亡くなつた。

そのクラスの1人の女子が俺に

「岡崎先輩にお礼を言つてあげなさいよ。」

と言われ俺は

「なぜ?」

と言つた。そしてそれを聞いた女子が

「岡崎先輩があなたがいじめていたことを気付いてね  
私と岡崎先輩は一緒の部活だから私に聞いてきて  
私も少しいじめの瞬間を見たけど···相手は男だったから  
止められなくてね···だけど岡崎先輩はあなたを助けるために  
いじめをした子を止めたのよ。だから後でもいいから  
岡崎先輩にお礼を言つてあげて。」

と言つて俺は

「分かつた。放課後に行くね。」

と言つて放課後俺は眞魅がいる家庭科部の部屋に言つて、  
クラスの女子が俺が来たことを気付き眞魅を呼んで  
俺の前に来させて俺は眞魅の顔に傷があつたから  
聞いてみた。

「この傷どうしたの?」

と聞いたら眞魅が

「ああ、この傷はねちょっともめごとがあつてね。」

気にしないで。で···私に何か用?」

と言つたら俺は

「クラスの女子に俺がいじめられたことを眞魅が  
解決してくれたつと聞いたから・・・もしかして・・  
俺のために怪我をしたのか？」

と言つたら眞魅が

「ああ・・話を聞いてくれないから少し黙らせたわ・・  
まあ軽い傷で済んだから問題なし!」

と笑顔で言つた。それを聞いて俺は

「眞魅ごめん・・俺のせいで怪我をしてしまつて。」

と言つた。それを聞いた眞魅は  
「山君は私が守るよ。どんなことがあってもね。  
だから気にしないで」

と笑いながら言つた。そして俺は優しい先輩を持つて  
よかつたと初めて実感をした。そして眞魅が卒業をし  
俺が3年になつて眞魅が俺の家に来て

「山君もう高校決まつた?」

と聞いたら俺は

「まだ決めてないけど・・・もつ就職にしようかとおもう  
いつまでもおばあちゃんの遺産や親の遺産で生活をしたら  
罰が当たるから・・」

と言つた。俺は親の遺産とおばあちゃんの遺産は俺が  
さびしくないようになに遺産を残してくれたが俺は無駄にはしては  
行けないと思い。おばあちゃんの家は住まずに古いアパート生活で  
頑張つていこうと思いついバイトを見つけ働きながら学校に行つていた。  
眞魅は考えて俺に言つた。

「おばあちゃんからね。山君がおばあちゃんの家にすんでから私は  
いろいろ聞いたのよ過去のことを。そしてねおばあちゃんが  
山君に大学を卒業してほしいからつと言つてたんだよ。

だから・・山君私がいる高校に来ない?」

と誘いが来て俺は

「でも・・・」

と言った。眞魅は

「山君なら絶対に受かるよ！私も受験手伝つから一緒に高校に行こうよ。」

と言った。俺は

「分かつた行くよ。」

と言つて眞魅が

「やった！！！じゃあ来週から勉強教えるね！」

と言つて俺と眞魅は高校受験が始まる前に大事な所を

眞魅が分かりやすく勉強を教えてもらい無事に合格をして

今俺は眞魅と一緒に学校に行くことになった。んで帰り中眞魅が

「山君今日はバイトだつたつけ？」

と言つた。俺は

「うん。そうだよ。」

と言つて眞魅が

「そつか～山君バイト頑張つてね！」

と言つて俺と眞魅はお互いの家に行く分かれ道で別れた。

そして俺は

「さて・・・バイト頑張るか」

と言つて、家に早く帰つた。（第4章終わり）

## リオ・リフィル

眞魅と別れ家に帰った俺はバイトの準備をして出かけた。そしてバイトに行く途中に2人の女性が俺の前に来て

「あ、山さん今からお出かけですか？」

と1人の女性が言つて俺は

「今からバイトだよ。」

と答えてもう1人の女性が

「そなんですか。バイトまで一緒について行つてもいいでしょうか？山様」

と言われて俺は

「別にいいですよ。」

と答えた。それを2人は聞いてとてもうれしそうになつた。まず1人がリオ・リフィルさんつと/or/言つて彼女は普通の人間ではない。それは・・・天界から来たお嬢様だ。彼女との出会いは俺が高校に入った入学式のことだ。俺が入学式後教室に入ろうとしたところ彼女が俺の前に来て

「あの〜すいません・・・

と恥ずかしそうに俺に聞いて俺は

「何か？」

と言つた。そして彼女は

「1年C組の教室はどこでしょうか？」

と聞いてきたので俺は

「ああ、俺と同じ教室かじやあついてきたらしいよ」と一緒に教室に向かつた。そしてついて俺は

「ここが1年C組の教室だよ」

と答えた。そして彼女は

「ありがとうございます。えーとお名前は？」

と言つたので俺は  
「山本連碁だ」

と言つた。そして彼女は

「私の名前はリオ・リフィルと言います。リオって呼んでください。」

と挨拶をしてリオは教室の中に入った。

そして俺は入学式後のＬＲで先生の話を聞いてその後終わつたので俺は家に帰ろうとしたらリオが現れ俺に何か言いたそうに待つた。それを見て俺は

「何か用ですか？」

と言つてリオは

「あ・・はい！あの・・・山さん私と友達になつていただけませんでしょつか？」

と言つたとき彼女の顔が赤くなつた。それを聞いて俺は「別にいいけど・・俺と居ても楽しくないぞ？」

と答えた。まあ・・俺は中学校のときにはいじめにあって誰とも友達ができなかつたし眞魅先輩のおかげで何とか中学を卒業をし、高校合格したが・・俺にはもう友達を作る気がなかつた。しかし・・まさかの初めて会つた人に友達になつてつと言われたらう。俺もさすがに言つてしまつ。しかし・・彼女は

「私は・・天界から來たので・・知り合いが1人いるのですが他に友達がいなくて・・困つてたのです・・しかも・・私はこの世界に來てまだあまり慣れてないのでもしよかつたら・・町案内してもらえませんか？」

と言つて俺は

「分かつた・・俺が忙しくないときに町案内してあげるよ。」

と言つて彼女はうれしそうに

「ありがとうございます！これからもよろしくお願ひします！」

と言つて俺とリオはこの時初めて会つたばかりだったがまさかの

友達になつた。

(第5章終わり)

## コレット・ファラ

もう一人はコレット・ファラさんと黙つて  
リオと友達になつた後に1人の彼女が3人の男子に  
「彼女名前なんて言うの？」

と言われ彼女が問い合わせられ怖がつてゐるときに俺が  
「おい彼女が怖がつてゐるからやめないか！」

と俺が言つたら3人の男子が俺に

「「「なんだと！」」」

と俺に殴ろうとして俺は3人にカウンターをしかけ  
3人は俺の前に逃げて行つた。そして彼女が俺に  
「ありがとうございます。」

と頭を下げた。俺は

「気にしなくていいよ」

つと言つて俺は教室に戻つた。数日後リオから  
呼びだされ俺は屋上に向かつた。そして俺はリオに  
「どうしたの？」

と質問をしてリオは

「山さんに紹介したい人がいるんだ」

と言つたので俺は

「別にいいだけど・・・で・・・その子は誰何だ？」

と言つたらリオが

「もうすぐ来ると思うよ。」

とちょっと待つてたら1人が屋上のドアを開けて  
リオのそばに行つて俺に

「はじめまして・・・私は・・・コレット・ファラと  
言います。この前助けてもらつてありがとうございました」  
と言つて俺は

「ああ・・・この前のあの子ね・・・気にしないでいいよ。」

と言つて彼女はあわてて

「いえ・・私は・・何もできなかつたし・・とても怖かつたので  
助けてもらつたことでとてもうれしかつたです・・」

と言つてリオは

「前に私に山さんと初めて会つたときには友達がいるつて  
行つたんだけど・・コレットがその友達ねこの子も天界の子でね  
もしよかつたら友達になつてあげてくれない?」

と言つたので俺は考えて

「前にも行つたが俺と一緒に居ても面白くもないぞ?」

と言つてコレットは

「大丈夫です!私は山様のことをもっと詳しく知りたいのです!」

と言われ俺は・・・

「山様・・・様は付けなくともいいよ・・あはは・・

と苦笑していたが彼女は

「いえ・・私を助けてもらつたので・・今後は山様と呼びますね」

と言われ俺は恥ずかしそうに

「分かつた・・・だけど俺と居ても楽しくないかもしけないが

そのときは・・もう・・無視してもかまわないから・・

と言つたらリオとコレットは

「何でですか?」

と言われ俺は・・・

「昔から俺と居た人はみんな結局俺の前にいなくなるから  
もしもう楽しくないやだつたら無理してまで俺のこと  
気にしないでいいから」

と言つてリオとコレットは

「大丈夫です。楽しくなかつたら楽しくさせるつもりなので!」

と言つて俺とリオとコレットは教室に戻るときに眞魅先輩とあって

眞魅先輩が俺に

「Jの子たちは?」

と言われリオとコレットは

「はじめまして私はリオ・リフィルと言います。リオって呼んでください。」

「はじめてまして私はコレット・ファラと言います。コレットっと呼んでください。」

と挨拶をした。それを聞いて眞魅先輩は

「私の名前は岡崎眞魅と言います。眞魅って呼んでね」  
後山君と私は山君が小さいときから友達になつたから  
何かあつたら私に聞いてね」あ、一応私はこここの家庭部の部長を  
やつてるから料理関係も相談してね」

と言つてリオとコレットは

「眞魅先輩にちょっと質問があります。」

と言つたので俺は

「眞魅先輩あとはよろしくお願ひします。」

と言つて眞魅は

「え、もう行っちゃうの？まあまた後でね」  
と言つて俺は教室に戻つた。そして放課後俺が早く帰らうとしたとき2人が俺に

「一緒に帰りませんか？」

と言われ俺は

「分かつた。だけど帰る場所違うでは？」

と言われ2人は

「大丈夫です。多分途中までは同じ道なので」

と言われ俺たちは一緒に帰つた。そして帰る途中にリオは俺に

「眞魅先輩から山さんの過去の話を聞きました。」

と言われ俺は

「そつかじやあ早いが・・俺と付き合つても楽しくないぞ？」

と言われ2人は

「昔は昔。今は今です！だからこれからは思い出したいので  
これからもよろしくお願ひします！」

と2人は言つたので俺は

「分かった。じゃあ・・これからもよろしくお願ひします。  
と言つて俺とリオ、ゴレットは友達になつた。（第6章終わり）

## 入学式後

俺は眞魅先輩と同じ学校に行くことができたがまさかの小学校時代で知り合つた加奈子と糰見とあつて加奈子から少し殴られてしまつてその後リオとコレットが俺の過去のことを知つても友達になりたいつと言われあんまり友達を作りたくない俺は仕方なく友達になつた。

その数日後俺は毎回授業が終わつた時と

学校が終わるときにはすぐ教室から出て行つた。そして俺が出た時加奈子が

「はあ・・・」

と落ち込んでいた。それを見た糰見は

「加奈ちゃん大丈夫?」

と言われ加奈子は

「うん、大丈夫だよ・・・」

と少し落ち込んでいた。それを見て糰見は

「まだ、あの時のこと気にしてるの?」

と言われ加奈子は

「うん・・・」

と言つた。糰見は

「山ちゃんならわかってくれると思うよ~話してみたら?」

と言われ加奈子が

「うん・・・そうだね・・・でもすぐ教室から出て行くから・・・捕まるのかな?」

と心配そうにしていて糰見は

「加奈ちゃん。山さんのバイト先教えようか?」

と言われ加奈子はびっくりして

「なんで糰見が山ちゃんのバイト先を知つてるの?」

と聞かれ糞見は

「前に私が町を歩いてたら山さんがバイトをしていたところを見たから・・まあ・・声はさすがに書けなかつたけど・・」

と言つた時教室の前にコレットが現れ

「リオちゃん山様いる?」

と言つたらリオは

「もつ山さん帰つたよ・・私も一緒に帰りたかったのに・・」

と言つてコレットが

「じゃあ・・明日こそ一緒に帰れるように準備しましょ。」

と言つてリオは

「もうだね、まだ会つたばかりだけど山さん優しいから・・

一緒に帰つてくれるはずだよ・・・じゃあ一緒に帰る?」

と言つてコレットが

「うん。一緒に帰ろ!」

糞見と言つて2人は教室から出て行つた。それを聞いて糞見は  
「加奈ちゃん早くしないと・・・山さん取られやがつよ?」

と言つたら加奈子が

「え・・・?」

と言つて糞見が

「私たちが先にあの子たちより山さんと一緒に帰らなことねー」と言つて加奈子は

「うん・・・」

といつた。その頃俺は早く教室を出て靴箱に言つたら眞魅先輩が

「お、山君発見!」

といつた。腕につかまつて俺は

「やめてくださいよ眞魅先輩」

といつた。それを聞いて眞魅は

「2人だけは眞魅つて呼んでもいいだよ?まあ・・・今日は部活がないから一緒に帰らない?」

と言われ俺は

「わかりました。」

と言つて俺と眞魅先輩は一緒に帰つた。帰りの途中で眞魅先輩が「山君。リオちゃんとコレットちゃんに山君の過去を教えてごめんね。」

といきなり言われ俺は

「気にしないですよ。それに過去を知つて俺から離れてくれれば嬉しかつたですが・・・」

と苦笑で言つた。それを聞いて眞魅先輩は

「もしかして2人は過去を聞いても山君と友達になりたいって言ったの?」

と言われ俺は

「そりゃなんだ・・・」

と言つて眞魅先輩は

「やつたじやん!私以外にもちゃんと山君のことを理解できる人が

できて

でもね山君高校は中学よりはいじめは少ないと思つし私的には山君が

楽しい思い出を作つてほしいのよ・・・」

と言われ俺は

「はあ・・・まあ・・・地味に思い出を作りたいですね・・・俺は」と言つて眞魅先輩は

「もう一つ山君は・・・そつこいつと/or/つまつまつ何かあつたら遠慮なく私に言つてね。山君の相談は私がするから。」

と言つて俺は

「ありがとうございます。でも・・・先輩も忙しいからなるべくは控えさせていただきますね。」

と言われ眞魅先輩は

「いやいや・・・控えなくていいから~どんどん相談してよ~」

と言つて俺たちは同じ道を歩いて眞魅先輩は

「山君は今日バイト?」

と言われ俺は

「いや・・今日はバイト休み明日はあるけど」と言つて眞魅先輩は

「じゃあ後から山君の家に行つてもいい?」

と言われ俺は

「好きにどうぞ・・・」

と言つて眞魅先輩は

「わ~い。じゃあ後から来るね~」

と言われ俺は

「了解

と言つて俺は家に帰つた。その後眞魅先輩が来て少し話をしてうちの夕ご飯まで作つてくれて家に帰つた。俺はご飯を食つて宿題をして、銭湯に行つて帰つてから明日のために早く就寝をした。(第7章終わり)

## 帰り道で・・・

今日は俺はバイトがあつたため学校が終わつた後俺はすぐて教室から出て靴箱に向かつた。そのとき

「山さん一緒に帰りませんか?」

トリオとコレット少しあはあつとリオが言つて俺は

「バイトがあるから・・少し速足でもいいか?」「

と言つたらコレットは

「それでも構いません!山様と一緒に帰れるな。」

と言つて俺は

「そつか・・」

と言つて俺たちは一緒に帰つた。それを見て羈見が

「山さん私たちも一緒に帰つてもいいでしょ?」

と言つたので俺は

「別にかまわないが・・リオ、コレットそれでもいいか?」

と言つてリオは

「別にかまいませんよ。山さんと一緒に帰れるなら。」

と言つて俺たちは一緒に帰り道を歩いた時俺は

「今日はなぜ俺と一緒に帰る?と思つたの?」

と質問をしたのでリオが

「私はもつと山さんのこといろいろ知りたいと思つたので

一緒に帰ろうとしたのですが・・・山さん早く帰つてしまつので

と言つてコレットは

「私もリオちゃんと同じで山様といろいろ話したくて少しでも

居たかったから・・・」

といわれ俺は

「そつか。悪かつたな。俺もバイトなどがあつて急いで帰つてたんだ。

それと学校に長く居ても楽しくないからな・・・」

といわれコレットは

「山様はどうしてこの学校に入ったのですか？」

といわれ俺は

「それは・・俺は元々高校に入らなくてよかつたんだ・・しかし  
リオ、コレットお前らは眞魅先輩から俺の過去を聞いただろ?  
そのために今俺はこうして高校に入れたのもおばあちゃんと  
眞魅先輩のおかげだつたんだ」

といわれコレットが

「そうだつたのですか・・では山様と出合つたから言ひ思ひ出を作  
りたいです。」

といわれ俺は

「あはは・・よろしく・・」

と苦笑をしていて俺は

「加奈子と糸見はどうして俺と一緒に帰りたかったの？」

といわれ糸見は

「私も山さんと一緒に帰りたかったんです。」

と言つて加奈子も

「わ・・私も同じだよ。」

と言つてわかれ道まで歩いて俺は

「じゃあ俺はここで」

と言つてリオとコレットは

「「バイト頑張つてくださいー。」」

と言つて俺は

「あ・・ありがとう」

と言つて俺は家に急いで帰つた。その後糸見がリオとコレットに

「あの・・すいません。」

と聞かれリオとコレットは

「「はい、何でしょ?」」

といわれて糸見は

「お一人はどうやって山さんと友達になつたのですか?」

と聞かれリオから

「私は天界から来てまだこの町のことや学校のことが詳しくなかつたので、教室がわからなかつたときには山さんが助けていただいたのでぜひ友達になりたいと思つていて山さんの詳しく述べたのでぜひ友達になりたいと教えてもらえたので山さんと一緒に居た眞魅先輩からお話をいただいて私はもつと山さんのことを知りたい、そして友達になりたいと思つて山さんに声をかけたんです。」

と言つてコレットも

「私も天界から来て、入学式後に私は3人の知らない人から声をかけられ危ないとこを山様に助けてもらつたので私もリオちゃんと同じで山様のことをもつと知りたくそして友達になりたいつと思つたので声をかけました。」

と言つて糸見は

「そつかうじやあ私も自己紹介しますね。私の名前は赤崎糸見あかさきみと言います。糸見つと呼んでください。」

と頭を下げた。そして加奈子も

「わ・・私の名前は間先加奈子かんさきかなと言います。

よ・・よろしくです。」

と言つた。そしてコレットとリオさんは

「「これからもよろしくお願いします。加奈ちゃん糸見ちゃん」

と言つて加奈子が

「あの・・それで・・2人は山ちゃんのことをどう思つてますか?」

と言つて2人は

「私はもつと友達関係を深く接していきたいと思います。」

「私は・・もつと山様のことをいろいろ知りたいです。」

と言つて俺が知らない間に4人は仲良くなつたのであつた。(第8章終わり)

## ゴールデンウィーク

学校生活とバイト生活療法を維持しながら俺は毎日の生活を過ごしていたが入学式で小学校以来合わなかつた加奈子と糾見と会い、そしてリオとコレットまで友達になつた俺は前より早く4人を避けるように逃げていた。そして・・・  
「ゴールデンウィーク（以下GW）前に眞魅先輩が「山君ゴールデンウィーク用事ある？」と聞かれ俺は

「バイトはGWは休みになつてるが・・・」

と言われ眞魅先輩が

「じゃあさ～そのGW中暇なら遊ばない？」

と言われ俺は・・・

「拒否権は？」

と言つて眞魅先輩が

「拒否権なし！」

と言われ俺は

「分かりました・・・」

と言つた。そして眞魅先輩が

「じゃあ～GWが始まつた休みの日に遊園地に行こう～」

と言われ俺は・・・

「眞魅先輩に任せます・・・」

と落ち込むように行つた。そして眞魅先輩が

「じゃあ5月2日の夜に電話するね～」

と言われ眞魅先輩はうれしそうに走つて行つた。

5月2日の学校終了後俺はいつも通りに4人につかまる前に早く帰つて4人は

「・・・はあ・・・」

と落ち込んでいてリオが

「山さん帰るのがはや～い・・・」

と言つてコレットさんが

「やうですね・・・話したいことが多いのに・・・」

と言つて糞見が

「やうだね～小学校のときはそんなことが多いのに・・・」

と言つて加奈子は

「・・・・・」

と無口になつていたその時

「三本連碁君いますでしょうか?」

と言つてリオさんが

「あ、眞魅先輩。山さんなりもひ帰りましたよ・・・」

と言つたら眞魅先輩が

「はや！山君中学校から帰るスピード速くなつたね～

次は捕まえるぞ～」

と張り切つていたらコレットが

「眞魅先輩山様に用事でしようか?」

と言われ眞魅先輩は

「うん。まあ明日のことですね～まあ後で電話掛ければいいかな?」

と言われリオさんが

「眞魅先輩はいいですね～山さんのことをよく知つていて・・・

と言われ眞魅先輩は

「やう？私も山君を知つたのは中学校に入る前に会つたんだけど  
やつぱり最初は暗くてね。私も何回か挑戦をしてやつと話して  
くれたんだよ。それと高校も誘つたのも私だよ～。」

と言つて4人は

「・・・・・やうなんだ・・・」

と言つた。そして眞魅先輩は

「あ、そうそうみんな明日用事はあるの？」

と言つてコレットは

「どうしてですか？」

と聞いたので眞魅先輩は

「明日山君と遊園地に誘つたんだけどみんなはどうかな？」

と聞いてみたの。」

と言われリオとコレットは

「「ぜひ行きたいです」「

と言われ眞魅先輩は

「私？人じやね～さすがに山君も暗くなるかな？つと思つてたから2人が来てくれる助かるよ。で・・

2人はどうするの？」

と言われ糸見さんは

「私たちもいいでしょうか？」

と聞かれ眞魅先輩は

「別にいいよ～確か赤崎糸見さんと間先加奈子でしたよね？」

と言われ糸見は

「そうです。なぜ？私たちの名前を？」

と言われ眞魅先輩は

「秘密」ていうか・・山君から教えてくれたんだけどね」と言われ加奈子が

「私たちも一緒に行つてもかまいませんか？」

と言われ眞魅先輩は

「まあ～明日はみんなで楽しみましょう！まだ学校が始まつたばかりで山君のことも知らない人もいるし学校で疲れてるかもしれないからぱ～と遊びましょう！」

と言われ私たちは

「「「「はい！」」「」」

と言つて眞魅先輩は4人に明日の集合時間を教え家に帰つた。

それを俺は知ることなく明日遊園地に行くことになった。（第9章  
終わり）

## 遊園地 その1

遊園地に行く前に1本の電話が鳴った。そして  
「は～い山君私で～す。」

と眞魅先輩が電話がかかって俺は  
「何でしょうか？」

と言った。眞魅先輩が

「明日の遊園地の件で電話です～。明日11時に  
場所は山君のアパートの前にね。」

と言われ俺は眞魅先輩に

「分かりました。」

と行つて眞魅先輩が

「あ、そうそう。明日サプライズがあるから  
楽しみに待つてね～」

と明るく言つたので俺は

「分かりました。。。」

と苦笑しながら行つて電話が切れて俺は今日の勉強の  
復習をして明日のために早めに就寝をした。そして朝  
8時に起きた俺は毎朝習慣でトレーニングとして  
家から10キロ離れた湖まで走つてまた10キロで  
走つて家まで戻るのが普通になつた。そして家に帰つて  
朝ごはんを食べていいろいろ準備をしてたら11時前になつて  
アパートの下に眞魅先輩がいて

「お、早いね～山君。おはよう～」

と言つて俺は

「おはよう～ざいます。眞魅先輩。では行きましょうか

と言つて眞魅先輩が

「も～。学校じゃないから眞魅先輩つていうのはなしよ。  
あ、待つてあと4人来るから少し待つて」

と言われ少し待つていたら4人が現れ

「「おはようございます山さん」」

「おはようございます山様」

「おはよう・・・山ちゃん」

と4人が現れうちは?を出してて眞魅先輩が

「あ~山君はつたえてなかつたけど誘つたのは僕なんだ~

前に打ち合わせに教室まで行つたんだけど・・・

山君毎回早く帰るから・・・んで・・・4人が行きたそعدだつたから  
誘つたわけなんだ~」

と言つて俺は

「分かりました・・眞魅には負けました・・」

と俺は少し落ち込んだ。それをみてコレットが

「大丈夫ですか?山様」

と言われ俺は

「ああ・・大丈夫だよコレット。ありがとう」

と言つて眞魅先輩が

「まあ、みんなそろつたから行きましょう!」

とウキウキしながら俺たちは遊園地に向かつた。

そして・・ついてから俺たちは最初からジェットコースターや  
お化け屋敷など定番のアトラクションを楽しんで

最後に眞魅先輩が

「観覧車に乗ろう!」

と言いだし・・俺が

「5人で行つてらしゃい」

と言つて眞魅先輩が

「それはだめ!あ、もちろん全員一緒じゃなく  
山君と1人ずつ乗ることでいいかな?」

と言われ俺は

「拒否権は?」

と言われ眞魅先輩が

「だ～めーみんな山君にいろいろ話したいことが  
あると思うから山君は5回乗つてもううから」

と言われ俺は

「分かりました・・・」

と言つて順番は加奈子、轟見、コレット、リオ、眞魅の  
順番で乗ることになった。（第10章終わり）

## 遊園地 その2

まず、観覧車をあまり乗りたくない俺は眞魅先輩から拒否権なしで5回も乗らないといけなくなつた。しかも・・1人1人・・・うちは・・がつかりしたけど・・眞魅先輩にはお世話になつてたから仕方なく乗つた。まずは加奈子からだ

「いってらしゃいー」

と眞魅先輩が行つて俺と加奈子は観覧車の中に入つた。入つて1分後加奈子から

「今日はありがとうね」

と言つて俺は

「お礼なら眞魅先輩に言つてね。」

と言つた。加奈子は

「うん・・・そうだね。山ちゃんこの前のこと怒つてる?」

と聞いたので俺は

「いや、気にしてない。」

と言つた。加奈子は観覧車が1周回るまでに俺に質問を考えたらしく質問をしてきた。

「山ちゃんなぜ私たちの前にいきなり居なくなつたの?」  
と聞かれ俺は親がなくしておばあちゃんの家に住んでもらい学校も転校したけどその時は誰も話したくない状態のことをいろいろ話した。そして加奈子は  
「そつか・・・。山ちゃんも大変だつたんだね・・・。  
でもこれから高校でも久しぶりに会えたからまた一緒に遊ぼうね!」

と言つて俺は

「ああ・・よろしく。」

と言つた。そして1周終わつて次は糸見が乗つた。

「山さん疲れてませんか？」

と言われ俺は

「ああ・・大丈夫だよ。糸見は疲れてないのか？」  
と言つて糸見は

「私は・・・大丈夫だよ。山さんと小学校以来  
遊んだの初めてだつたんだ。だから楽しかつたよ  
今度山さんの家に遊びに来てもいい？」

と言つて俺は

「バイトの日じやなかつたら別にかまわないうが・・・」  
と言つて糸見はすく喜び

「ありがとう！じゃあ・・今度私が料理作るから  
今度食べてくれる？」

と言つたので俺は

「ああ・・構わないよ。でも無理して作らなくとも  
いいからね。」

と言つて糸見は

「分かつた！」

と言つて観覧車が1周回つた。次はコレットが乗つた。  
「山様私初めて遊園地に行きました。」

と言われ俺は

「天界には遊園地はないのか？」

と質問をしてコレットは

「そうですね・・・」ういう楽しいところが1つも  
ないのでよ・・でも・・この町はまだ詳しくないので  
初めて遊園地行つてすく楽しめました。また今度  
連れてつてもらえませんか？」

と言つたので俺は

「ああ。バイトの日じやなかつたら・・いつでも構わないよ。  
と言つてコレットが

「ありがとうございます。山様。山様のバイトは・・ビリですか？」  
と聞いたので俺は

「普通のファミレスだよ。」

と言つてコレットが

「今度連れてつてもらえませんか？」

と行つて俺は

「別にかまわないが・・・あまり面白くないぞ？ 食べるだけだし。  
と言つてコレットが

「別にいいです。山様と一緒にいる時間がすごく大切な  
今までよろしくお願ひします。」

と頭を下げられ俺は

「ああ、分かったよ・・よろしくな。コレット」

と言つて観覧車が一周回つた。次はリオだ

「山さん町いろいろ案内してくれてありがとうございます。  
と言つて俺は

「まだ遊園地しか教えてないだけな・・」

と苦笑してらりオが

「いえ・・1つでも教えてくれてとてもうれしいです。  
しかも天界には遊園地がないのでとても楽しかったです。

また遊園地とか私が知らない場所を教えてくれませんか？」  
と言つたので俺は

「ああ、別にかまわないよ。」

と言つた。リオは

「ありがとうございます。今度山さんのアパートに行つても  
いいでしようか？」

と言つたんで俺は

「ああ、別にかまわないよ。だが天界のお嬢様が俺のところに  
行つても退屈だからな・・・大丈夫か？」

と聞いたのでリオが

「そんなの関係ありません！私はいろいろ山さんのことを

もつと知りたいのでよろしくお願ひします。」

と周回った。最後に眞魅先輩

「山君今日はお疲れ様~」

と言つて俺は

「お疲れ様・・眞魅」

と言つて眞魅先輩は

「今日はいろいろありがとうございました~」

と言つて俺は

「気にしないでください。」

と言つた。眞魅先輩は

「だつてさ山君にまだにさ昼休みや学校が終わつた後にすぐ帰るからさみんな山君と帰りたいのにさつさと帰るからさ、みんな困つてたから誘つたわけ

と言われ俺は

「眞魅。俺の性格分かるよな?」

と言つて眞魅先輩は

「もちろん。だから私がみんなを誘つたわけ。だけどね加奈ちゃんや糸見ちゃんは私から山君の過去を教えてないからさちゃんと説明してあげてね。コレットちゃんやリオちゃんはちゃんと理解して山君ともつと友達になりたいって言つてるだからさ~もつと仲良くなれてあげないと。」

と言われ俺は

「努力します・・・。」

と言つて眞魅先輩は

「よし!じゃあもう少しで1周回るからこれからは高校での思い出をたくさん作ろううね~山君」

と言つて観覧車が1周回つた。そして

「お疲れ様、みんな今日はお疲れ様でした~まだGWは少しあるからゆっくり休んでね~じゃあ山君のアパートに行こうか。」

と言つて俺たちは俺のアパートまで歩いて  
着いてからみんな解散をした。俺は・・・  
「楽しかつたけど・・これから大変だな・・・」  
と言いながら家に入った。（第11章終わり）

## ある日のこと

眞魅先輩から誘われた遊園地でまさかの俺1人と  
眞魅先輩、加奈子、糸見、リオ、コレットと  
一緒に行くとは思つてもなくまさかの眞魅先輩から  
「1人ずつ観覧車に乗ろう!」

と言われ俺と一緒に1人ずつ乗った。まさかの俺が  
5回乗るとは・・・。でその後彼女達はよく仲良くなり  
遊園地に行く前は俺は昼休みになつた時と放課後になつたときは  
すぐに帰れたがまさかのつかまつてしまい、このごろは5人（俺含  
めて6人）

で一緒に帰ることが多くなつた。嫌ではないが・・・  
さすがに男1人女5人はやめてほしい・・・。周りが・・・怖いから  
で・・・いつもどおりにバイトに言つた俺は黙々とやつていつたら、  
「お~い山本。今大丈夫か？」

と店長から言われ俺は

「大丈夫ですよ？」

と返事をしたら、店長が

「お前にお客様が来てるぞ。かわいいじゃないか」まあ

今から休憩を30分ぐらいあげるから一緒に言つてもいいから」と言われ俺は

「別に・・・休憩はしなくてもいいですから・・・」

と言われ店長が

「そのお客様がさ、店の前に1時間もいるのよ・・・。  
んで俺がそのお客様に聞いたら山本を待つてるらしいから  
少しだけしか休憩は出せないけどどうか食事でも言つたらどうだ?  
それかここで一緒に食べても構わないぞ?まあ金は自腹だけどね」と言われ俺は

「そうですか・・・じゃあ・・・」で一緒に食事をしますね。

すいません・・・

と頭を下げる店長が

「いいよ。気にしないで。俺は山本のおばあちゃんと眞魅ちゃんこむか

お世話になつてゐるから、これぐらくなね。」

と言つて店長が言つて俺は少し着替えて店の入り口に見たら

そこにいたのは

「コレットか・・・」

とつぶやいたらコレットが

「山様こんばんはです。」

と頭を下げる俺は

「どうしたの?ここにいて・・・」

と言つて、コレットが

「前に山さんにバイト先を教えてもらつて今日は確かバイトだつた  
はずなので

見に行つたのですが・・・山様がいなくてどうしているのかを探  
してまして」

と恥ずかしそうにうつた。それを聞いて俺は

「だから店長に聞かれたんだね。」

と言われ、コレットが

「は・・はい・・・すいません・・・」

と言われ俺は

「気にしなくていいよ。だけど入り口の前に1時間もいたらね  
ほかのお客さんや店の人たちにも迷惑かかるから今度から  
行く時はメールでもいいから教えてくれ。」

と言つて俺はメールアドレスをコレットに渡した。そして  
俺とコレットは店の中に入り30分も休憩時間をもらつて  
席に座つた俺は

「さつき店長から30分間の休憩時間をもらつたからここで  
食事をしようと思つたがコレットは一緒に食べるか?」

と言われコレットは

「いいのですか？」

と言われ俺は

「ああ、大丈夫だよ。俺が奢るから好きなものを選んでくれ」と言つて俺たちはメニューを選び料理が出てきたときに店長が俺に耳を当て

「がんばれよ」

と言つて離れて行つた。そしてコレットがいろいろ質問をしたりお話をしたら

「おつとそろそろ休憩時間が終わるな。次は外に待つてたらダメだよ。

」この料金は俺が払うから。また明日ね。」

と言われコレットは

「わかりました・・・奢つてもらいありがとうございました。今日はすゞしく楽しかつたです。では、また明日」

と言つてコレットは店を出て俺は会計のところに行き代金を支払つて店長が

「彼女？」

と言わされたので俺は

「いえ、学校の友達です。」

と言つて、俺はバイトの続きをしたのであつた。（第1-2章終わり）

## 家に訪問

「コレットが俺の店に来てから2日後俺は家の掃除をしていたら

「ピンポーン」

と音が鳴り俺は

「はい、今行きます～誰でしょーか？」

と聞いたらそこにいたのはリオと糸見だった。

そして俺は

「どうしたの？しかし珍しい組み合わせだね。」

と言いリオと糸見は

「本当はね、今日5人で行こうとしたんだけどね

加奈子は部活、眞魅先輩は用事、コレットは家庭の用事でこれなかつたのよ。でいけたのは私とこれつとさんね」と言われ俺は

「そつか・・・

と言つてリオさんが

「ここが・・・山さんの家なんですね。」

と言い俺は、

「そただけど・・・家つていうかアパートに住んでる学生かな？」

汚くてごめんね。」

と言われリオは

「いえ・・・汚くはないですよ。でも・・・いつも山さんはいい

1人で住んでるのか～」

と興味をもつたりオを見て俺は

「うん、ここが一番安く使いやすいアパートだからね。

バイトの給料と学費で何とかいけそうなどころだから助かったよ。で・・・2人は今日はどういったご用件で？」

と質問をして2人は

「今日は2人で山さんにごちそうを作りたいと思い来ました。もちろん材料も買つてきたので一緒に食べませんか?」

トリオは言って俺は

「2人とも家の夕ご飯は食べなくていいのか?」

と言われ2人は

「私はお父さんに伝えたから大丈夫ですよ。」

「私はお母さんに山さんにご飯を作りたいつと言つたら一緒に食べてきなさいと言われました。」

と言つて俺は

「そつか・・・じゃあ・・・頼むよ」

と言い2人は

「うん!」

「はい」

と言つて2人はキッチンに向かつて料理を作つた。そして・・・見たのは今日の夕ご飯のメニュー

・からあげ

・サラダ

・味噌汁

・混ぜご飯(茸類、ごぼうなど)

結構おいしかつた。そして片付けまでしてくれて俺は

「今日はありがとうございました。糴見、リオ。おいしかつた。」

と言つて2人は

「山さんが喜んでくれてうれしい」

「山さんに1回料理を作りたくつて頑張ったかいがありました。」

と言つてリオが俺に

「山さん・・・2週間後に中間テストがありますよね?」

と言つて俺は

「ああ、確かあつたね。」

と言われリオが

「私ね・・・勉強が少し駄目だから・・・もし・・・よかつたら

勉強教えてくれませんか?」

と言われ俺は

「俺でいいなら別に構わないぞ?だが・・俺よりは  
糞見のほうが教え方がうまいぞ?」

と言われ糞見は

「いえ・・私は・・・」

と恥ずかしくなつて俺は

「まあ・・今週の土日に勉強教えようか?」

と言われリオが

「本當ですか? ! ジゃあ・・私の家に来ませんか?」

そこなら辞書などがあつていろいろ教えてもらえるから

と言われ俺は

「俺が言つてもいいのか? うちでも構わんよ?」

と言われリオは

「いえ・・・今日は山さんの家に来たから今度は私の家に  
来てください。そudad! 糞見ちゃんも来ない?」

と言われ糞見は

「私も行つてもいいでしようか?」

と聞かれリオは

「もちろん! だつて・・私は・・勉強が苦手だから2人に  
教えてもらいたいから・・・」

と言つて俺が

「そうだな。糞見がいたら俺も助かる。来てくれるか?」

と言われ糞見は

「私でよければ、よろしくお願ひします。」

と頭を下げました。そしてリオが

「じゃあ~今週の土曜日に1~3時に山さんの家で集合でいい?」

と言つて俺たちは

「了解」

「わかりました」

と言つて2人は帰つて行つた。

(第14章終わり)

## リオの家

リオと糸見が俺のために家まで来て料理を作ってくれた。そして・・・・・リオが2週間後に中間テストがあることでの勉強が苦手らしく一緒に勉強会をしようつといい数日後の土曜日の13時に俺はアパートの前に待つてた。そして「山さん～お待たせ～」

と先に来たのがリオだ。

「いや、俺も今来たばかりだ。」

と言つてリオは

「そっか～今日はよろしくお願ひします。」

と頭を下げた。そして俺は

「ああ、俺もなるべく分かりやすく教えるが俺より糸見のほうが教えやすいと思うぞ？」

と言つてリオは

「そうですか・・・分かりました～」

と話してたら

「山さんお待たせしました。」

と糸見が走ってきた。俺は

「そんなに焦らなくともいいだぞ？」

と言い、糸見は

「ちょっと遅れてしまいすいません」

と言つて俺らは大丈夫つと言つてリオが

「後からねコレットちゃんが来るから。だけどね・・

加奈子ちゃん今日部活だつて・・明日はこれるつて言つてた・・・・

と言つて俺は

「そつか・・・」

と言つて俺たちはリオの家に歩いて行つた。そしてリオの家に

着いた途端俺は・・・

「で・・でかい家ですね・・・」

と言った。なぜなら城みたいな家だつたから・・リオは  
「そうでもないよ? 天界はこんなのが普通なんで・・・」

と言つて糞見は

「普通ですか・・・」

と焦つてた。リオが

「まあ、とにかく・・入つて〜」

と言つて俺と糞見は

「「おじゃまします」」

と言つて入つてリオの部屋に入つてリオがお茶を取つてくると言つて  
部屋を出た。俺は糞見に

「広い家だね・・・」

と言つて糞見も

「そうだね・・はじめてみました・・・」

とお互いが驚いていた・・・。そして数分後リオが

「お茶を入れてきました〜じゃあ・・勉強教えてください。  
と言つて俺たちは勉強を教えた。」

（第14章終わり）

## 勉強会 その1

リオの家を見て俺はすぐ驚いたけど・・・なんとか落ち着き俺とリオと糸見で先に2週間後のテストに向けて勉強をした。

「山さん～ここを教えてくれませんか？」と出されたのが数学だった・・・。

「ん～とねここはこの公式を使うといいよ。もう少し簡単な方法はこれを使うといいけど」と数学の問題を解いていった。俺と糸見は数学の問題を解きながら分からないとこりをお互いに教えながら解いていつてリオが

「そりゃあ、なんで山さんは糸見ちゃんが勉強が得意って言つたの？山さんも勉強得意そうなのに」

と質問をして俺は

「ん～それは・・・初めて糸見と会つたときから数年かけて糸見は毎回100点近い点数を取つてたからな・・・俺とか・・・40～80が多くつたけどね・・・」

と言つて糸見は

「いえ・・・私は復習予習をして、分からないことじろをお母さんに聞いたりしていたから・・・」

と恥ずかしくなつて俺は

「まあ・・・俺は元々高校に入るつもりはなかつた・・・これ以上おばあちゃんの遺産を使いたくなかったから・・・だから中卒で仕事をしていこうとしたら眞魅先輩から大学まで行かないと言つたら眞魅先輩がいるこの学校に行くことになり眞魅先輩から厳しく指導してもらつたんだ・・・だから今では大体のことは分かるようになつてきたがまだまだだな・・・」

と言いいリオが

「そ、うなんですか・・・私も頑張るわ・・・」

と言つて俺たちは黙々と分からないとこりは教え合つて勉強をしてくるつむに

チャイムが鳴つてリオが

「ちょっと行つてくるね〜」

と言つて部屋を出た。そして黙々を問題を解きながらリオが帰つてきて

コレットが来た。

「お待たせしました。山様私も分からないとこりがあつたら教えてください。」

と言つて俺は

「ああ、俺でよかつたら教えるけど俺よりは糞見に聞いたほうがいいぞ? 教え方もうまいし・・・」

と言つてコレットが

「やうなんですか〜山様糞見ちゃん分からないとこりがあつたらよろしくお願ひします。」

と言つて俺たちは勉強をした。そしてテストの教科は数学、国語、英語、理科

の4つで今日は数学と国語を解いていき理科の勉強をしあつと思つたとき

1本の電話が鳴り俺は

「はい、山本です。」

と言つて相手が

「店長だ。すまんな山本ちょっとお願いしたいことがあつて・・・」  
と言つて俺は

「何でしょうか?」

と言つたら店長が

「今日来る店員が熱を出してこれなくなつた・・だから・・

今日出勤できなか? 無理は言わんが

と言つて俺は

「いえ・・・大丈夫ですよ。店長にほひてお仕事になつてます  
し、

では今から行きますね。」

と言つて店長が

「ああ。すまんな休日なのこ・・・」

と言つて俺は

「気にしないでください。俺は店長にほひてお仕事になつてます  
では。今から行きますね。」

と言い電話を切つて俺はみんなに

「ごめん、急にバイトが入つたから俺はいじで帰るね。」

と言つてリオが

「そうですか・・・また明日ようじへお願いします。」

と言つて俺は

「ああ、明日も来るからまたよろしくな  
と言つて2人は

「ほひ」

と言つて俺はリオの家を出て店に向かつて言つた。（第15章終わ  
り）

## 勉強会 その2

昨日はリオの家に行きリオ、糸見と一緒に先に勉強会をして途中でコレットも来て一緒にやつたが、急にバイトの店から連絡が来て俺はそのままバイトに向かつためにリオの家を出た。そして一日目1~3時にリオの家の前に来たらリオが「山をなんいらしゃい~もうみなさんいらしゃつてますので」と言つて俺はリオの家に入り部屋まで言つたら

「ほんにちわ~山様」

「ほんにちわ。山さん」

「ほんにちわ。山ちゃん」

と言つて俺は

「遅れてごめん。」

と言つたがみんなは大丈夫つと言つて俺たちは勉強をした。

俺と糸見はお互いに分からないとじろを教えていき

加奈子は自分でできるらしく黙々とやつたがリオとコレットが少し社会や理科が苦手らしく俺と糸見で教えながらやつていった。

「山さん。どうしたら年号覚えられるのですか?」

と言つて俺は

「ん~とね年号は数字を語呂合わせいよ。そいつのまつが

覚えやすい。例えば・・・1192年だと

1192(一一九二)つべりつとか語呂合わせを作ると

覚えやすいよ。」

と言つてリオは

「あつがとうござります。山さん」

と言つて俺は

「いえいえ。」

と言つてコレットが

「山さん原子記号の覚え方とかありますか?」

と聞かれ俺は

「ん～・・・ 確かね・・・」

と言つたら糞見は

「確かに覚えるのはH～Kまででよかつたねん～とね

H H e L i B e B C N O F N e N a M g A l S i  
P S C I A r K C a

水平リーベボクの船。七曲りシップスクラークか?  
つと書つ覚え方でいいはずだよ。まあローマ字読みを  
したら・・・いいと思こますよ。」

と言つてコレットが

「糞見ちゃんありがとう～」

と言つて糞見は

「いえいえ。私は覚え方はそれなので。」

と言つて俺は

「俺もその覚え方覚えようつかな・・・  
と言つて俺たちは黙々とやつていつた。  
そして・・・18時ごろ俺は

「じゃあ・・・今日は俺はこれで帰るね。」

と言つてリオが

「ヨセん今日はありがとうござります。またよりじへお願ひします。

」

と言つて俺は

「お礼なら糞見に言つて。俺は手伝いをしただけだから。」

と言つて糞見は

「私も手伝いをしただけですから。」

と言つて俺は

「じゃあまた明日

と言つて俺は家に帰つたのであった。（第16章終わり）

## 中間テスト

リオが俺と糸見に勉強を教えてほしいといわれ

中間テストの前の週にリオの家に初めて俺と糸見は

行つてまず3人で勉強をした。糸見は元々勉強が得意であり

俺はまあまあだから糸見が教えられるところは教えてもらい

糸見が無理な場合は俺が教えながらつというテスト範囲をしながら

問題を解いて途中でコレットが来て4人で勉強をした。しかし

コレットが来て数時間後にバイトに出てほしいと店長から言われ  
俺は店長にはお世話になつてからバイトに向かうために土曜日は  
はやめに帰つた。そして次の日に眞魅先輩以外で勉強会をした。  
そして俺と糸見はもうほとんど復習を終えてコレットやリオが  
分からぬところを俺や糸見で教えあつて勉強をした。

そして・・・月曜日～水曜日までテストがあり木曜日に全部  
結果を出され金曜日には全校のテストの結果で成績が優秀だけ  
廊下の掲示板に貼られていた。そして俺たちは40人クラスで  
4組眞魅先輩は45人クラスで5組あり俺は外を見ていたら  
5人が来てリオが

「山さんどうでしたか？」

と質問をした。俺は

「まあまあ。だつたよ」

と言つた。なぜなら数学が85点国語が65点英語が60点  
理科75点社会が67点だつたからだ。いい点数でもないし  
悪い点数でもない。まあまあだから俺は気にしてない。

「リオは？」

と聞いたらリオは

「私は～山さんと糸見ちゃんのおかげで結構いい点数を取りました。  
ありがとうございました。」

と頭を下げた。俺は

「お礼なら糞見に言つてあげて。俺は何にもしていないから。」と言つた。糞見は

「私はなにもしてませんよ。」

と恥ずかしくなつた。んで何にも話しかけない2人を見て俺は

「コレットと加奈子は？」

と言つたら2人は下を向きながらコレットが

「赤点はなかつたけど・・・英語がダメだつたね・・・」

と言つて加奈子は

「私も赤点はなかつたけど数学と社会がダメだつたよ・・・」

と悲しそうに言つたので俺は

「まだ中間テストだから期末でがんばろう。まあ赤点じゃなければいいじゃないかな？」

と言つて糞見が

「そうですね赤点じゃなければ大丈夫ですし・・・期末では分から  
ない

所は教えますので。」

と言つてリオが

「まあ暗い話はやめて放課後にみんなでカラオケに行こうー・もちろん眞魅先輩も呼んでみんなでパートと歌おう!」

と言つて俺は帰りたかつたが強制連行されカラオケに行つた。

そろそろ結果だがクラスで俺は10位糞見は1位コレットが20位  
リオが12位加奈子が22位だった。眞魅先輩はクラスで1位  
学年では俺は20位糞見が4位コレットが30位リオが24位  
加奈子は35位で眞魅先輩は学年でも1位だった。どんだけ頭いい  
ですか・・

つと思つて俺たちはカラオケに向かつた。（第17章終わり）

## 中間テスト後

中間テストが終わりテスの結果が返ってきて俺は  
帰りたいけど俺はみんなにつかまりカラオケに向かった。  
俺は元々歌がうまくないのでみんなの歌を聴きながら  
5時間がたつて解散する前にコレットが

「みなさんまだ先ですが・・・夏の予定とかありますか?」  
と言われリオは

「コレットちゃんもしかして・・・?」

と言われコレットは

「そのまさかですよ?」

と言つて俺は

「まあ・・・夏休みはバイトがない日なら別にあいてるけど・・・」

と言つて加奈子は

「私も部活がない日なら大丈夫です。」

糸見は

「私は大丈夫ですよ~」

眞魅先輩は

「私も大丈夫かな~部活は夏はなしだし~」

と言つてコレットは

「じゃあ夏休みの前半は私たちの天界に来ませんか?」  
と言つて俺はちょっと悩んだ。眞魅先輩は

「コレットちゃん天界は普通の人は行けないでは?」

と聞いたのでコレットは

「いえ。普通の人だけは行けないけども私たち天界人と  
一緒になら大丈夫だよ~みんな来てくれる?」

と言われみんなは

「「「「「行きます~」「」「」「」」

と言つた。俺は

「俺だけはバスはダメか?」

と聞いた。それを聞いたリオは

「何ですか?」

と言われ俺は

「ちょっと・・天界だけはね・・・」

と言われ眞魅先輩は

「山君天界人に何かしたの?」

と聞いたので俺は

「いや・・何にもしてないだが・・・」

と言つたので眞魅先輩は

「じゃあ強制連行~」

と言われ俺は強制連行されることになった。

そして話が終わり俺は1人で家に帰った。(第18章終わり)

## 天界への準備

中間テストが終わりコレットが突然に  
「夏休みの前半に天界に行きませんか？」  
と言われ俺は少し困ったんだが眞魅先輩に  
強制連行され行くことになった。

だが・・・その前に中間テスト後の1ヶ月後に  
期末テストがあること。なので期末テストまでに  
土日を使って勉強会を開くことになった。

その時もリオが

「勉強会は山さんの家じゃ迷惑だし・・・

私の家に来て〜」

と言われ俺たちはありがたりオの家に行き、  
リオ、コレット、加奈子、俺はわからないところを  
羈見に教えてもらい解いていこうと言つ話なんだが  
なぜか学年が違う眞魅先輩も来ていてみんなで解いていくことに  
なつた。まあそれも悪くないかつと思い期末テストまでに  
がんばつて内容を理解してテストに向かつた。そして  
結果は中間テストよりみんな点数が上がつた。

まあ眞魅先輩は毎回100点ばかりなのであまり気にして  
ないらしい。んでなんとか俺たちは欠点を出すことがなく  
夏休みを迎えた。俺は夏休みに入つてから一気に夏休みの宿題を  
片づけていた。なぜならめんどくさいからなのだ。  
んで勉強をしてる途中で一本の電話が鳴つた。

「はい。山本ですが

と言つて声がしたのは・・・

「山様ですか？コレットです。」

と聞こえたので俺は

「コレットがどうした？」

と言つてコレットは

「えーと・・前に夏休みの前半に天界に行くことを伝えたので  
一応来週の月～水曜日まで大丈夫でしょうか?」

と言われ俺は

「ああ、バイトのほうには休みをもらつから大丈夫だ。」

と言つた。コレットは

「山様前に自分はバスっと聞きましたが・・・何かあつたのですか  
?」

と言つて俺は

「ああ・・・ちょっとな。まあ気にしなくていいぞ。俺は

逃げるだけはしないから。ちゃんと行くから」

と言つてコレットは

「そうですか・・無理だけはしないでくださいね・・・

と言われ俺は

「ああ・・ありがとうございます・・コレット」

と言つて電話を切つた。そして俺は

「さて来週の準備しないとな・・」

と言つてまずは宿題をして準備をしたのであつた。  
(第19章終  
わり)

## 天界へ

リオが提案した天界に行くことになつた俺たちは約束の日にうちに前にみんなが集まつた。

そして・・・

「みんな～準備いいですか？」

とリオが言つてコレットが

「じゃあ今から魔法を唱えますので皆さん目をつぶつてください。」

と言つて俺たちは目をつぶつたのを確認をしてリオとコレットは

呪文を唱えて

「「テレポート！」」

と言つて俺たちは天界に転送をした。そしてついた俺たちの周りには天界人がたくさんいた。そしてリオは  
「元々天界人は天界にいるときは天使の翼を出さないといけないの  
で・・・

天界人との見間違えがないようにするためですね。」

と言つた。俺たちはリオとコレットが住んでいる場所に向かつた。

「一応私が今日で火曜日と水曜日はコレットちゃんの家に泊まるので  
みんなよろしくね～」

と言つた。俺たちはリオの家に行き田の前にはお城がたつてて

「リオ・・・俺たちの世界にも家でかいけど・・ここもでかいだね・

・

と俺は言つた。リオは

「元々天界の人の家はこれぐらいが普通ですよ～。私たちが山さん達の

世界に言つて家が小さくつてびっくりしました・・・。」

と言つた。一応俺たちはリオの部屋に入つて俺はリオに

「部屋割りとか決まつてるのか？」

と聞いてリオは

「まだ決まってないんだけど・・・一応みんなと寝たいから大部屋で寝ようかな～っと思つてるよ～」

と言つて俺は

「俺はリビングで寝てはダメか?」

と言つてリオは

「え～山さんも一緒に寝ましょ～」

と言つた。俺は

「いやいや・・・そこは・・・男女関係もあるし・・・  
と言つたら眞魅先輩は

「いいじゃない?山君こいつの も経験してみたら?  
と笑いながら言つた。コレットも

「私ももつと山様のことをもつと知りたいので・・・  
できれば・・・一緒に寝たいです・・・」

と言つて他の人もいいよつと言つ声で俺は  
拒否権なしで一緒に眠ることを決定してしまつた。

その後俺はいやな事件に遭遇した。（第20章終わり）

## 天界へ その1

大部屋で寝ることに決まってしまった俺は落ち込みながら  
リオとコレットが

「天界の町を案内しますね〜」

と言つてみんなで外に出て町案内をした。

そして俺以外の3人は興味がありすゞく楽しそうに  
見ていた。そして気付いたことをコレットに聞いてみた。

「天界の通貨ってどんなもの?」

と言つてコレットが

「えーとこれですね。」

と見せたものが俺たちと同じものだつた。

「私も山様のところに行つてみて同じ通貨でよかつたので  
とても助かりました・・・」

と言つた。1時間ぐらい案内をしてコレットが

「あんまり離れないようにしてね1人だと危ないからなるべく2人で

1時間後ここに集合で〜」

と言つてコレットとリオの2手に分かれて買い物をした。

俺は興味がなかつたのでリオたちの買い物中に

店の外にいるつといつて外に見てたら1人の女の人が5人の  
男の人絡まつていてすごく怖がつてたので近くによつて女の人が

「やめてください・・・」

と言つたけど男の人は全く話を聞かずに女の子に近付けようとした  
ので

「やめてあげたら?」

と言つて男たちが

「ああ!俺たちにケンカをうつてるのか?」

と切れながら言つたので俺は

「いやケンカより1人に對して5人はやめたほうがいいよ。

彼女怖がつてゐるから。」「

と言つて1人の男が

「俺たちの邪魔をするじゃね！！」

と言つて男が俺の前に殴つてきて俺はきれいにかわした。

そして・・・男が

「俺たちをなめるなよ！」

と魔法を唱えて俺の前にうつってきたので俺は

「はあ・・仕方ないか・・」

と言つて誰も聞こえない声で

「リフレクター」

と言つた。俺の前には見えない盾が出て魔法を打ち返して男たちに向かつて魔法と直撃をした。そして男たちが気絶をして

俺は彼女に

「大丈夫ですか？」

と言われ彼女は

「ええ・・・助けてくれてありがとうございました。もしかして・・

あなたは・・・天魔人ですか？」

と言われ俺は

「そのことは秘密にしてくれませんか？元々俺は魔法は好き  
じゃないから全く使わないだけだよ。」

と言つて俺は彼女の前から離れてリオたちのところに戻つて行つた。

(第21章終わり)

## 天界へ その2

俺は1人の彼女に自分の本当の正体をばらしてしまい  
俺は急いで戻つて行つた。俺が戻つてきたときに  
ちょうどリオたちが店の外に戻つてきて  
「お待たせ！待つた？」

と言つた。俺は

「いや、大丈夫だったよ。」

と言つてリオは

「じゃあそろそろいい時間ね。また買い物は2日間あるから  
また行こう！」

と言つて俺たちはコレット達の集合場所に向かつた。  
そしてリオの家に戻り俺たちはゆっくりしたら1人の女性が  
「リオ様、お客様のお茶とお菓子を持ってきました。」

と言つて入つて行つた。そしてリオは

「ありがとう！」

と言つて俺も

「ありがとうございます。」

と頭を下げるとき助けた彼女だった。。。

彼女も俺を見て

「あら・・あなたは先ほどの・・・」

と行つてリオは

「リディア山さんのこと知つてるの？」

と言つてリディアつと言つ女性は

「ええ・・私さつきこの方に助けていただいたので」

と言つて俺はあわてて

「さつき買い物をしてるときに袋から物が落ちてそれを

ひろつただけだよ」

と言つてリオは

「そりなんだ～。あ、みんなに紹介するね～この方は  
ウチのメイドさんでリーディアっていうの～よろしくね～  
リーディアも休めるときは休んでいいからねいつも働きすぎ  
だから～」

と言つてリーディアは

「私はちゃんと休みをもらつてるので大丈夫です。ありがとうございます  
～じやいました。」

と頭を下げる部屋を出た。その後俺たちはリオ、コレットにて  
天界について話を聞いて俺たちは夜まで話を続けた。  
その後俺はリーディアに自分の正体をばらすことになるとは  
思つてもいなかつた・・・。（第22章終わり）

## 天界へ その3

あんまり行きたくない俺は天界に来てしまいしかも…  
自分の正体を気付かれてしまいすごく困った状態でリオの  
家に戻つたらまさかのリオのメイドさんだったの  
すごく困つてしまつた…。そして…。  
みんなはお風呂入るので俺は  
「ちょっと庭に出てくるね」  
と言つて俺は庭に行つた。そして…。  
「ふう…」  
とため息をついたとき  
「どうしたのですか?」  
と言われ振り返つたらリディアがいた。そして俺は  
「確か…リディアさんでしたよね?」  
と言われリディアは  
「はい。リディアです。こんなところでどうしたのですか?」  
と質問をされたので俺は  
「いえ…」  
と言われリディアは  
「あの…あなたの正体は…天魔人ですよね?」  
と言われ俺は  
「ああ…俺は天魔人だ」  
と言つてリディアは  
「そうですか…よかつた…。」  
と言つて俺は  
「なぜ? よかつたの? ?」  
と質問を返したらリディアは  
「だって…私も天魔人ですから…。  
つと言われ俺は

「え・・・・？」

と言った。リディアは

「私は・・・5年前まで私は家族で密かに暮らしてました。父は魔界人なので正体がばれるのでいつも家にいて母は買い物を行つたりして暮らしてましたが・・・そんなある日私と母は買い物をしていて帰つてきたら父がなくなつてました・・多分・・・私や母がいると天界人でも母は強大な魔力を持つた人で普通の天界人には負けることはないけど、しかし・・父も魔力は高いけど天界人の魔法には勝てないのです・・・だから・・父は・・・誰かに殺されたと私と母は思つて母は犯人探しをしてましたが

途中で事故にあつて・・なくなつてしましました・・・私は1人になつて

リオ様のお父様に助けてもらい今ではここでメイドとなつて働いてます。」

と言つて俺はリディアに自分の正体を明かした。（第23章終わ  
り）

## 天界へ その4

「そつか……じゃあ……正体を明かしてくれたお礼に俺も正体を明かすわ。

俺は……天魔王と知ったのは8年前だ。俺は元々天界には住んでなかつた。

なぜなら親は天界と魔界での有名な人で天界や魔界にいたら殺されてしまう

可能性があつたからだ……」

と言つてリディアは

「その……父と母の名前は？」

と言つて俺は

「俺の父と母は天界人の母は何代目か忘れたけどフィーナ女王つと言つてたな……」

魔界の父は10代目のダレオ・リオ大魔王つと言つてたな。」

と言つてリディアは

「知つてます……フィーナ女王様はこの天界の中でも魔力が高く天界人に

高く評価した方ですね。ダレオ・リオ大魔王は魔界の中でも最強つと

言わた人物ですね」

と言つた。俺は

「ああ、そうだ俺が知つたのはおばあちゃんが亡くなつた4年前のことだ

おばあちゃんから教えてもらったのは俺が生まれる19年前天界と魔界は

お互ひ助け合つてた。しかし……魔界人で一部は天界人と仲良くしたくない

つと言つて一部の魔界人は天界に向かつて攻撃を仕掛けるのを俺

の父は

止めた。しかし・・・1対100人以上を相手をして大ダメージを

食らった父は

天界の城の近くに倒れたときに母に助けられ。母は父を見て惚れてしまつて

2人は天界、魔界を飛び出して違う世界に向かつた。母はおばあちゃんが違う

世界にいることを知つてそこにしてそして・・俺が生まれ俺が5年生までは

平和に暮らしてたが・・・俺が5年生になつてから天界人が母を見つけられ

総攻撃を食らつて父と母は俺を助けるためになくなつてしまつた・。

そして俺はおばあちゃんと助けられ俺は親が亡くなつたのを悔んで魔力が膨大になつたのでおばあちゃんが俺に魔力を封印をしてくれて

今俺は天使の羽と悪魔の羽の交互の羽にはならずにするんだよ・・・  
だけど・・・おばあちゃんも年で俺が中学2年に亡くなつた。亡くなる前に

俺の魔力を抑えるために少し封印を解いてくれたので魔法は使えるけど

俺は使いたくなかった。なぜなら・・・使つたら俺は狙われても  
かまわぬのが

眞魅先輩、加奈子、糞見には迷惑をかけたくないし、コレットや

リオに

あつてから天界人だとすぐにわかつたが俺とかかわつたらリオやコレットにも

被害が合うかもしけなかつたから・・・俺は天界にも行きたくなかつた・・・

だから・・俺は・・・

と言つてリディアは

「だから・・・私にばれてしまつて余計に心配をしたわけね?」

と言つて俺は

「ああ・・・。ばれてしまつたなら俺はリオたちから離れてもいいと思つてゐる

被害があつても困るからね・・・」

と言つてリディアは

「大丈夫です。私はあなたのことは誰にも言ひません。ですから・・・

リオ様とコレット様。他の皆さまの悲しい顔を見せないでほしい

です・・・」

と言つて俺は

「今は大丈夫だと思つたが・・・しかし・・・今後いつばれるかわからぬ・・・

だから高校まではなるべくばれないようにするが俺は20歳になると

封印が解いてしまつたとおばあちゃんにいわれたから・・・もし

封印が

解かれたらリオやコレットには正体がばれるだろ?。もし俺の正体が

ばれたら俺はみんなの前から姿を消すよ。」

と言つた。リディアは

「分かりました・・・私もサポートで来たらサポートをせいでいただきますね。」

と言つて俺は

「まあ・・・リディアさんも迷惑かけないから・・・・とお互いが暗くなつたときに入つてきて

「山さん~お風呂どうぞ~。あれ?リディア山さんと話してたの?と質問をしたのでリディアは

「ええ、こういふと話を付き合つてもういました。」

と言つて俺は

「リティアさんお話ありがとうございました。では俺はお風呂に入りますので」

とお辞儀をして俺はお風呂場に向かった。（第24章終わり）

## 天界へ その5

俺はリーディアに正体を明かした。そしてその後の火曜日はリオの家にお世話になり、水曜日はコレットの家にお世話になった。そして木曜日にはいろいろ買い物をして俺たちは自分たちの住む世界に戻る準備をした。俺はコレットの家の家族にお礼をしてリオの家に向かつた。そしていたのがリーディアで俺は

「2日間お世話になりました。」

と頭を下げた。リーディアは

「こちらこそ楽しかったのでありがとうございました。旦那さまにはお伝えしますね。」

と言つて俺は

「ありがとうございます。」

と言つた。俺が去る時にリーディアが

「あ、山本さんの正体は誰も話しませんので気にしないでください。それと・・・これは何かあつた時に使ってください。」

と渡されたものはカードっぽい品物だった。

「これは?」

俺はリーディアに質問したらリーディアは

「今は何にもない普通のカードですが・・・もしあなたが天魔の力が發揮されたときにこのカードがあなたの力になるでしょう。」

「だけど・・・カード一枚によつて運命が変わるので決して危ないときには」

使つてください。お願ひします。」

と言つて俺は

「ああ、ありがとうございます。俺はもう魔法は使わないよ。」

高校までコレットやリオには迷惑かけないようにするから。」

と言つて俺はリオの家を出た。そしてみんなの場所に向かつた。

「みんな準備いい～？」

トリオが言ってみんなが大丈夫そうだったのでリオとコレットが  
「テレポート！」

と呪文をして俺たちは天界を後にして。そして俺のアパートの前に  
ついてコレットは

「みなさん楽しかったでしょうか？」

と質問をしたので眞魅先輩は

「うんうん。天界は初めて行つてみたいと思ってたから  
本当に楽しかつた。」

と大満足らしく糲見や加奈子も

「私もいろいろと経験しました。」

「私も天界に初めて行つたから本当に楽しかつたよ～」

とみんな満足だった。そして解散をした後俺はアパートに戻りうと  
したときリオが

「山さん少しいいでしょつか？」

と言つて俺は

「ああ、別に構わないよ。」

と言つて俺はアパートの中にリオを入れた。そしてリオが  
「あの・・・山さん天界は楽しかつたですか？」

と言つて俺は

「まあまあ・・・だつたかな?どうして?」

と言つてリオは

「いえ・・・天界でも山さんあまり楽しそうになかったので  
やつぱり・・・連れてきてまずかつたかな?つと思つてて・・・

と言つて俺は

「気にしないよ。みんなが樂しければ俺はいいから。  
と言つたがリオが

「でも・・・」

と言つた。俺は

「俺はみんなが樂しければいいから気にしないで。」

俺はひょっときつこ言葉を行つたがリオは

「そうですか・・・」

つとすぐ悲しそうに言つて

「まだ夏休みは始まつたばかりなのでこれからひまわりへお願ひします。」

リオが言つてアパートから出た。俺は片づけをして

「よし・・宿題をするか

と言つて机に向かつた。（第25章おわり）

## 夏と言えば・・・

俺たちは天界に行った後の数日後俺はもう少しで夏の宿題を終わるとこりだつた。今日も勉強をしていたら「山君～いる～？」

眞魅先輩の声がしたので俺は玄関に来てドアを開けて「おはようございます。眞魅先輩」と俺がいつたら眞魅先輩は

「もう学校じゃないときは眞魅でいいのに・・・」文句いいながら玄関に入つて眞魅先輩は「まあ・・そんな話は置いといて山君今何してた?」と聞かれ俺は

「ん～と・・今は夏の宿題をやつてましたね。」

と言つて眞魅先輩は

「ほ～もうはじめてるのか～えらいえらい。」

俺の頭をなでながら言つた。俺は

「それはともかく・・・今日はどうしたのですか?」

と質問をしたら眞魅先輩は

「ん～まあ。1つは山君の顔を見たかったと今何をしてるのかな～つとすごく気になつてきてみたのが1つ。もう1つは山君は多分だけどこの夏休みはどこにも行かない気でしょ?」

と言われ俺は

「予定がないからね・・・多分バイトや軽い運動をしてるだけだと思つよ・・・」

と言つたら眞魅先輩は

「あ～やつぱり～だから・・・私が山君に誘つと思つて來たのよ。んで・・・来週1週間私と糸見ちゃん、加奈子ちゃん、リオちゃんコレットちゃんと山君で旅行に行こうかと思つてるだけど行かない?」

と言われ俺は

「いいけど……俺は……」

と言つたら眞魅先輩は

「ああ、バイトね。大丈夫もう店長には私が言つてるよ～ちゃんと許可ももらつてゐるから～大丈夫～一応海鳴島に行こうかと思つてるのでよ

コレットちゃんやリオちゃんに天空に行かせてもらつていい思い出を

作らせてもらつたから、そのお礼に今度は私たちがリオちゃんとコレットちゃんにきれいな場所を教えたいと思つたから～まあ海鳴島は海もすつゞくきれいだし山も近いから最初は海に行き後から山に行こうかな～つと思つてるだけ～ダメかな？」

と聞かれたので俺は

「ああ・・・別にいいけど・・・ちゃんと計画を立てよ・・・俺は計画を立てるのがとても苦手だから・・・」

俺が言つたら眞魅先輩は

「うんうん。大丈夫私がいいスケジュールを作るから～楽しみにしててね！山君も楽しむと思うよ～うわ～楽しみだな～まあ、なるべくは山君の全体の負担は減らすから～安心してね～」

と言つて眞魅先輩はまたね～と家から出て行つた。俺は

「また・・・大変なことにならなければいいだがな・・・」

と言つて勉強に向かつた。（第26章終わり）

## 海鳴島へ その1

天界から帰ってきた俺たちは夏休みを過ごしたときに眞魅先輩から天界のお礼に今度は俺たちがリオとコレットに私たちのきれいな場所を案内しようつていうことできれいな海や山がみえる海鳴島に行くことになった。そして・・・

「うわ～すごくきれいですね～」

とコレットが言ってリオも

「本当に天界でもこんなきれいな海ははじめてみました～」  
とすごく喜んでいた。眞魅先輩が海鳴島に行く前に俺のところに来て低コストで行けるスケジュールを考えてくれた。しかも俺はバイトがあつたのに眞魅先輩がバイトがある俺を無理やりにも連れていくつもりだったので店長に交渉してたらしく俺も驚いてた。店長には申し訳ないつとすごく思う俺は・・・これが終わったらがんばって働くこうと思つた。そしてうちのアパートから出て4時間かかってやつと海鳴島についた。そして俺たちが住む宿に向かつて宿に着いたら

「いらっしゃいませ～」

女将さんが俺たちの前に来て挨拶をしてくれた。

「ここにちわ～これから5日間よろしくお願ひします。」

と眞魅先輩が俺たちの代表で挨拶をした。そして俺は眞魅先輩に

「俺は別室を取るよ。」

と言つたら眞魅先輩は

「え～山君がいないとつまらないからだ～め」と言われ俺は

「いやいや・・・さすがに・・・男1人で女5人はまずいでは？」

と言つたんだけど眞魅先輩が

「大丈夫～山君は変なことをしないから～」

張り切つて言われた・・・。そして俺は落ち込みながらみんなと一緒に部屋で寝ることになった。荷物を置いた後眞魅先輩がみんなに

「この後暇だから明後日山に行く」として今日と明日は海に行かない?」

と言われ女子4人は

「『賛成』」「『』

と言われ俺たちは海に行くことになった。海ならのんびりできると自分は思いながら俺たちは海に向かって歩いた。(第27章終わり)

「海だね」

眞魅先輩が言つた。そう俺たちは今海鳴島に来ているのである。

「眞魅先輩着替えるの早いですね。」

俺が言つたら眞魅先輩は

「うん、山君を待たせてはいけないと思つてね」と言われた。そして

「山君天界で何かあつたの?」

と言われ俺は

「なぜ?」

と返した。眞魅先輩は

「ん~・・・天界に来た時から帰る前まで山君あんまり  
樂しそうになかつたし・・何かあつたのかな~?つと  
ちょっと心配をしてたんだよ・・」

と言われたので

「いえ・・・はじめてきたので緊張をしてたから・・・  
でも楽しかつたですよ。」

俺は初めて眞魅先輩に嘘をついた。

「そりなんだ~。まあ山君が暗くなつたのがきになつたのが一つで  
リオちゃんやコレットちゃんにお礼をしたからここを選んだから山君も楽しんでね~一応ここ私の親戚の宿だったから  
眞魅先輩が言つた後に

「「「お待たせ~」「」」

と4人が俺たちのところに集まってきた。そして

「それじゃ俺も着替えてくるから先に遊んでて  
と言つて俺は着替えに行つた。着替え終わつたら

「山様~ビーチバレーしませんか?」

と言われみんなでビーチバレーをした。その後各自ビーチバレーや

泳ぎなどをしていく俺も少し泳いだ。

俺は疲れたから先にみんなより着替えて戻るつとしたときには

1人の女の子が泣いていた。そして俺は気になつたので

「どうしたの？」

と言つて女の子が泣いてぱつかりだつたので俺は

「もしかして・・親とはぐれたの？」

と質問をした。女の子が

「うん・・・」

と言つて俺は

「じゃあ一緒に探そつか」

と言つて俺は女の子と一緒に親を探していた。10分ぐらい探してたら

女の子の親を見つかつて俺はみんなのところに戻つていたら

「やつぱり優しいね山ちゃんは」

と加奈子が俺に言つた。俺は

「やつつか？」

つと言つた。加奈子は

「山ちゃんは昔から困つてる人にはすぐ優しかったからね～  
やつぱりうらやましい・・・私も・・・1回山さんに助けて  
もらいたいな～」

加奈子が言つて俺は

「加奈子が困つてるときはいつでも言つてくれ

恥ずかしながら俺は言つて加奈子は

「ありがとう・・・山ちゃん」

と言つて俺と加奈子はみんなの場所に向かつた。

(第28章終わ

(り)

俺たちは1日目海に言つていろいろ遊んで俺は小さい女の子を助けてみんなのところにもどつた。

そして、夜俺たちは夕ご飯を食べて俺はお風呂に入った。

「ふう〜〜。いい湯加減だ・・・まあこれからどうしようかな・・・」

と言つた。なぜなら俺は

「天界でまさかの天魔人のことを知られてしまつた。まあ俺はばれるのは仕方ないと思つてるけどまさか早くばれるとは思つてもいなかつた。しかし・・・リディアは俺のことを秘密にしてくれた。それはありがたい・・だが・・もし仮にリディアを助けたときリディア以外にも俺の正体がばれたら・・・リオやコレットは・・・いや・・リオやコレットはまだ大丈夫だと思うけど・・・加奈子や糉見、眞魅先輩のことが心配だ・・・俺は・・・この後俺は天魔人のことをばれずにいられるか・・・もしばれたら俺はみんなから離れよう。」

と決心した。露天風呂なので俺は空を見上げて

「きれいだな」

とつぶやいたその後俺は少し空を見上げた時に

「やつほ、山君〜」

と言われ俺が振り返つたらみんながいた。俺は

「(ニ)・・たしか・・・男湯だつたよな?」

と言つたら眞魅先輩は

「うん。そうだよ、女将さんに頼んで少しだけ貸し切りにしてもらつたんだよ、山君との思いでに〜」

と笑いながら言つた。俺は

「おいおい・・・それは勘弁してくれよ・・・」

と泣きそうになつた・・・そして俺は早く出たいのに  
5人がだらめつといわれ俺はみんなが出るまで残されてしまつた。  
解放されたのが・・1時間後・・なぜ・・・女の子は・・・  
長風呂ができるんだ・・・ありえん・・・つと俺はつぶいやいて  
部屋に戻つた。そして12時までみんなでいろいろと話して  
俺は端っこで寝たいのになぜか真ん中になつて俺は心の中で  
「やめて・・・」  
と言つて深く眠つた。（第29章終わり）

3日目の朝俺はみんなより早く起きたので静かに部屋を出て旅館の周辺を走っていた。俺は元々小さい時から体が弱くて天魔人のことをおばあちゃんから聞いて俺は少しでも強くなるためにこうして軽い運動だが・・・トレーニングをしていた。まあ、天界では運動が厳しい状態だつたのでやめてたがね・・・なぜなら1つはリディアさんに天魔人のことをばれてしまいもしかしたら他の人も気づいてるかもしないから。2つ目はもし早く起きて家に入るのに防犯ロックがかかつてしまい自分では入れない仕組みになつてるから・・・まあ、ここなら勝手に旅館から出ても俺は気にしなく気楽に走れるからいいだがな。

「ふう・・・・」

と俺は10キロ走ったところで少し足をとめた。そして俺は「おばあちゃん俺はとうとう人にばれてしまいました・・・これからどうしたらいいのかな・・・」

と海に向けて話した。まあ・・・おばあちゃんもお母さん、お父さんも

帰つてこないけど・・・俺は・・・俺の正体がばれるまではみんなのことを見りたい。だけど・・・ばれたらみんなはどう思うのか

俺はどうやって生きていけばいいのか・・・とか思つてたり・・・。

まあ、俺は気楽で頑張つてここにじゃないか・・・これから俺よりみんなの思い出ができるように・・・といながら旅館にもどつた。

「山君遅い~」

と俺が旅館に戻ると眞魅先輩が言つて俺は

「『めん』『めん』・・・」

と誤つた。眞魅先輩は

「どこに行つてたの？」

と言つて俺は

「外で走つてた。」

言つて眞魅先輩は

「すごい・・・今日山に登るけど大丈夫？」

と言つて俺は

「大丈夫だけど？」

言つて俺たちは朝ごはんを食べて山の準備に向かつた。  
山に登つて目的地に着くのが3時間後まあハードって言つたら  
ハードだけど・・・俺は山登りは慣れてるけど初めて登る  
リオ、コレットは仕方ないが・・・まさか・・・眞魅先輩も  
ダウンするとは・・・俺は  
「みんな少し休むか？」

言つて眞魅先輩は

「はあはあ・・・私は大丈夫だよ・・・  
と言つてたけど俺は大丈夫には見えない・・・てか加奈子なら  
大丈夫そうに見えるのはいいだけど糰見が意外に大丈夫そうなのは  
びっくりした俺は

「糰見は大丈夫なのか？」

と聞いたら糰見は

「私は昔お父さんが山登りが好きだったからよく行つたの。だから  
私は大丈夫だよ。」

言つて俺は

「それはすごい・・・まあ3人がきつそうだからもう10分休んで  
行こうか。」

言つて10分後俺たちは出発をした。そして休みながら登つて行つたから

普通は3時間で登れるはずなのに30分遅れて到着した。まあ初めて  
だつたら仕方ないかとか思つてたり。そして

「うわ～すごくきれい～」

トリオが喜んでいた。まあ、

「結構きれいな島だからね・・そりゃきれいなはずだわ。」

俺は心の中で言つた。まあみんながうれしそうに見ていたから俺はよかつたな・・・つと思つまあその後降りるのも大変だとか思いながら・・

結局往復で5時間かかつてしまつた。まあ仕方ないか・・・絶景だつたからとくに3人が筋肉痛にならないといいけど大丈夫かな?

つと俺は思った。その後俺はみんなより早くお風呂に入りまた入つてこないようになつた。

早めに出たのでみんなになぜか怒られた。。。その後みんな疲れて早めに就寝をした。（第30章終り）

## 海鳴島 その5

山登りをした俺たちはここ海鳴島を後2日残りことになった。  
で・・・現在俺と糞見、加奈子以外は

「いたた・・・」

3人がかなり筋肉痛だった。まあ、まさか眞魅先輩も初めての  
山登りだとは知らなかつた・・・俺は

「まあ・・今日1日は安静だな。まあ温泉でもゆっくり入つたほうが  
いいぞ。それと終わつたら加奈子と糞見はあいつらの痛いところを  
ほぐしてやつてあげて。」

俺は言つた。なぜ俺がしないのか?つとわかるだろ?俺は男だ  
自分から女の子の体を触ることなどしたくはない・・・。

「分かつた・・そつする・・・」

と眞魅先輩が言つてリオ、コレットも一緒に温泉に向かつた。  
で・・・残つたのは俺と糞見と加奈子だつた。俺はあとちょっとの  
宿題を終わらすために宿題を出した。それを見た加奈子が  
「山ちゃんやつぱり宿題持つて来たんだ~」

と言つて俺は

「ああ、まあもうすぐ終わるからな。一応やれる時はやらないと。  
と言つて俺は宿題をやろうとしたら2人も俺のところに来て

「私ももう少しで終わるので後で答え合わせしませんか?」

と糞見が言つた。んで

「私も早く終わらせないといけないからやるけど・・分からないと  
ころは

教えてよね。」

加奈子が言つて俺は

「ああ、分かつたやううか。」

と言い始めて3人が戻つてくるまで俺たちは夏休みの宿題をやり始めた。

夏の宿題は数学、国語、英語、社会の4つしか出されなく  
そのうち俺は数学、国語、社会の3つは終わらせ、英語は英会話だけ  
残っていた。糸見は国語、英語、社会の3つが終わり、数学の最後  
だけ

残っていた。お互い分からないとこを教えあい間違えたとこを  
訂正をして

俺たちの宿題は終わらせた。そして終わらないとこを加奈子に教  
えながら

俺たちは夏休み後のテストに向けての復習をした。まあ加奈子も数  
学と社会以外は

すぐに問題は解けたがやっぱり数学と社会だけは苦手らしく俺と糸  
見で教えながら

宿題をやり始めた。そして加奈子の宿題がだいたい終わってきたと  
きに

3人が帰ってきたので俺たちは休憩をしてのんびり過ごした。

その次の日はお土産を買う日でみんな各自のお土産に悩んでいた。  
俺は店長やバイト仲間のために買って俺はすぐに戻った。そして  
まだみんながお土産を買うのを悩んでるとき俺は少し砂浜まで  
歩いて向かった。（第3章終わり）

砂浜に来た俺はずーーーと海を眺めていたら  
「隣いい？」

糞見が言った。俺は

「別にかまわないがもうお土産買ったのか？」  
と質問をしたら

「うん。私はお土産元々決まってたから。」  
糞見が言つて俺たちは夕日の海を眺めていた。  
眺めていたら糞見が

「山さんはもう進学とか決まってるの？」  
と言われ俺は

「ん〜・・・今のところは・・・糞見は？」  
と聞かれ糞見は

「私はね・・・まだ決めてないけどいつかね  
山さんみたいな人になりたいと思ってるの  
と恥ずかしそうに言つたので俺は

「な・・なんで？」

と言つて糞見は

「私はね。元々人に話すのも苦手だし困つてる人に  
助けたりしたことがないの・・。でもね山さんは  
昔から自分から話しかけないことが多いけどでもね  
私は私たちがいなきに山さんが困つてる人を  
見捨てなく助けてるところを私は見てたの・・・  
だからね・・・私もいつか山さんみたいな優しく  
人に親切な人になりたく先生になろうかな  
とか思つてるのでよ。」

と言つた。俺は

「まあ・・・これだけは言つとくよ・・・

糸見は多分立派な先生になれると思つ。

だが・・・俺にはなるではないぞ・・・

とはつきり言われ糸見は

「え・・・?」

とびっくりしていた。俺は

「まあ、糸見なら大丈夫さ。さてみんな待つてるし  
行こうか。」

と俺は言った。糸見は

「う・・・うん」

疑問に思いながら俺たちは旅館に戻った。帰る途中で  
俺は心の中で

「ごめんな糸見。だが・・俺のようになつたらだめだ・・  
俺みたいになつたら糸見もいつか・・だから糸見は  
俺より立派に頑張ってくれよ」

言つた。明日で俺たちは海鳴島を出ることになり今日は  
遅くまで起きて夜中1時にはみんなが就寝をした。

そして朝、朝はんを食べて準備をしたら

「「「「「ありがとうございました~」」」」」

と言つて俺たちは旅館をでた。1日目2日目は海で遊び  
3日目は山にのぼつてみんな楽しかつたように飛行機の中で  
ぐつすりと寝て俺たちはゆづくり自分たちの家に帰つた。（第32

章終わり）

## 海鳴島後

海鳴島に帰ってきた俺たちは各自解散となつた。

俺は今日はバイトがなかつたがお土産も買つてきたことだし  
今のうちにと言つことでバイトに向かつて行つた。  
着いた時に俺は

「こんにちは～店長いますでしょか～？」

俺が行つた時店長が現れ

「お～山本元気だつたか～？海鳴島は楽しかったか？」

店長が質問をしてきたので俺は

「まあ～・・・あ、これお土産です。店長とバイト仲間に  
渡していただけませんでしょつか？」

と言つて店長が

「ああ、ありがとうな。ちょっと今忙しくてさもし・・・  
疲れてなかつたら今日バイト入つてくれないか？」

店長が言つたので俺は

「構いませんよ。俺も休みすぎて店長には心配かけましたので  
今日出ますね。」

俺は言つて店長が

「すまんな。じゃあ頼むわ」

と言つて店長は厨房の中に入つた。俺も急いで準備をして  
仕事に入った。で・・・その日は結構繁盛してたのでアルバイトの  
人が3人と店長1人じゃ手が足りなくもしかしたら今日休みだつた  
アルバイトの人に電話をかけよつかと思つてたらしくちょうど俺が  
来てよかつたつと言つてた。うん俺も久しぶりに仕事ができて  
よかつた・・・が・・まさかそれが3時間も見せいっぱいなるとは  
みんなが思つてもいなかつた。まあ、久しぶりのバイトだつたから  
俺は気にしないがね。終わったのが10時になつてしまつたので  
俺は帰るときに店長が

「ああ、山本今日は休みのところ悪かったね。」

と言つて俺は

「いえいえ、気にしないでください。」

と言つた。店長は

「山本のおかげで今日はすぐ助かつたよ。これはあまりものだけど持つて行け。んじゃお疲れ様~」

店長はそう言つて店の奥に入った。俺は

「お疲れ様でした」

と言つて俺は店から出て家に向かつた。そしてついてから俺は階段を上つた時一人居て俺は暗くて見えなかつたから近くで見たら

「糞見?」

と言つた。そう糞見がなぜかドアの前に待つていつた。しかも夏は朝晩は暑いが夜はとても寒い。なのに俺が帰つてくるまでずーと待つてたのか?とか俺は思つて

「どうしたんだ?こんな時間に?」

と言つて糞見が

「ちょっと・・山さんに話したいことがあつて・・・

と言われ俺は

「まあ、話は分かつたから外では寒いから中に入ろうつか

と言つて糞見が

「うん・・・

と言つて俺たちは家の中に入った。(第33章終わり)

## まわかの・・・

バイト後俺が帰った時なぜか糸見がいたから一応俺は外で話すより中で話すほうがいいと思つて糸見を家の中に入れた。そして

「まあ適当に座つてくれ今お茶を入れるから」と言つて俺はお湯を沸かしてた。糸見は

「あ・・ありがとう・・」

と少し暗かつた。俺はなんでだろう?とか思つてたけど落ち着いたら話してみようと思って俺は夕ご飯をパスすることになつた。まあ、こんなときにご飯を食つても申し訳ないからなんでお湯が沸いたからお茶を入れて糸見に

「ほい、お茶。温まるから飲んどぞ」

と言つて俺も座つた。糸見は

「ありがとう・・」

と言つて俺は

「どうしたの?」

と言つて糸見が

「山さん。海鳴島で私山さんみたいな人になりたいと思つてました。でも・・山さんは俺みたいなやつになるなつて言われ私はズーと考えてたけどなんで山さんみたいな人になつてはいけないでしょうか?」

糸見が言つた。俺は

「まあ・・俺はこんな性格だから・・・糸見が俺みたいなやつを目標にするのはもつたいない。だから・・俺を目標にするなら俺を超えてもつと親切な人になればいいと思う。てか・・・

俺は糸見は今でも俺よりは親切で優しい人だと思つてるけどね

俺ははつきり言つた。だけど正直言つたら糸見に余計な心配かかる

から

俺が天魔人のことば秘密にしてるがね・・・それを聞いた糸見は

「私はまだ・・山さんを超えることができん・・・

昔から私は自分から声をかけることができないし・・・

山さんのおかげで自分が将来先生になりたいと思つたから・・・

だから・・・私は山さんみたいな人になりたいです・・・」

と言つて俺は

「そりゃあがんばって・・俺は応援するよ。」

と言つた。糸見は

「あの・・山さん・・・」

と言つて俺は

「なんだい?」

俺は言つて糸見は少し整理をしてたらしくまとまつて俺に  
「私は・・・私は・・昔から山さんのことが好きでした・・・  
だから・・私と付き合つてくれませんか・・・?」

糸見は俺に告白をしてきた。だけど俺は

「ごめん・・・」

と言つて糸見が

「そうですか・・・でも・・私は・・・諦めません・・

いつか・・山さんと恋人になりたい・・だから

いつでも待つてんでは友達からよろしくお願ひします。」

と言つた俺は

「ああ・・・よろしくな。糸見」

と言つた。糸見は

「私はいつでも山さんを想い続けます。」

と言つて私は今日は失礼します。と言つて糸見は家から出た。

俺はまさかの告白されるとは思つてもいなかつた。だが・・  
俺は天魔人・・だから・・糸見はもちろん他の人とも  
付き合うことができない・・・俺はどうすればいいのかな・・  
とか思いながら夕ご飯を作つた。（第34章終わり）

## 夏休み終わり

海鳴島から帰ってきた俺たちはその後何も予定がなく各自夏休みを過ごしていた。俺は毎日朝のトレーニングをして夕方バイトをして充実とした夏を過ごした。・・・が

俺と糸見は元々夏休みの宿題が終わってるので何もしなくていいだけど・・・加奈子の宿題の手伝いをしてたら電話で「宿題手伝つて~」

というリオの頼みコールが来てたので俺たちはまたリオの家にお邪魔をして俺と糸見は宿題を終わらしてるので加奈子、リオ、コレットの宿題を終わらせることと夏休み後のテストがあるのでそのための勉強会を開いた。

そして・・・夏休みが終わる前の1週間俺たちは時間がある限り勉強をしていた。だけど・・俺たちまだ1年生だよな?とか思いながら勉強しまくつて

「そういうえば・・・リオちゃんとコレットちゃんは夏祭りとか行つたことあります?」

と加奈子が質問をしたのでリオとコレットは

「夏祭り?

「夏祭りですか?いえ・・・

とお互い夏祭りを全く知らなかつたそつだ。で・・・俺たちは夏休みが終わる前に近くの地域で夏祭りがあることを知つていたので全員で行くことになつた。もちろん眞魅先輩も。

リオとコレットは初めて来たらしく一人ははしゃいでいて俺たちは全員で回つた。各自たこ焼き、わたあめ、リンゴ飴、焼きそばなど

いろいろ食べて、金魚すくいなど食べ物以外の屋台もやつてみんな楽しんでいた。

夏休み後俺たちはテストがあつて、今回はみんな成績よかつた。

眞魅先輩は満点だつたらしい・・・あの人は・・・とか俺は思う。んで俺たちは学年では糸見が2位俺が4位コレットが9位加奈子が14位

リオが16位だった。みんな夏休み中にあれだけ勉強をしていったから頑張ったほうだと俺は思う。そして2学期では・・・体育祭や文化祭が

ある・・・今後どうなるのだろう・・・と俺は思っていた。（第3

6章終わり）

## 体育祭の練習

夏休みも終わり俺たちは学校生活を過ごしていた。

そして・・・1ヶ月後俺たちは体育祭に向けてクラスでいろいろと話しあつた。そして・・・俺はクラス対抗リレーで加奈子は1000m走、糸見は100m走、リオは200mリレーコレットは障害物競争に決まった。んで俺たちの学校は体育祭が始まる2週間になると授業がなくなり各自各競技の自主トレーニングをすることになった。もちろん学校の中でのトレーニングなんだが・・・俺はクラス対抗リレーなので俺含めての5人でリレーのバトン渡しの練習をしていた。最初のほうは早すぎたり遅すぎたりして俺たちのチームはチーム全体がばらばらで10回以上やっていくつも元気だんうまくなつていった。そして・・・

「1回全体でやってみる?」

とこう声がしたので俺たちは一度本番のとおりでやってみた。1人200m俺は50m走で7秒だつたらしくそれでクラス対抗リレーに選ばされたと思っている。まあ俺より早い人はいるんだけどね。俺はなぜか知らないけどアンカー・・・やめてほしいわ・・・とか思つてたり・・・まあそんな感じで1回やつてみた。俺たちのチーム以外の人にもタイムを計つてもらつてるので実際にどれぐらいか計算をしていた。

1人目、2人目どんどんバスを回つてきて結果が1分50秒だつた。まあまあの出来だったので俺たちは各自トレーニングすることになつた。んで俺は回つていいくつも元気だん糸見、リオ、コレットの姿を見て俺は

「がんばってるな」

と声をかけた。コレットは

「山様ちょっと質問が・・・」

と聞かれ俺は

「俺でよければ」

と言つた。コレットは

「障害物競走はどうすれば1位になれますか?」

質問をしてきたので俺は

「完全に1位は分からないよ。まあアドバイスはできるからあとはがんばってくれ」

と言つて俺は障害物競争から出るマット、ネット、砂袋について簡単に説明をした。それとこりこりふつにすればうまくなるよ。などやり方まで教えたがそれだけじゃ・・1位にはなれないなぜなら俺も昔この障害物競争に苦戦したことがある。

だから俺は

「コレット1位じゃなくともいいからがんばれよ」

と言つた。コレットは

「あ、はい。がんばります!」

元気に言つた。糞見は

「正せん明日から朝のライニングにつきあつてもいいですか?」

と質問をしたので俺は

「ああ、いいけど朝6時だけどいいかい?」

俺は答えて糞見は

「はい、構いません。よろしくお願ひします。」

と言つて俺は自分のとトレーニングをするためにみんなと離れた。

「体育祭まで後2週間みんながんばってほしいかな?」

俺はつぶやいて走つて行つた。(第36章終わり)

## 体育祭

各自みんな体育祭に向けて練習をしていた。そして・・・本番俺たちは赤チームだった。最初のほうは糸見の100m走だった。糸見は元々体力がないけどがんばって走つて2位だった。それでも俺はすごいと思った。次はリオの200m走。その次はコレットの障害物競争だった。二人は初めての体育祭で二人とも一生懸命走つてリオは3位コレットは2位だった。昼休みに入る前に最後の競技加奈子が走る1000m走だった。見るとさすが運動部だと俺は思った。加奈子は余裕で1位を取った。眞魅先輩はなぜかパン食い競走に出ていた・・・そして昼ごはん俺は避けたかったけどつかまってしまい一緒にご飯を食うことになった。リオが

「山さん昼のプログラム頑張つてください。」  
と言われ俺は

「俺だけじゃなくみんなの応援もよろしくな。  
これは俺だけじゃなくチーム戦だから。」  
と言つて俺たちは楽しく昼ごはんを食べていた。  
そして俺がやるプログラムは最後だった。

んで今の特典は俺たち紅組が450点白組は430点で一応リードしているがこの競技で負けると負けてしまうという状況だった。まあ・・俺たちチームで集まり俺が「悔いが残らないように全員頑張つて行こう!」  
と言つて俺たちは走る順番に走つた。そして第1走者結構リード行って第2走者が2位まで追いつめたが・・・第3走者が走つた時まさかのバトンを落としてしまいロストしてし

まつた

んで第4走者が頑張ってくれて何とか2位まで追いつめてくれた。そして・・・俺が全速力で追いつめたが・・・あと一步足りなく2位で終わってしまった。そして結果が紅組470点白組480点で逆転負けをしてしまった。そして・・・終わった後第3走者を走った人が

「ごめんなさい・・・俺が・・・バトンを落とさなければ・・・とすごく落ち込んでいた。だが俺は

「君はよく頑張った。こういうハプニングもよくあることや。気にするな。君は本当にがんばったからな。」

と俺は他の人に聞いたらみんなも納得していた。

そして俺たちの1年生の体育祭は終わった・・・。（第37章終わり）

俺たちの紅組は10点差で負けてしまった。

まあ、楽しかったからいいとするかつと思つて

俺たちは帰りの準備をしていてそのまま俺は家に

帰ろうとしていたら5人がいて糞見は

「山さんこれから体育祭お疲れパーティーをしたいので一緒にいきませんか？」

と言われ俺は多分拒否権は？？と言つても駄目です？と  
言われると思って一緒に行くことになった。そして・・・  
次の日、あの・・第3走者目の子がいじめにあうとは  
俺も考えてもいなかつた。最初のほうは俺も気付かなかつたが  
あの子がいなくなると噂で

「あいつが・・バトンを落とさなければな～」  
とか聞こえて俺は嫌味だけだらうと思っていた。まあそれは  
無視すればいいと思っていただが・・・どんどんいじめのハードルが  
上つて行くうちにその子が学校をよく休むことになつた。  
そして俺はそのクラス対抗リレーのチームだった子に聞いてみた  
「あの・・確かに・・夏季坂君だったよね？第3走者走った子」  
と聞いてみたら1人の男の子が

「うん、そうだよ。どうしたの？」

と聞かれたので俺はこの頃あの子にいじめがあつたかどうか聞いて  
みた。

そして・・その男の子も

「俺も気になつていた。だつてあいつ・・・元々人と話すのが好き  
だつたはずなのに最近俺たちもクラスの子も話さなくなつた・・  
だから俺も心配している。だから今日夏季坂のところに行こうかと  
おもつてな。」

と言つたので俺は

「じゃあ俺も行くよ。俺もあいつのこと心配だし……」  
と言つてその男の子は

「さんきゅーな。んで・・確かに山本だったっけ?」

と言つてたから俺は

「うそ。山本であつてるよ。確かに・・金崎だったよね?」  
と言つたら

「おひ。あつてるよ。じゃあ放課後に一緒に行いひ。」

金崎が言つたので

「ああ、よろしくな。」

と言つて俺は屋上に行つた。そして・・放課後俺はリオ達に

「今日は金崎と一緒に帰るからみんなは帰つて。」

と言つて俺は金崎のところに行つた。そして

「お待たせ~」

と言つて俺と金崎は夏季坂の家に向かつて歩いて行つた。(第38

章終わり)

## 夏季坂家へ

俺と金崎は夏季坂の家に向かった。そして俺が家のチャイムを押したら

「誰でしようか？」

と女性の声がしたので俺は

「あの～夏季坂君のクラスの山本と言います。

俺が言つたらその女性が

「あらま。あの子のクラスの子なのね。入つてどうぞ～

と言われたので俺と金崎は家の中に入つて

「おじゃまします～」

と言つて入つた。そしてその女性が俺たちの前に来て

「初めまして。私は勝也の母です。」

と言つた。俺たちは

「夏季坂君のクラスの山本と言います。」

「同じく夏季坂君のクラスの金崎と言います。」

俺たちは頭を下げた。そして

「勝也は部屋にいるからよろしくね～」

と部屋まで案内してくださつて入つて夏季坂の母親が

「勝也、お友達が来てくれたよ～」

と言つて俺たちは中に入った。そして夏季坂は

「えーと・・確かに山本君と金崎君だったよね？」

と言つて俺たちは

「うんうん」

と言つた。そして夏季坂君の母親が部屋から出ると俺から

「この頃休んでるけど大丈夫なのか？」

俺はいきなりいじめの話をする前に一応真合悪いかもしけなかつたから

聞いてみた。そして・・・

「うん・・・具合は大丈夫だけど・・・

夏季坂が言つたから

「もしかして・・・いじめにあつたのか?」

金崎が言つたら、

「多分・・・そうだとと思つ・・・

と言つた。俺たちは

「「やつぱり・・・」

とつぶやいた。まあ・・・当然だろ?・・・いなこときでも噂はすげく立つていたし・・・

「夏季坂は悪くないよ。だつて夏季坂はバトンを落としても最後まで頑張つたからお前は悪くない。絶対にだ!」

俺が言つた。そして

「そうだけど・・・でもね・・他の人には俺が負けなければ勝つたのに・・・俺のせいで・・・」

と言つて金崎は

「俺たちのチームはお前のせいで負けではない。それならもし、仮によ。俺たちが負けて他の奴らが1位2位を取り巻くつて負けたなら俺たちのせいでもある。

だが・・全員が1位2位とれないじゃん。もしお前がバトンを落とさなくとも俺や山本がバトンを落としてたかもしなかつたんだぞ・・・だが・・お前は最後までやつたからそれでいいじゃん・・・だからお前もくよくよしないで学校に来いよ。俺や山本がお前を守つてやるからさ。」

と言つて俺は

「金崎の言つとおりだ。俺もお前のことを守る。だから学校に来い。このまま休んでしまつと一生これなくなつてしまつし。高校生活の大変な思い出も作れなくなる。だから絶対に来いよ。明日俺と金

崎は

お前のことを見つてるから・・・。

と言つて俺たちは部屋を出ようとした時

「ありがとう・・・一人とも・・・俺頑張って明日から学校に来るよ・・

本当に心配してくれてありがとう・・・

と言つて俺は

「俺たちは友達だから心配するのが当たり前だ！心配しない奴なんて友達じゃないからな。」

と俺が言つたら

「山本の言うとおりだ。まあ明日絶対に来いよ~」  
と言つて俺たちは夏季坂の家を出た。（第39章終わり）

## 夏季坂 復活

俺たちは夏季坂がいじめにあってることを知り俺と金崎と2人で夏季坂の家に向かって2人で夏季坂を学校に来ることに説得した。そして翌日俺たち2人は校門の前に待っていた。もちろん夏季坂を待っていたから。そして・・・

「おはよう。山本君、金崎君」

夏季坂が挨拶をしたので、

「おはよう。まあ俺は呼び捨てでいいからじゃあ行こうか～」

俺が言つたら金崎は

「そろそろ俺も呼び捨てのほうが楽だから今度から君付けはよしてくれ。まあ行こうか」と俺たち3人は一緒に学校の中に入った。そして1時間目までは良かつたもののやっぱり噂がおさまらないだが俺と金崎はそんなことを気にしてなく3人で話してたが・・・・昼休みになると段々と声がでかくなり誰も聞こえるぐらいに話す奴がいてとうとう俺と金崎は

「おい！お前ら！」

と切れ出した。そしてその話をでかくしたやつは

「なんだ？」

と余裕な感じで返事をした。

「それ以上夏季坂を侮辱をするなら俺がゆるさね。もうそのうわさもやめる。」

俺が行つたがその5人のグループが

「あん？あいつのせいだ俺たち紅組のチームが負けたじゃんか別にいいじゃんか。あいつが悪いだし～」

と言つた俺はその言葉を聞いてむかついたからその男に一殴りを

した。その男が

「てめえ！何をするんだ。」

と言つて俺は

「お前らの噂のせいでどんだけ夏季坂を苦しめたのか分かってるのか！」

夏季坂がバトンを落としても最後まで走った姿お前らは見たか？！あいつの頑張りで俺たちは1位には取れなかつたが俺たちのチームは

満足をしている。負けたんて何だ。1人が負けたらお前らはずーとその人をズーと苦しめるつもりか？！」

と俺は切れながら言つた。

「そうだ。山本の言つとおりだ。お前ら夏季坂に謝れ」

金崎が言つたが

「誰があいつを謝るか。」

と言つた。俺たちはそろそろ保つのが限界になるこの

「私も山さんの言つてる」ことが正しいと思つてます。」

と糸見が言つてくれた。そして他の人も

「そうだそうだ～謝れ～」

と言つてそのグループが反論ができるのでそのまま教室を出た。

「山本、神崎、みんなありがと～・・・」

夏季坂が言つたので

「気にするな。まあもつあいつらから噂はない」と糸見がまたあいつら言つてくれよ。」

俺が言つたら糸見は

「私たちも助けるから何かあつたら言つてね。」

と言つてら加奈子が

「でも・・さすがに・・山ちゃんの殴るのはちょっとね・・・

と言われた・・まあ。そつだううね・・後から先生から厳しく怒られた。

まあ、俺は気にしなかつたけどね・・・さて・・・体育祭が終わった

から

次は文化祭だ・・・楽しめるのかな?

(墮お40章終わり)

## 夏季坂 復活後

体育祭で俺はプログラムでクラス対抗リレーになつてそのメンバーの中で夏季坂と金崎とチームになつた。だが・・・緊張してしまつた夏季坂はまかさのバトンを落してしまつた。だけど最後まで頑張つて次の金崎が3位を追い越し俺にバトンを渡してくれたので俺が全速力（まあ天魔人のパワーは使ってないよもちろん）走つたが一步及ばず2位になつた。しかし俺らは夏季坂をだれも責めたりはしなかつたが・・・

夏季坂が学校を休んでしまつた。それを見て俺は金崎と相談をして俺と金崎は夏季坂の家に行つて2人で説得をした。そして何とか夏季坂は来るようになつたがまたしても噂がどんどんでかくなりとうとう俺が限界を達してしまつてそのグループの1人に殴つてしまつた。だが・・・俺は気にしていない。なぜなら俺より夏季坂はもつと辛いのに来てくれたから俺はあいつを守らないとい行けないと思つたからだ。そして・・・俺はその後先生にかなり叱られた。まあ当然だ。一応後から聞いたがあの噂をしたグループは俺よりもかなり厳しい罰が受けられたとか・・・もし・・俺が一発じやなく何回も殴つてたら謹慎処分で1週間学校にこれない状態だつたそうだ。その日「山本ごめんな。俺のせいだ」夏季坂が言つたが

「気にするな。お前は悪くない。俺が勝手にしたことだから。」俺が言つたら

「山本の言つとおりだ。本当は俺も殴りたかつたが・・・

俺がなくなる前にあいつらが消えていったから・・殴れなかつた。すまんな山本お前だけ怒られるのが住まないと思つていてる。」

と言つた。俺は

「気にするな。」

と言つた。俺と夏季坂と金崎で3人でご飯を食うのが普通になつた。まあ・・前までは俺1人カリオ、コレット、加奈子、糸見が来ることも

あり、時々眞魅先輩も入つてくることになつて俺は離れたいと思つたから

すごく助かつてゐる。今日もそのつもりだ。そして話題が

「確かもうすぐ学園祭だよな?」

金崎が言つた。

「そうだな・・・早いもんだ。」

俺が言つたら

「学園祭の出し物アイデア決まつてるのか?」

金崎が俺たちに質問したので

「いや・・・決まってない。」

「僕も・・・決まってないよ・・・。」

と俺たちが言つた。金崎は

「だよな・・・俺も決まってないわ・・・まあ俺たちが決めても  
決まるか分からないしね。」

と言つた。まあそういうだろう・・・多分お化け屋敷などが一般だから俺たちが楽なものがあれば・・・いいかな?つとか・・・思つてゐる。そう・・・俺たちが昼ごはんが終わつた後・・・学園祭の出し物を決まるのだ・・・。

(第41章終わり)

## 学園祭の出し物

俺たちは学園祭の出し物を決まらないまま・・・次の授業が始まった。次は総合で今回は

学園祭の出し物についてきめるらしい。そして

「はい、みんなあと1ヶ月後に学園祭があります。私たちのクラスも出し物を出そうかと思いますが・・・みなさん出したい物決まってますか?」

先生が言つていろいろな意見がでた。やっぱり

お化け屋敷、喫茶店、フリーマーケットなど多くの出し物が決まり多数決で絞り込まれ残つたものが

お化け屋敷、フリーマーケット、劇が残つた。

そして3つを1つにするためにまた多数決が行われた。

そして・・・決まったのが劇になつた。まあ・・・

劇になつたのは・・・いいが・・・俺はサブキャラのほうがすごく助かるだが・・・主役だとめんどくさい・・・。

そして・・・劇を推薦したのは糰見だつた。まあ・・・

そうだろう・・・糰見元々本が好きだし・・・ね。

「劇の推薦をしました。赤崎糰見です。タイトル○○です。どうぞよろしくお願ひします。」

糰見が頭を下げた。劇はそれでいいものの実際に主役とヒロインを決めないと困った。誰も主役やヒロインをやりたいと言つ人が全くいなかつたので結局多数決・・・しかし・・・誰も微妙な数だったので多數決じや時間がかかる・・・なので結局・・・

くじ引きを引くことになつた。夏季坂と金崎は劇じゃなく裏方に決定した。俺が引いたときは・・・まさかの主役つという紙をひいてしまつた・・・そして・・・ヒロインは・・・

「わ・・わたし・・・」

コレットが言った。そして全部が決まり夏季坂と金崎は裏方でコレットがヒロイン、俺が主役、リオが照明、加奈子がアナウスもちろん轟見は脚本作りと全体の監督となつた。俺は「これから大変だ・・・」

すく落ち込みながら・・・考えていた・・・。（第42章終わり）

学園祭の出し物（後書き）

ここにちは・・お久しぶりです。

毎回文章が短い山です。

がんばつて長く書きたいのですが・・

時間がなくつて・・・いつも短くなりまます・・・

本当にすいません・・・

途中で劇のタイトルが○○なんでタイトルは皆さんの創造でお任せします・・・。

## 学園祭の出し物 その1

「はあ・・・なぜ俺が・・・主役をしないといけないんだ・・・俺はすぐシヨックを受けていた。今いるのは屋上もちろん俺と夏季坂と金崎の3人で食べていた。なぜなら俺がただ単にあの人たちから避けたいからだ。

「まあ・・・でもくじ引きだから・・・しかなないよ」

夏季坂が言った。

「まあ・・・仕方ないか・・・」

俺がすぐ落ち込んでた。

「まあ・・・全員平等だから文句言えないから・・・俺たちも手伝うことがあれば手伝つからがんばれよ。山本」

金崎が苦笑言いながら言った。

「まあ・・・仕方ない・・・選ばれたのは仕方ないから・・・がんばるか・・・」

俺は落ち込みながら飯を食べていた。そして・・・全部の役割が決まつたので学園祭の1週間前から体育祭と同じで授業がないのだ・・・てか・・・俺たちの学校は全体の1割はそれで授業が亡くなるけど・・・今後勉強など大丈夫なのか?とか思つてたり・・・そして・・・俺は家に帰つていつも通りの日常生活のことをして何日か俺は過ごしていた。そして数日後糞見から

「山さんこれ。」

と渡されたのが台本だった。

「ありがとう・・・。」

と俺が言つた・・・本当はこんなものほしくないけどね・・・とか思つてたり。

「山さん主役がんばってね。何かあつたら私も手伝つから糞見は優しく言つてくれた。」

「ありがとう。糞見」

俺が言って糞見は少し赤くなつて下を向いた。まあ・・  
俺は早く帰つて台本で練習しないといけないとやばいと思つたから  
早く家に帰つた。（第43章終わり）

## 学園祭の出し物 その2

俺は糸見から台本を貰つて家に帰つて台本の中身を呼んでみた。内容はまあまあだった。

まあ・・ありがたいのは女の子って自分が作るときに最後にキスシーンがあることが多くあり・・・すぐ困つたが・・・さすが・・糸見キスシーンがなく感動させるタイトルでよかつた・・・本当に・・・そして・・・俺は台本の中身を何回か呼んでみて実際に声を出しながら読んでみた。もちろん小声でなぜなら・・・ここはアパート大声をしてしまったらお隣さんからの迷惑もあるしな・・・。そして・・・大体内容が入つた・・・。なぜだ・・・なぜすぐに入るんだ?とか自分が思つてたら電話が鳴つた。俺はでた

「はい。山本ですが・・・」

俺が電話を出たら

「コレットです。今大丈夫でしょうか?」

コレットからの電話だった。

「ん?どうした?コレット」

俺は一応どうしたのかな?つと心配したので質問をした。

「えーと・・・山様はもう台本とか覚えましたか?」

コレットが言つたので

「ああ、まあ・・・大体はもう覚えたよ・・自分もびっくり糸見が長いセリフをなるべく少なくしてくれたおかげで俺はすごく助かってるだけね。」

俺が言つたら

「あの・・もしよかつたら劇の練習お手伝いできませんか?」

コレットが言つた。俺は多分覚えるのに苦労してると思つて

「ああ・・いいよ?」

俺は返事をした。それを聞いてコレットは何

「ありがとうございます！」

と元気よくって俺は

「でも俺のところでは練習できなから公園でもするか？」

と言ったらコレットが

「いえ・・私の家でやりませんか？」

と言った。そして俺とコレットは一緒に劇の練習をすることにになった。（第44章終わり）

俺はコレットの家に行き、一人で劇の練習をすることにになった。

「まず・・俺から行くね。」

俺が言って俺がするシーンをまずお手本として自分が言うところを台本見なくてやってみた。まあ・・大体は覚えてしまってセリフも難しくなくすぐ助かつたんだけどね・・・。

「すうい・・・」

コレットが言って

「じゃあ次はコレットだ。無理して台本を見なくてやる」とはしなくていいから。まず台本を見てやってみ」

俺が言った。そしてコレットが台本を読んでみてセリフが終わると「いいじゃない? ジャ合わせてみようか。」

俺が言ってコレットが

「お、お願いします・・・。」

と言った。そして俺とコレットは自分のセリフを言って自分たちでないところのセリフを俺が言いながら練習をした。1日目はまあ見合わせつと言つところかな?とか思い。何時間か練習をした。

「今日はここまでにしよう。まあまだ時間はあるし。俺が

時間があるときに一緒に練習をしよう。」

俺が言って今日はお開きになつた。そして次の日の午後からコレットの家に行き2人で一緒に練習することになつた。段々とコレットが自分が言うところのセリフは台本を見なくてもセリフが言えるようになり乗り込みが早かつた。そして・・・数日後俺たち2人じや練習しても意味なく舞台に出る人で時間があるやつみんなで少し劇の練習をしてみんな最初は会わせるのに台本を見ながらやつていき段々と台本を見なくてもセリフが言えるようになつて言った。まあ俺は矯見が作った台本はセリフが長いところがあまりないからすぐ助かつてたと思つ。

もしセリフが多いと間違えるところが多いから……やつてへい……  
糸見が作ったのが正解だと俺はすぐ関心をした。

まだ完全に学園祭の準備は始まってないけども少しでも早く  
練習していく俺は

「何とかなるかな？」

と少し安心をしていた。あと1週間で劇の練習が本番になっていく  
から

がんばらないといつと俺は早く学園祭なんて終わってくれつと  
思いながら練習をした……。（第45章終わり）

## 学園祭の練習 その2

まさかの俺が・・・主役をやることになつて・・・  
もつ2週間がたつた・・・まあ・・・俺は  
「本当は主役変わりたい・・・」  
と今でも思う・・・だが・・なつてしまつたものは  
仕方ないと夏季坂と金崎に言われ・・・学園祭で  
俺がやる気ないとみんなのテンションが上がらないと  
思うから俺ががんばつて成功するように矯見からもらつた  
台本を一生懸命暗記をした。その時にヒロインになつた  
コレットが一緒に練習をしませんか?と言われたので  
最初のほうは2人でコレットの家で練習をして学園祭の  
2週間前からあいてる放課後に舞台に出る人を集めて  
軽く劇の練習をした。まだ完全ではないが・・・大体は  
つかめてきた。そして・・残り学園祭が始まる1週間前に  
なるころ・・・昼休み  
「もうすぐ学園祭だな。」  
金崎が言つて夏季坂が  
「そうだね、成功すればいいね、劇  
と2人が俺を見つめたので・・・  
「大丈夫・・・がんばるから・・・」  
俺が・・かなり落ち込みながら言つた。そう・・この2人と  
体育祭が終わつてからすごく仲良くなつた。男友達なんて  
初めてじゃないかな?元々友達を作ることすら興味を持たなかつた  
俺にはあまり関係なかつたが・・・  
「おばあちゃん・・俺・・・初めてまともな友達ができたよ・・・  
今まで女の子が・・俺に来るのを・・俺は嫌がつてたけど・・  
本当によかつたよ・・ありがとおばあちゃん  
と俺は意味もないことを心で言つた。

「まあ・・あともう少しだからがんばれよ山本

金崎が言つた。俺は本当にお前がいなかつたらこの学園を去りたかったよ・・・本当に。お前がいてありがたい・・・とか思つてたり・・・

「何かあつたら僕たちが手伝うよ。」

夏季坂が言つた。

「ありがとう2人ともがんばるよ・・俺・・・」

俺はそう言つてあと1週間をがんばるつという熱心を2人からもらつた。そして放課後柵見が

「もうすぐで学園祭があります。1週間前までは使えなかつた体育館が使えるようになりますので。劇を出る方は放課後だけですが

ぜひ使ってくださいね。」

と言つてくれた。そして・・放課後から本格的に体育館で練習を始めた・・・（第46章終わり）

## 学園祭 その1

本格的に劇が始まったのは学園祭の1週間前で監督の糸見はあまり厳しくしなくみんながより良い劇になるようにアドバイスをしていた。

まあ・俺とコレットは台本を貰つてからだいぶ練習をしたから・・・多分大丈夫だろう・・・

普通なら夜8時ごろまで劇の練習をするはずが

糸見はそんなことをしなくみんなの体調を気をつけて早めに終わることが多かつた。リハーサルは学園祭の前日で一発本番でやつて、糸見もかなり満足してたからそのまま解散をした。俺は早く終わったのでぶらぶらしていました。まだに体育館の中で糸見が一人で立っていた。俺は近くの自動販売機に

向かつて暖かい飲み物を買って糸見のところに行つた。

「糸見。ほら。」

俺は暖かい紅茶を渡した。糸見は

「あ、ありがとう。」

と受け取り2人ですこし体育館を眺めた。そして

「明日だね。」

と糸見が言った。俺は

「そうだな・・・もう明日で終わりか」

と俺はつぶやいた。糸見は

「山さんは本当は主役やりたくなかったんでしょ?」

といい出し俺は

「まあな・・・元々俺は主役向いてなかつたし。」

と言つて糸見は

「山さんは主役に向いてるよ・・・実際に山さんが

主役でよかつた・・・」

と顔が赤くなつた。まあ。そだらうなんか告白つぽい  
言い方になつてゐしな・・・

「まあ糞見が満足してゐなら俺は別にかまわない。

明日が本番だ・・・。糞見監督のために失敗はしないように  
しないとな。あはは・・・」

と言つた。糞見は

「いえ・・誰だつて失敗はよくあるものですよ。山さんも  
他の人も失敗しても・・最後までやれば私は満足です。  
頑張つてください。」

と言つた。俺は

「おう・・がんばる」

と言つて俺たちは一緒に途中まで帰つた。そして翌日  
俺たちの劇は一番はじめらしくここが終わつてから学園祭が  
始まることなので体育館の中はすゞくいっぱい。まあ・・  
みんな緊張しているが・・・糞見が

「今まで私の台本についてきてくださいってありがとうござります。  
みなさん緊張しなく楽しく行きましょう。失敗しても気にせず  
楽しくやれば会場のみなさんにも答えてくれると思うので  
頑張りましょー」

と言つて劇は始まつた。やつぱり最初の場面をやるやつらは結構  
緊張をしていて失敗はしなかつたが頑張つていき途中からは  
みんな練習通りにできていいて劇が終わり周りの拍手が拍手をして  
劇は成功したのであつた。（第47章終わり）

新園祭 やのへ（福島）

あけましておめでと「ハーモニカ」。  
今年もよろしくお願いします。  
いつもながら短くすいません。。。  
これからも見守ってください。。。

## 学園祭 その2

学園祭の劇が終わり俺たちの学園祭が今始まった。

まあ俺たちの劇の片づけがあり俺たちは一歩遅いけどね  
俺と夏季坂と金崎の3人がいて

「さて・・・3人でぶらぶらするか?」

俺が言つたら、夏季坂は

「うん。 そうだね~どこに行く~?」

と言つて金崎は

「そりだな~まあ・・・今日1日は屋台中心だし  
明日もイベントなどがあり本番は明日だから  
ゆっくり回つて行こうか。」

と言つて俺たち3人が適当に歩いていこうとしたとき  
「ちょっと待つた~!!」

と言われ俺たちはびっくりして後ろを向いた。そして  
俺の腕に抱きついた眞魅先輩がいた。

「な・・・なんですか・・・眞魅先輩・・・」

俺がすぐ落ち込みながら眞魅先輩に言った。

「山君、今日と明日は・・私たちと一緒に回らない?」

眞魅先輩は突然言い出し、

「はあ・・・別にいいですけど・・・でか私たちって?」

俺が言つたら後ろを見てわかつたのはコレット、リオ、  
加奈子、糸見の4人がいたのであった。

「まあ、あの遊園地のように交代制のデートで~」

眞魅先輩はのりのりで言つた。それを聞いた夏季坂と金崎は

「あ、僕たちは2人で回るから~」

夏季坂が言つて

「そ・・・そりだな~まあ山本また学園祭後に祝おう!」

2人が言つて俺を置いてさっさと逃げて行つた。それを見て

「あの2人やさしいじゃん」と眞魅先輩は言った。

「いや・・多分・・・2人は眞魅先輩の気迫で逃げて行つたと・・・そう・・おれたちの学校で眞魅先輩は有名人であり、ふつうなら気楽で話せるけどなんか俺以外の人に聞くと俺がいるときといないときで

オーラが違つらし・・恐るべし・・眞魅先輩・・・。

「で・・今回はどうするのですか?」

と言つて眞魅先輩は

「ん~前見たいに遊園地で1人ずつデートは難しいかも。時間ないし」

と言つたけど。あのときも時間なかつたような・・・っと俺は思つた。

「で・・今日と明日はみんなで一緒に回りついへ」

と言つて俺たちは全員で回つて行つた。まあ、学園祭だからお好み焼き、焼き鳥、たこ焼きなど定番が多かつた。みんないろいろな食べ物にひかれていつたので俺が1人ずつおひつてあげたのであつた。

学園祭1日が終わつてみんなが満足して俺はみんなに気付かれずにさつさと家に帰つた。その帰る途中にリディアさんを見えたけど声をかけずにさつさと家に帰つたのであつた。(第48章終わり)

1日目をつと帰った俺はその次の日にみんなに怒られてしまった。  
まあ、そうだろう・・早く帰つたし・・・いまだに女の子に  
すごく弱いな・・おれ・・・んで2日目も一緒に回ることになった。  
夏季坂と金崎は俺のことを思つてくれたと思つて2人は俺と別に  
行動することになった。だけど・・おれは・・お前らと一緒に  
回りたかつたぜ・・・1人で5人はきついぞ・・・これは・・  
と言いながらみんなで回っているときに2日目はいろいろな  
イベントがあり、カラオケ大会、早飲み大会、早食い大会、  
モノマネ大会などたくさんのイベントが2日目に一気にやるらしい  
どんだけ・・金を使うんだ・・この学校と思いみんなが俺と1人で  
デートをかけるらしくカラオケ大会で決着するために5人がエント  
リーを

したのであった。その時に俺の前にリディアさんがいたので  
「お久しぶりです。」

俺は頭を下げる。

「あら、山本さんお久しぶりです。」

リディアは頭を下げる。俺は

「今日はコレットさんのために来たのですか？」

俺が言つたらリディアさんが

「まあ・・体育祭のときは見に行けなかつたので旦那さまも学園祭  
のときは

ゆつくりしてきてもいいから行きなさい。つと言われたもので・・

・コレットさんを見に行つていたけど楽しそうでなによりです。

でも・・本当の目的は山本さんあなたに大事な話があつて

今日はここにきました。」

と言つて俺は

「 そ う で す か ． ． だ け ど こ こ じ ゃ ． ． さ す が に 無 理 で す ね ． ． ． ．  
終 わ っ た ら 古 い ア パ ー ト で す が ． ． ． つ ち に 来 ま す ？ 」

と 言 つ て リ デ イ ア さ ん は

「 ええ ． ． お 願 い し ま す 。 場 所 教 え て く れ ま せ ん か ？ コ レ ッ ト お 嬢  
様 に は

あ ま り 聞 か れ た く な い の で ． ． ． ．

と 言 つ た の で 僕 は 住 所 を 教 え た 。 そ れ を 聞 い て リ デ イ ア は 何 か 機 械  
を 出 し て

何 か を 打 つ て そ れ を 僕 に 渡 し た 。

「 で は ． ． 夜 1 1 時 ぐ ら い に は 学 園 祭 が 終 わ る は ず で す の で 家 に 帰  
つ た ら

こ の ボ タ ン を 押 し て く だ さ い 。

と 渡 さ れ た 。

僕 は

「 分 か り ま し た । リ デ イ ア さ ん も 今 日 学 園 祭 を 楽 し ん で く だ さ い 。  
後 で コ レ ッ ト さ ん が カ ラ オ ケ 大 会 に 出 ま す の で 」

と 言 つ て リ デ イ ア さ ん は

「 あ ら ま ～ そ れ は 楽 し め で す ね ～ あ り が と う ～ ぞ ～ こ ま す 」  
と 言 つ て 僕 た ち は カ ラ オ ケ 大 会 を 待 つ た 。（ 第 4 9 章 お わ り ）

## 学園祭 その4

俺とリーディアさんはコレット達がカラオケ大会の受付中いろいろなことを話してた。まあ本命は夜になりそうだが…そして待つた時にカラオケ大会が始まつた。何人かの参加者が歌つて点数が出たりして、今回は結構ハードな戦いになりそう。とか自分は思つてたり…。てか戦争に行くのではないんだが…。

w

そして一番最初に出ていたのはリオだつた。ドラマに出てきた曲でそして

きれいな歌声で終わつた。結構いい評価だつた。

「まさか…リオがうちらが知つてそうな曲を選ぶとは…  
さすが…しかもきれいな声だな」

俺はそう思いながら見ていた。次は…加奈子だつた。まさか…  
加奈子が…演歌の曲を歌うとわ思つてもいなかつた…しかも高評価

凄すぎだらう…糲見とコレットは俺たちがよく聞く曲を2人で歌つていた。

これも高評価だつた…。さすが…毎回の打ち上げにカラオケ  
うつと言う

5人ではまいつた…本当に…んで…最後の眞魅先輩歌うとき  
にまさかの

アニメ曲…。これは…さすがにないだらう…この場面で…。  
しかし…

男性が…歌うならまだしも女性がね…。つと俺が呆れていてた  
だ…

唚然してたら周りの雰囲気が…1つにまとまつてる…。

「みんな行くよー！」

眞魅先輩が声を出したら周りのみんなも…。

「いえ～い！」

と全員がノリノリだった・・・まあ・・・多分つけま・・・テレビがな  
いからね・・

あんまりテレビの中身までは知らないが・・・まあ・・・新聞は取つ  
てるよ・・・

一応・・・今のアニメ曲つてこんなに・・・凄いのか??とか自分  
は思つていたら

歌が終わっていた・・・そして結果眞魅先輩が優勝・・あなたはどん  
だけ恐ろしい人

なんですか・・・先輩・・・と自分が・・心から眞魅先輩を恐るし  
い人だと思い

呆れていた・・・。その後リディアさんを含めていろいろなイベン  
ト会場に行つて

参加したり屋台もあつたのでまたおじつたりしてみんな楽しんでい  
た。

「まあ・・・」んな日でもいいか・・みんな楽しんでるし・・・。

俺が楽しまないとみんな悲しむしな」

俺がそう思いながらみんなと一緒に楽しみました。途中でリディア  
さんは

「では、私はそろそろ戻らないといけないので失礼します。」  
と頭を下げて俺は

「楽しくで良かったです。」ちらりとありがとうございました。」

と俺は礼を言つてリディアさんが小さく声で

「では・・・また後で。」

と言つてリディアさんは俺たちから去つて行つた。その後俺は彼女  
らに・・

いろいろ連れまわされ、結局解放が10時頃であった。家に帰つ  
たのは

11時頃だったのでリディアさんから渡されたこの機械を襲う  
と俺は

したのであった。

(第50章終わり)

## リディアからの・・真実？

俺はリディアさんからもらつた？この機械を押してみた。

そして俺の部屋に魔方陣が現れ数秒後リディアさんともう1人が現れた。2人は俺の部屋にテレポートされたみたいで

「あら・・中に入つてしまつた・・失礼しました。」

トリディアさんともう1人の方が玄関に靴を置いた。

そしてリディアさんともう1人は

「失礼します。」

と部屋に入った。まあ元々部屋に入つたから気にしてないだが・・

「小さくこんな家ですいません。」

と俺は謝つて2人にお茶を出した。

「いえいえ、お構いなく。」

トリディアさんが言つてもう1人の方が

「そうですよ。気にされなく山本様も座つてください。」

と言つた。そして俺も座つた。そして

「山本さんはこの方を紹介してませんね。」

トリディアさんが言つてもう1人の人が

「挨拶は私がしよう。改めまして。私は天界の王のラファエルと申します。多分会つたのはこれが初めてですが、緊張なさずに」と言つた俺は

「いえ・・では・・なぜ・・その天界の王のラファエル様が・・うちに・・・?なにがあつたのですか?」

俺が言つてラファエルが

「様はよしてくれ。普通にラファエルと呼んでもよい。えーとリディアから話は聞いた。あなたは天魔人ですね。」

と言われリディアは

「あ、気にならないでください。この方は天界の王でもありコレットの父親もあるし、私を拾つてくださつたお方ですので大丈夫です。」

「

と言われ俺はちょっとびくつとした。ラファエルは  
「ああ、だから安心してくれたまえ。もちろんコレットこな秘密を  
している。

ちょっと・・山本様に質問がありまして・・・」

と言つてきたんで俺は

「何でしうか?」

と言つた。ラファエルは厳しい目をして俺にこれから起る二件を  
して俺の未来  
について話してくれた。（第51章終わり）

## リティアからの・・真実？ その2

「ラファエルさんは厳しい目で俺を見つけて言った。

「実は今天界は問題はないだが・・・魔界が全世界を征服しようと考へてるのだ。そしてまず君たちの世界を征服してそれから俺たち天界を攻めようという計画を情報を得て、それを阻止するために君の手を借りたい。」

「なぜ、魔界は全世界を征服しようと考へたのですか？」

と俺がラファエルさんに質問をすると、

「その理由は私と山本さんの天魔人をもう一度と作らないことが1つの理由。もう1つの理由は正体はばれてはいないのでですが・・・山本さんがうちから助けたときの魔力を感知してしまい・・・天界に天魔人がいることを知つてしまい、不公平など言い争いになりそうで・・・今現在軍を強化をしているらしく・・・いつ攻めてくるか

私たちも想像ができなくなりました。」

とリティアさんが言つたら

「そこで・・・うちらは天界と君たちの世界を魔界から来るところを結界を

貼ろうとしているのだが・・・だがしかし・・もし失敗した場合のための

軍の強化もしていく、そこで元々魔力が高い私とリティアが結界を作る

役目をした。だが・・・うちらでは・・魔力で結界を何年かで破られてしまう。

そこで・・3人で結界を作ると当分は結界を破れないけど・・

その素質が

うちらで魔力が高いのはコレットと山本様のどちらかにお願いし

ようとしててな

山本様がよければ・・・。お手伝いしたいのだが・・・

とラファエルさんが少し言葉を置いたので

「そのことはコレットには伝えたのですか？」

俺が言つたら

「いや、コレットにはまだ伝えてないが・・・」

ラファエルさんが答えて

「うちがよければお願ひします。」

と頭を下げた。それを聞いたラファエルさんが

「これだけ伝えたい。もし仮に山本様と私とリディアの3人で結界が成功しても

リディアと山本様の天魔人の魔力が無くなり普通の人間になってしまします。

まだ・・推定ですが・・それでもいいでしょうか?」

と聞かれたので俺はリディアに

「リディアはそれを理解をして協力をしたのか?」

と聞かれたのでリディアは

「私は困つてる方を置いてはいけません。私の天魔人の魔力は親が私を守るために

なくなつて私は1人だつたけど・・ご主人様が私を助けていただいたので私は

1人でも多くの人を助けたい。だからそのために今の私がいると  
思いますので」

と答えた。それを聞いて俺は2人に言った。（第52章終わり）

## 俺の未来？

俺はリーディアの一言で決心はついた。そして  
「分かりました。うちでよければお願ひします。」  
と俺は頭を下げた。

「ありがたい・・何とお礼をすればいい」とやがて。  
ラファエルさんが言って

「だけど・・ちょっとお願ひがあります。」

俺がそう言つたらラファエルさんが

「ああ、条件はのむつもりだつたんだ。私にできることなら  
条件を言つてください。」

と言つた。それを聞いて俺は

「簡単なことです。そのことをコレット、リオ、眞魅、糲見、  
加奈子には秘密にしてください。俺があいつらを心配させると  
俺は集中が無くなるから・・今日のことも秘密にして貰ふと  
ありがたいです。もう一つは今の ore では多分魔力の制御が  
うまく使えません。リーディアさんを守るときはまく成功をした  
けども

元々天魔人の魔法を使ったのがあの時は初めてだつたので・・・  
うちを鍛えてください。お願ひします。」

俺は頭を下げた。それを聞いたラファエルさんが

「ああ・・分かった今日の件と今後のことはの人たちには  
秘密にしよう。それは守る。山本様が暇な時間があればいつでも  
天魔人の魔力を鍛え制御できるようになるでしょう。それは問  
題はない

だが・・しかし・・今のうちが予想しているのはあと2年後つ  
まり・・  
もしかしたら・・山本様の学校で卒業式が出れない可能性も高い  
だが・・

とラファエルさんが言って俺は

「大丈夫です。それよりみんなの今後の幸せを願うのが先です。うちは

もう・・自分で無力差をなくしたい・・もちろん大学にも行かない

つもりなので気にしないでください。まあ。。それを眞魅先輩に  
気付かれたと怖いですがね・・あはは・・・

と俺は答えた。ラファエルさんが

「そうか・・それはすまないことをした・・山本様今後もよろしく  
お願ひします。

一応鍛える件はまた今後お伝えしますのでよろしくお願ひします。

」  
と言つてリティアさんとラファエルさんがテレポートで天界に帰つた。

俺は重大なことをしてしまつたな・・と思いながら  
ご飯を作つた。（第53章終わり）

学園祭で俺はリディアさんから大事な話があります。と

聞いたので夜にリディアさんを呼んだら。もう1人の方がいた。

しかもその方はリディアを助けた方であり、コレットの父親しかも天界の王様だとその時に初めて知った。そしてラファエルさんが俺に早くて2年後に魔界から全世界を征服しようと考へてるらしくそれをラファエルさんが魔界での結界をするためにラファエルさんとリディアさんが俺に手伝ってくれないか?っと頼んできた。俺は別にかまわないけど···とか思いながら考えてたけどもし俺が手伝わなかつたら俺の代わりに魔力が高いコレットが結界をすることになつていて、俺はもし仮にラファエルさん達が結界を失敗したら···眞魅先輩たちが···危ないかもと自分は思い手伝う代わりにコレット達には秘密にしてもらうことをお願いをした。そして結界をするのに強大な魔力が消費するらしくラファエルさんは問題はないらしいけど俺やリディアさんは天魔人の力が無くなるらしく、普通の人間になるだそうだ。リディアはいつものようにラファエルさんの家の使いとしてくれるらしく

俺は···元々魔界人には恨みがないし、もし···全世界が平和のためにこの力が消えるなら、お母さん、お父さん、おばあちゃんはきっと許してくれる

と俺は思う。そして···俺はそのためにもラファエルさんにあいてる時間で鍛えてくれることを約束してくださつて、2人は一日天界に帰つて行つた。

その2日後···学園祭が終わつて2日休講だつたので俺はのんびりして

学校に行つた。そして教室に入つてから夏季坂と金崎にあつて

「おはよう～」

俺はいつも通りに2人に挨拶をして、

「おう、おはよう山本」

「おはよう～山本～」

夏季坂と金崎が言つた。そしていつも通りの学校の授業などあり昼休みに

「そりいえば・・・もうすぐテストだつたな」

金崎が言つて

「あ、そりいえばそりだね～」

夏季坂が言つてのんびり会話をしていて

「ところで2人は勉強得意なのか？」

俺が気になつていたことを2人に聞いた。

「いや。全く・・・」

金崎がはつきり言われ、

「ん～基礎ぐらいなら大丈夫かな～」

夏季坂が言つて俺が

「じゃあテスト期間前に図書室で勉強会でもするか？」

と2人に言つたら

「まあ・・前のテストの点数はかなりひどかっただしな・・・

確か・・山本結構成績がよかつたし・・分からないとこ

教えてくれよ～頼む～」

「いいですね～もし・・自分が分からないとこがあつたら教えてください。」

2人はそう言つて来週からテスト期間が始まるので俺たちは勉強会のことは置いといて楽しい昼休みを過ごすのであつた。（第

54章終わり）

## 勉強会～その1

その後俺は2人に学園祭のときに一緒に回れなかつたんで3人で学園祭成功の祝杯でファミレスでお祝をした。

もちろん、俺が2人に一緒に回らなかつたことの許しをもらい2人にはおごりとしてファミレスになつた。そしていつも通りの生活をしていて。テスト1週間前になり、放課後俺たちは図書室があいてる時間までに3人で勉強をしていたが・・・途中で糸見に見られてしまつたらしく・・・結局・・・

糸見と加奈子、コレット、リオの4人も参加することになつた。

「ごめんな・・・」

俺は夏季坂と金崎に小さい声で謝つた。でも

「気にするな。元々こそこそしてやつてはないし・・・」

「気にしないで〜俺たちも参加してもいいって言われたから助かつてるぐらいだよ〜」

2人が俺に言つてくれたので

「ありがとう・・・2人とも」

俺は2人にお礼を言つた。そして・・・俺、夏季坂と金崎。糸見、加奈子、コレット、リオの7人でやることになり一応男グループと女グループで勉強することになり、

俺と糸見は毎回のごとく大体の試験範囲は知つていたので一応一通りはできていて分からないところを教えていった。

そして・・・夏季坂は元々基礎はできていて応用が結構できないところが

多いが・・・時々糸見が見ててくれて応用のところでアドバイスなどして夏季坂は何とかできるようになり、金崎は自分は全くつと言つても

全く勉強ができないつというわけでもなく、できるところとできな  
いところが

分かれていてす”く助かっていた。それを俺が簡単に教えていき段々と

できるようになつていつた・・・。

「本当に助かるよ・・2人とも・・結構できていて・・おれはす”く助かる・・」

俺は心の中でそいつた。まあ・・後のメンバーは・・いつもの同じように

俺と轟見のアドバイスがないときついらしく・・

毎回のことく・・教えていた。（第55章終わり）

## 勉強会～ その2

学園祭後に2学期最後のテストがあるので俺は夏季坂と金崎と2人でやるつもりだったが・・まさか糸見に見つかるとは思つてもいなかつたので結局全員でやることになった。まあ・・一応俺と糸見が大体勉強ができるしかも夏季坂と金崎も基礎はだいたいできるから本当に助かった。

学校の場合は放課後使って図書室が閉まるまで俺たちは毎日勉強会をして土日は夏季坂と金崎も一緒にリオの家で勉強会をしていた。

「でも・・夏季坂と金崎は理解が早くて助かったよ」俺はそう言った。2人は

「いや・・元々基礎ができていただけだし・・糸見さんや山本の教え方がとてもよかつたんだよ」夏季坂が言って

「そうそう。俺も全く勉強とかすぐに投げ出すし・・・だけど今回は最後まで勉強ができるなんて俺はすごくびっくりしてるよ・・糸見さんや山本のおかげで少しだけどできるようになるとは正直びっくりしてるさ・・あはは」

金崎が言った。まあ今日で土日の休日は勉強はできないけど後はテスト前日まで図書室を借りて勉強をしようっとみんなで相談をして終わつたのが18時ごろになつた。

そして・・おれは家に帰つた時にリディアさんとラファエルさんが家の前に立つていたので

「こんばんわ」

俺が2人に挨拶をして家中に入れた。そして・・・

「前に山本様が言つていた訓練のことですが・・・

一応訓練場はできましたのでいつから使いますでしょうか?「

ラファエルさんが言つたので

「そうですね・・・来週はテストがあるので終わったら

お願ひします・・・」

俺はそう言つて

「分かつた。じゃあ山本様にはこれを

リディアが俺にカードっぽいものを渡した。

「これは訓練所に移動できる機械です。まあ・・・鍛えられればこれは必要なく自分で移動できますが・・・最初のほうはこれで来てください。」

リディアさんが言つてくれた。

「ありがとうございます。これからお願ひします」

俺がそう言つて2人は忙しいので失礼しますね。つとこつことで

天界に帰つて。俺は

「よし・・・がんばるか・・」

と言つてタジ飯を作つた。(第56章終わり)

## テスト～その結果

テスト前日まで俺たちは授業で先生からのテストに出る場所などをメモしてそこを

覚えたりそれ以外でも一応少しでもできるように

勉強をした。そしてテスト当日俺は普通に教室に入つて

「おはよう～」

俺は2人に挨拶をして

「おはよう～ 山本」

夏季坂が言つて

「おう、おはよう」

金坂が言つた。2人は教科書を見てたので

「今日はテストだ。がんばりつけ」

俺が言つて

「ああ、そうだな。分からぬといふの教えて食べてさんきゅーなすごく助かった。山本」

金崎が俺にお礼を言つて

「うんうん。僕も基礎しかできなかつたし、山本と糞見さんのおかげで・・・少し応用もできたから・・・テストには悔いがないように頑張るよ。」

夏季坂が言つた。俺も自分の机に座つてテストまでに少しでも教科書を見直して復習をした。そしてテスト。俺と糞見は楽々と分かる問題から埋めていつてテストは終わつた。

あとからみんなに聞いてみると、糞見は間違つてるかもしれないけど全部埋めたそうだ。夏季坂は基礎問題は完璧だつたらしく応用はできるところは埋めてできなかつたところは少しでも解いたらしく夏季坂は満足をしていた。金崎も前までは半分ぐらいしか埋められなく今回は会つてるとかわからなかつたけど全部埋まつてしまふれしそうだつた。他は・・・なんか悔いがあつ

たらしく

もう少し時間を・・つという声が・・そして・  
テスト後・・まあ・・大体は上つたらしくクラスでは1位が轟見  
3位が俺、6位が夏季坂、10位がコレット、11位が金崎、  
15位が加奈子、16位がリオでしたが・・噂によると  
眞魅先輩が3年学年で1位だつたらしい・・どんだけ  
勉強ができるんだあの人は・・とか思つてた・・（第57章終わ  
り）

## クリスマスについて

「テスト後みんな忙しかった。なぜなら

「そろそろクリスマスだね~」

夏季坂が言った。そう・・もうすぐクリスマス  
まあ俺はクリスマスは店が繁盛するのでバイトで  
いつもクリスマスつという気分がなくそのまま過ごしてゐるけどね  
今回もそうだと思ってたんだが・・・テスト後店長が

「山本今年はバイト入らなくてもいいぞ?」

店長から言わされたので

「なぜですか?他の人も・・・クリスマスは  
休みたい人多いでは?」

俺がそういうんだけど・・・

「山本・・・お前は・・・4年ここで働いたけど  
4年間お前はクリスマスのときいつもお前は  
他の人のためにシフト入れてくれるじゃないか  
今年はみんなも山本の気持ちを考えて今年は  
お前は眞魅ちゃんや他の子などで楽しいクリスマスを  
迎えてくれ。だから店のことは気にするな。な  
と言われた。うれしいだけ・・・正直言つて申し訳ない・・  
そういうことで

「夏季坂と金崎はもうクリスマスの予定とか入ってるのか?」

俺は2人に聞いてみた。

「いや・・・ないけどどうして?」

夏季坂が言つて

「いやあ・・元々バイトがあつたんだけどその日だけ店長が  
休めつて言つてて・・・1人じゃ・・暇だからの・・・」

俺はつぶやいたら

「そつか~じやあ一緒にやるか?クリスマスの日に何か

金崎が言つたので

「ん~じゃあ僕の家に来る? 2人にはいつもお世話になつてゐるから」

夏季坂が言つた。

「でもいいのか?」

俺がそう言つたら

「うん。別にかまわないよ? お母さんもまた2人を呼んでほしいと言つてたから。多分大歓迎だと思つ」

夏季坂が言つたら

「その話ちょっとまつた~」

声がして俺らはみんなで後ろ見たら・・そこにいたのは眞魅先輩がいて

「な~に男3人でクリスマスイブを過ごそなん~私も話入れてよ~」

と眞魅先輩が言つて結局・・・眞魅先輩が強制的にクリスマスの計画を

作られたのを知つたのは2日後だった・・・(第58章終わり)

## クリスマスの準備

んで・・結局眞魅先輩が勝手に決められ俺たちは困っていた。

「本当に・・ごめん・・」

俺が2人に謝った。

「気にするな。」

「大丈夫だよ。」

2人はそう言つてくれた。眞魅先輩は

「だつて、山君私たちを置いといで男だけでクリスマスって  
ひどいよ。クリスマスはみんなでわいわいしないとね。」  
とのりのりだつた。んで俺を含め6・7人で夏季坂の家に  
お世話になるのは行けないと想い話した結果俺は・・

おばあちゃんの家でクリスマスをすることになった。  
ずーと使ってなかつたので俺はクリスマス前に1回  
おばあちゃんの家に行つた。そして家の中に入つて  
和室におばあちゃんの写真があり

「お久しぶりです。おばあちゃんずーと家にこれなくつてごめんね  
また少しだけどいなくなるけどクリスマスだけ使わしてください。」

と言つて俺は和室から出てリビングなど自分達が使うところを  
先にきれいにしていて後は使つてない所をきれいにしていた。  
そして・・・知らない手紙を見つけた。そうおばあちゃんが  
俺宛に書いた最後の手紙だつた。俺はそれを見つけるけど  
これを呼んだら遅くなると思い。先に家全体をきれいにした。  
そして・・・手紙を開けてみた。

「連碁へ

多分知つてるけどお前は天魔人だよ。だけどね・・・

天魔人とか関係なく連碁は連碁らしく自分で未来を  
選んでね。自分が思つたことをすれば、誰もあなたのことを

憎んだりはしないでしょ。だけどね・・・これだけ覚えててね  
何も言わずにあなたが自分なりに行動をすると悲しいことを・・  
おばあちゃんは天国に行つてもあなたのことを見守つてることを  
この先辛いこともあるでしょ。だけどそれを逃げずにがんばって  
未来へ・・がんばってね連暴

おばあちゃんより  
「

手紙を読み切つた俺は  
「ありがとう。おばあちゃん」  
と言つて今日はアパートに帰つて行つた。（第59章終わり）

## クリスマス

「メリークリスマス！」

と女性陣がノリノリだった。まあ、仕方ない。

俺たち男3人は微妙な感じだったが・・・

空気を悪くなると眞魅先輩が・・まあ俺だけならいいだが  
2人には特に・・迷惑かけないようにしないとな・・うん。

まあ、今回はいつもはリオの家が多いだが・・

さすがに毎回リオの家にお世話になるとは行けなかつたので  
今回はおばあちゃんの家を使ってクリスマスを過ごすことになつた。  
俺も前に掃除する前までは4年以上この家に来なくなつて  
久しぶりに来てみて良かつたと思う。だけどあまりにも1人で  
使うのはもつたいたいと思う・・・だけれどいつか俺が1人前になつ  
たとき

おばあちゃんの家に住むことにするよ。つとこつも心で言つていた。  
「それにしても、久しぶりに来たわね～」

眞魅先輩が言つて

「そうだね～山ちゃんのおばあちゃんの家かなり広いね～」  
リオが言つてくれた。まあだが・・リオやコレットの家には  
負けるがね・・・と思いつつみんなで夕ご飯を食べた。

「それにしても今日は豪華だね～」

夏季坂が言つた。本当にそうだな・・おれもこんな食事初めてだ。  
何せ元々クリスマスとかはいつも食事をしながら何も考えずに  
クリスマスを過ごしてたからの・・・

「まあ・・・店長にはお礼をしとくよ。」

俺が言つた。そうこれ全部店長からの贈り物だった・・・

さすがに食事だけでは森足りないとか思い自分でケーキを作つたけど  
店で買つたつと言つことでみんなに出した。女性陣が盛り上がりつ  
るうちに

「そりいえば・・山本つていつもみんな一緒にいるんだ？」

夏季坂が言った。

「そりいえばそりだな・・いつも山本の周りには・・」

金崎も言いたそうだが・・これ以上言つたらもしかしたら・・聞こえてしまう

から言葉を止めたけど

「そりだな・・俺が嫌だと言つてるけどやつぱりついてくるだ・・  
もうあきらめたよ・・・」

と言つた。まあ俺たち3人はのんびりクリスマスを過ごし女性陣は  
ノリノリでクリスマスを過ごすのであった。（第60章終わり）

クリスマス後俺はみんなが帰った後に1人でおばあちゃんの家の中をきれいにして家に帰った。

そして、次の日に俺は何もなかつたので前にリディアさんからもらった機械を使って俺は天界に向かつた。ついたところはトレーニング室みたいなものだつた。そこにいたのはラファエルさんとリディアさんがいて

「お待ちしてました。山本様」

ラファエルさんが挨拶をした。

「では・・すぐに天魔人の力をコントロール・・っと言うわけにもいかないので天魔人の力はかなりの消費をするので今の山本様の魔力と体力のバランスが鳴つていません。このままコントロールの訓練をしていたら山本様の体力がもちません。ですのでは基礎体力を十分にして私の判断で大丈夫ならば天魔人の魔力のコントロールをしましよう。その後3人で小さい結界の訓練をして、対魔界人の対応の戦い片を練習しましょう。いいでしあうか？」

山本様

ラファエルさんが言つて、

「はい、大丈夫です。まだ役には立たないけどこちらをお願いします。」

俺は頭を下げた。そうしてまずは体力作りをした。いつもは軽いランニング

だけをしていたが・・腹筋などの筋肉を鍛える人と同じようにトレーニングをしていた。そして休みながらやつていて気がつかないうちにまさかの3時間ぐらいトレーニングをしていた。自分もはつきり言って

そんなに「する」とはなくびっくりしていた。ラファエルさんに聞いてみると

ラファエルさんはトレーニングをするとおおむね4時間は軽く超えるう

し

だけど毎日すると無理があるので時々でいいらしい。まあ俺は朝のランニングをしてるといつたら、それもいいらしい。。。。うん

やっぱり毎日欠かせないかもな・・ランニングはなので

ランニング以外のトレーニングは3日につき一度最低1時間多くて3,

4時間で

やることを約束になつて俺はアパートに飛んだ。（第61章おわ

り）

## お正月～ その1

クリスマス後づくはラファエルさんとリディアさんには頼んだ天魔人であるうちを鍛えてほしいということを言つてクリスマス後の数日後に俺は訓練をした。まずは魔力をコントロールするより体力つまり精神力を鍛えよ？つということになり今自分はスポーツジムに行くことがあまりできなく

ラファエルさんとリディアさんのおかげで

いつでも天界にあるトレーニング室？を借りることができるようになった。しかし毎日は無理なのであいてる時間は朝のランニングをしてリディアさんからのお勧め料理を幾つか教えてもらつた。まあ、つまりいつでも健康状態であることで自分で独自で鍛えることができると言つ自分の理論。まあごく助かるけどねんで正月前に俺は夏季坂と金崎に電話をして眞魅先輩たちにばれないように一緒に初詣に行こうといつ約束をしていたが・・・

「「「「あけましておめでとうござります～」「」「」「女性陣が元気よく俺に挨拶をしていた。

「本当にすまん。山本・・」

金崎が言つた。なぜばれてしまったのかというと元々俺は近くの神社に行くと見つかってしまうのであって1時間ぐらいかかる神社に行こうと言つて2人にもOKもらつていたんだけど眞魅先輩が・・・夏季坂と金崎を駅の前に見えたので

こつそりと追跡したらしく・・・そのときに他の人を携帯メールで伝えたらしく俺たちが集合した1時間後に再開したわけなのだ・・

「眞魅先輩おそるべし」

俺が・・落ち込みながら言つた。

「山君私たちから逃げたらだめよ、特に私はね」  
眞魅先輩が言われた。まあ・・結局俺はいつになつたら  
男3人で一緒に遊べる日が来るのか・・とか思つてたんだけど・・  
その後俺たちはおみくじを引くのであつた。（第62章終わり）

## お正月～ その2

その後俺たちは眞魅先輩を先頭にいろいろ回っていた。

「おみくじ引こうよ～」

眞魅先輩が言って全員でおみくじを買った。

そしてみんなおみくじを買って言つてまず最初に男性陣

「中吉かまあまあか」

俺が言った。次に開けたのは

「凶か～仕方ないか・・・」

金坂が言った。最後に

「お、大吉だ～」

夏季坂が言った。まあ、大体そんなものかと俺は思った。

次に女性陣があけることになつて、まず開けたのは

「うわ～ん大凶だ～」

リオが大凶を引いてショックを受けていた。

「まあまあ。大凶は今悪くても後からどんどんよくなるから  
気にしないでリオちゃん」

眞魅先輩が言ってそのまま開けたら

「あら、私も大凶だわ～リオちゃん私たち頑張りましょう。」

眞魅先輩が言って

「ですね・・・眞魅先輩」

とリオが言った。そして次に開けたのは

「私は吉ですね。」

コレットが言ってその次を上げたのは

「私も・・・吉ですね。」

加奈子も言って最後に

「私は大吉でした。」

糸見が言って結局

大吉は糸見、夏季坂

中吉は俺、

吉は加奈子、コレット

凶は金崎

大凶はリオ、眞魅先輩になつた。その後帰りに雑煮を食べて全員解散になつたが眞魅先輩がまだいたので俺も仕方なく家に帰つたのであつた。（第63章終わり）

## 今までの思い

俺が何にもなかつた1年を過ごそうと思つたんだが…もういろんなことでもうすぐ1年になろうとしてた…それは・・まず、この学校に行くのは俺と眞魅先輩だけだと思い何にもない生活を過ごそうかと思いながらまず、小学校の同級生、糸見と加奈子に会つてしまつた。その後困つてているところを助けてしまい・・リオとコレットその後リオとコレットが俺の過去を知りたいと言つて眞魅先輩に聞いたらしく、俺の過去を知つて知つてしまつた。まあ、天魔人までのことは眞魅先輩も知らなくそこまでは知ることはなかつた。それでも友達になりたいという2人の意思があり結局友達になつてしまつた。その後の夏休みにはコレットとリオが俺たちに天界を見せたいと言つて天界に旅行に行くことになつた。だが・・俺は天魔人なので正直あまり行きくなかった。そして1日目の買い物中に1人の女性が5人の男に声をかけられたみたいでごく困つていたところを俺が話で解決できればよかつたものの結局男達は俺に魔法で攻撃をして俺は天魔人である魔法を唱えてしまつた。そしてその女性にもばれてしまつた。その後その女性はリディアさんと言う俺とおんなじ天魔人だつたと後から知ることになつた。お互いの昔の過去を話しあいリディアさんは俺の天魔人のことを秘密にしてくれるらしい。本当に助かりました。その後眞魅先輩が俺たちのところで海鳴島に行くつと言つてみんなで言つてその後テストがあり、体育祭があつて、そこで初めて夏季坂と金崎と友達になつた。あの2人は俺に力をくれた。元々俺は自分からの行動はあまり好きではなくあの2人のおかげで自分から少しでも向き合つことができてあの2人には

すゞく感謝をしている。今後どうなつて行くんだろうか・  
俺は・・・（第64章終わり）

正月が終わって、正月っと言つても俺はバイトをしてたり、1、2学期の勉強の復習をしていた。まあ、あいてる時間は自分でランニングしたり、リディアさんからもらつた。特製？料理を作つたり、トレーニング室を借りて自分で鍛えたりしていた。まあ、時々眞魅先輩やリオ達からつかまりカラオケなどに行くこともあつたが・・・。いつになつたら俺を自由にしてくれるんだ・・・眞魅先輩。

俺は・・そう思いながら・・・三学期を迎えた。三学期はテストも1回しかないので大丈夫だと思うが・・・問題はどうやつたら俺は夏季坂と金崎と3人で遊べる日が来るのだろうか・・

「今度3人で計画を立てようか・・・うん。」

俺は心の中で言つた。最近思つていたんだが前までは軽いランニングしかしてないから自分の魔力があまりにも感じなかつたんだが定期的にランニング、トレーニング室で体を鍛えてるから少しずつ自分の魔力を感じていて自分も

「これが魔力なのかな？」

とか思つてたりしていた。だが・・問題が1つある俺だけ感じればいいけどいつもコレットやリオにも俺が天魔人のことをばれてしまつだろう。それはいいけど俺のせいだリオとコレットに迷惑だけはかけたくない

そう思いながら俺は今度ラファエルさんに魔力のことを聞いてみようと思う。今後忙しくなるけど俺は

「がんばるか・・

と懇ごんつゝ・・少し落ち込んでいた。

（第65章終わり）

## キャラクター紹介（前書き）

テストなどがありまして・・更新が遅れてしまい・・  
本当に申し訳ありませんでした・・

こういう場合もありますが・・なるべく更新できるように  
がんばります。今回はキャラも増えてきたので  
少し紹介を・・

## キャラクター紹介

まずは  
夏季坂智樹  
かきさかじもき

山本と同じクラスで自分からあまり声をかけれない性格。だが・・山本と金崎には夏季坂がいての仲間らしく今でも仲良くして勉強はまあまあできるほうだが、応用が苦手運動はあまり得意ではない。今後山本との学校生活はどういくのか？

かなざきまこと  
金崎真

夏季坂と同じで山本と同じクラス

勉強は特に苦手だが・・運動は抜群

なぜか運動部には入ってない。山本が聞いたところ

「何で？ つてそりやめんかい

だそうです。性格はのんびり。だけど人が困つたりするとすぐに助けてしまう所自分で直したいところはいつか自分で勉強をとか・・まあ俺たち3人でのムードメーカーですね。今後山本が困った時などに役に立つだろう人物。

リディア

山本と同じ天魔人。だけど山本との魔力は低いけどコントロールは優れている。実際山本の前で魔法を使つたことがないが・・2年後の魔界から軍勢を防ぐため結界をはるために山本とラファエルそしてリディアの3人で結界をはることになり今後重要な人物である。性格はおつとりでいろいろな世話をしてくれる

優しい人。魔力は天界人の中で上にあたるかな？

### ラファエル

現在天界での最強と呼ばれる人。しかもコレットの父親山本とリディアの前で魔法を使ったことがないけど使つたら町ひとつ破壊できるぐらいの持ち主。今後山本の強化をしてくれる優しい王様だ。性格まじめ。だけど教え方は優しいらしい。魔力はまあ、もちろん天界の中で1番、しかたないね。今後重要な人物だ。

さて短い紹介ですが今後山本はどうなっていくのだろうか？

ば・・ばれた？

正月になりまさかの眞魅先輩から尾行され一緒に正月を迎えるまま3学期になつた俺たちはただ単に普通に生活を送り何もない学校生活を送つていた。まあ俺は

朝5時に起きて5時30分から1時間かけてランニングをし、7時ごろにリディアさんからもらった料理のレシピを参考にして料理を作つてご飯を食べ8時に学校に行き16時まで学校でその後バイトがあればバイトでなければトレーニング室で体力作りをしていた。体力作りをしてもう1カ月「山本様そろそろ体力もついてきて魔力も上がつてきてますのでそろそろコントロールの訓練を少しずつしてきますね」ラファエルさんが言って

「お願いします」

俺が言つた。コントロールつと言つてもただ魔力を練るだけのことですが・・それがないと結界を作る精神がないらしくこれも重要なことだとラファエルさんが言つていた。精神を鍛えるのは正座をして魔力を出せるトレーニングらしい。簡単にいえばお寺のようなことかの？まあ仕方ないことだ。まあ初めてだからやり方だけ教わりこれも時間が空いてるときにやればいいとラファエルさんが言つて俺は時間があるときはトレーニングと会わせてやつしていくつもりだ。まあ、ラファエルさんがアドバイスでもし早くコントロールをするなら攻撃型の魔法じゃなく援護の魔法を連続して魔力を消費してその後トレーニングしたほうが魔力上げにもいいし、精神を鍛えるのにもいいらしい。しかもそれじゃ・・コントロールとは言わないじゃないかな？とか・・思つてたりするが・・一応やる前にラファエルさんに魔力使つた後に

よく羽が出てしまつ恐れがあり見えないやり方も教えてもらつた。

まあされなければ自分のところでもやってもいいとラファエルさんが  
言つてくれたので夜中に人がいないとこにやつていたら

「や・・山本？」

金崎がこんな夜中でまさか俺の特訓を見てびっくりしてしまつた。

「ああ～やつぱりここでやるじやなかつた」

俺はつぶやいてしまつた。（第66章終わり）

## 俺の正直

「なるほど〜」

金崎が言った。そう俺は天魔人であることを金崎に伝えた。まあ、ばらしてもいいしその時は俺はここを離れればコレット達には迷惑をかけないだらうとか思いつつも

「まあ、山本俺はお前を友達と思っている。夏季坂のことも助けてもらつたしお前にはいろいろお世話になつたんだけど誰だつて秘密は1つ2つあるさ。だから俺はお前の天魔人のことを持ての人にいわねえ。だから安心しろ。だけど天魔人のことは俺以外に知つてるのか？」

金崎から聞かれたので

「いや。知つてるのはコレットの父親のラファエルさんとコレットの家にお世話になつてゐリディアさんの2人だけは知つてる。もちろん俺が自分から言つてないが金崎見たいに自分のちょっととした理由でばれてしまつた。」

俺がそう言つて

「そつか〜じやあ最後だけ1つ教えてほしいんだけど」

金崎が言つて

「俺が答える質問なら」

俺は言つた。

「なぜ、そのことをコレットさん達には言わないのだ？」

俺と夏季坂は体育祭のときに初めて山本と話した。が・・しかしコレットさん達は前から友達だつたから教えてよかつたんだじやないかな？特に眞魅先輩は

山本を昔からよく知つてゐる人だから相談には乗つてくれるはずだけどなー」

金崎が言つて、俺は少し考えて

「金崎が言つてるのは間違つてはいない。普通はそうだ。  
だけどね・・まず、この世に天界人と魔界人そして  
人間の3種の人類がいるんだ。そこに俺やリディアさんの  
天魔人がいてはいけないのだ。それを知つた天界人と魔界人は  
それを排除するそうだ。だけどラファエルさんは天界で  
それを止めるよう言つてくれたらしい。だけど魔界人は  
そう言つても聞いてくれない。そして俺が天魔人のことを知つて  
後1年ぐらいで魔界がこつちに攻めてくる。それを知つた眞魅先輩や

コレット達に知つたらどう思つ? 守りたいけどコレットやリオは  
天界人だから戦いに出すかもしない。それなら教えないほうが  
いいではないかと俺は思う。」

俺は金崎に少し強めに行つた。

「そつか〜じやあ俺は何にもいわね。だけど何かあつたら  
相談だけでもいいから何かあつたら相談してくれ」  
金崎が言つて俺の前に消えた。（第67章終わり）

## 眞魅先輩のお別れの準備

3学期になつて眞魅先輩につかまり初詣は男3人で行くつもりだつたが結局いつものメンバーで行くことになった。その後俺はラファエルさんから借りたトレーニング室で筋肉（魔力）の強化に向けて特訓を行いあいてる時間では朝のトレーニングやリディアさんからもらつた健康レシピなどもらい自分なりにオリジナル料理を作つたり普通の日常生活を送つていた。1月の中旬で次のステップで魔力のコントロールの訓練に入り時間が空いてて夜中だと人がいなかつたので軽い練習をしていたら金崎が偶然に見つかり俺は自分のことをすべて話した。金崎はそれを聞いて誰にも話さないつと言つて家に帰つた。それはよかつたつと思っている。その後俺は毎日朝のトレーニングをして学校に行きバイトがある日はバイトで無い日はトレーニング室で体力作りとコントロールの訓練をしていた。その後何にもない毎日が続いた。まあ3学期なのでもちろんテストもあつた。今回は各自で勉強になつたが結果はいい人もいれば駄目だつた人もいる。それは仕方ない。そして眞魅先輩が3年生だつたのでもう少しで卒業になつた。俺は眞魅先輩には秘密でお礼のプレゼントを探して眞魅先輩を驚かそうとしていろいろ探して準備をしていた。そして・・3月眞魅先輩が卒業する前に眞魅先輩を俺の家に招待をした。（第68章終わり）

## 眞魅先輩のお別れ／その1

「山君から誘つてもらうの初めてだ」「眞魅先輩が言つた。今現在俺の家だ。

誘つたのはいいが、どこに行けばいいのか

分からず・・・結局眞魅先輩に似合うネックレスと

自分で作つた料理で眞魅先輩を家に呼んだ。

「でもうれしかつたな～いつもは私が山君を誘つて  
たから・・まさか山君からお誘いはびっくりしたよ～」「眞魅先輩はそう言つた。

「まあ・・いつもはうちより眞魅先輩から誘つことが多くないですか・・今回ももうそろそろ

卒業になるから・・そのお礼といつも感謝の気持ちで

呼びました。」

俺はそう言つた。そして

「でもうれしかつた。本当にありがとう」

眞魅先輩はうれしそうに俺が買ったネックレスと料理に満足しながら俺たちは2人で黙々と食べていた。

「眞魅先輩は大学に行くんですね？」

俺が質問をしたら

「うん、そうだね～まあ・・私だけならかなり上の学校は狙えたけどね～だけどそんなのはつまらないからね

普通の大学に行って自分が将来のこと考えてみようかな～それともちろん山君を私が通う大学に連れていくよ～」

眞魅先輩はのりのりで言つたので

「あはは・・やっぱり強制ですか・・」

俺が言つたら

「もちろん～まあ山君だけじゃなくみんな一緒に

大学に行ければいいな～つと思うよ。」

眞魅先輩が言つて

「そうですか・・だけど他の人も将来考へてる人も  
いるからな・・全員は無理では？」

俺が言つて俺たちは笑いながら夜遅くまで過ごした。  
(第69章終  
わり)

## 眞魅先輩のお別れ、その2

眞魅先輩にプレゼントを渡して数日後

3年生は卒業式まで学校に行くのは自由になった。

それでも眞魅先輩は時々自分の部活の様子を見たり俺たちが帰るときに捕まえて一緒に帰ることもあった。

そして・・卒業式。この学校は1学年10クラスもあり全学年でホールに入るには無理なので毎回俺たち後輩は卒業式には参加ができないのであった。なので俺は外で卒業式が終わるまで待つつもりだったんだが・・それはみんなも同じで俺たちは眞魅先輩が門に来るまでずーと待っていた。そして12時ぐらいに眞魅先輩が

門のところに来て

「あら～みんな～」

ノリノリで言ったので

「――卒業おめでとうございます。眞魅先輩」「――

女性陣が言つて

「――眞魅先輩今までお世話になりました。卒業おめでとうございます。」

金崎と夏季坂が言った。夏季坂達は体育祭後だけど眞魅先輩と付き合いがあり、おめでとうを言いたくてきたそうだ。

「お疲れ様でした。眞魅先輩。今までありがとうございました」「俺が最後に行つて花束を眞魅先輩に渡した

「みんな～ありがとう～でも大学に行つても時間があつたらちょくちょく来るからね～その時は一緒に帰ろう～もちろん土日も遊びに行くなら誘つてよ～」

ノリノリで言った。眞魅先輩は涙をあんまりしなくうれしそうに俺たちに行つて一緒に途中までだけど帰った。そして・・みんながお別れした後俺と眞魅先輩の2人に

なつたとき俺が見たのは泣いている眞魅先輩だった。

「眞魅先輩・・・」

俺が言つたら

「あ・・ごめんね・・こんな顔を見せちゃつて・・  
だけどね・・お別れは辛いね・・みんなの前は我慢したけど・・  
山君の前まではだめだつた・・ごめんね〜・・」

眞魅先輩が泣きながら言つて

「気にしなくていいよ・・おれの前だけ泣いてもいいですから・・」

俺がいつて眞魅先輩は

「ありがとう・・」

俺の前で別れるまで眞魅先輩は泣いていたのであつた。（第70章  
終わり）

眞魅先輩が卒業した後俺たちはいつも通りに学校生活を送っていた。変わったことは・・・。そうだな・・・金崎と夏季坂がコレット達と話すことが多くなったかな?まあ・・・初めはお互に接してなかつたし話すきっかけもなかつた訳ですが・・・俺と一緒にいるときに毎回眞魅先輩につかまり俺たち3人は一緒に行動が少なかつたわけでコレット達と何回か行動したのでだんだんと会話ができるようになつたわけだ。まあ、俺はいまだに・・・逃げているがね・・・

眞魅先輩が卒業した後でも俺たちが終業式までは1週間に2回ほど学校に遊びに来ていた。

それはいいが・・・眞魅先輩・・・学校の準備は大丈夫なのか?  
とか思つてたり・・・それと別件になるが・・・  
俺は毎日のトレーニングを休まずにやつていて

1週間に1回ラファエルさんに魔力のチェックをしていただき結界の練習を手伝つてもらつた。大きい結界は3人じゃないと無理ですが・・・リング程度なら自分にもできるつと言われたのでリングの周りに結界をはる特訓をしていた。だが・・・

「山本様いい出来ですね~」

ラファエルさんが言つたんだけど

「ありがとうございます。ですが・・・正直に言つてください  
たぶん・・・まだちやんとした結界にはなつませんよね?」  
俺が言つた。それを聞いて

「そうですね・・・まだこれだと少しの反動で結界が壊されて  
しますね・・・」

ラファエルさんが言つて、少し小さい魔法を結界にぶつけたら

「結界が壊れてしまった。

「だけど、ここを練習する前は魔力をあまり感じなかつたし  
その時にやつてみたら結界など作れませんでしたよ?  
だけど・・まだ始めたばかりだし・・時間もあります。  
あと1年ですが・・今後山本様はこの結界を完璧に完成  
できるでしょう。私はできると信じていますから」  
ラファエルさんが言ってくれた

「ありがとうございます。がんばってみます。」

俺が言つて、時間があるまでリンゴの周りに結界の練習をしていた。  
そして・・数日後俺たちは2年生になった。(第71章終り)

## 2年生

眞魅先輩が卒業してから俺たちも2年生になった。1年生が終わるまで眞魅先輩はちょくちょく来てて俺たちは何もない普通の生活を送っていた。そして2年生うち高校生なので毎年各学年クラス編成でクラス替えがあり俺は結果が出たのでその日は早く学校に行つた。そして自分のクラスを見ると

「1組か~」

俺はつぶやいた。まあ、俺以外は全く興味がなかつたので俺はすぐさまに1組の教室に入つた。しかし・・早すぎたので誰もいなず俺は自分の席に着いてのんびりとしていたら、

「山本おはよう~」

夏季坂が言つた。

「おひ~。おはよう夏季坂お前も1組か?」

俺がそうこうと

「うん。今年もよろしくね~だけど金崎は2組だつたよ。」

夏季坂が言つて

「そつか~あいつは2組か。仕方ないなクラス多いから・・そう・・この学校は各学年10組もある学校だつた。同じクラスの人と一緒になれるのは珍しいのだ。

「だが・・今年もよろしくな夏季坂」

俺は言つた。そして後からどんどん人が入つて行つて

俺が見た感じは1組は俺と夏季坂だけかと思ひきや

「山さんも1組なんだね。今年もよろしくね

糸見が挨拶をした。

「今年もよろしく。といつ」とは糸見も1組なのか?」

俺が言つたら

「うん。そうだね。」

糸見が言った。その後俺と糸見と夏季坂は1組で  
金崎とリオが2組、コレットが4組、加奈子が10組となつたので  
あつた。

その後俺は新たな出会いが・・?

(第72章終わり)

## まわかの・・・？ その1

2年生になつた俺たちは何にもない1日を始まると思いまや・・・・。

そつそれは・・2年生になつてから1週間後であつた。俺と夏季坂は金崎が2組になつたので昼休み以外ではこうして2人で話すことが多く時々羈見も入り会話をしていた。その後俺はバイトや魔力の訓練などをして

いつも通りの生活をしていたのであつた。その日もバイトは無く早く帰ろうかと思つたら

「あの・・・すいません」

1人の女性が俺に声をかけてきた。

「俺でしょうか？」

俺はその女性に言つた。

「あ・・はい・・あの・・山本さんでよかつたでしょうか？」

その女性は少しそわそわしてたので

「そうだけど・・・？」

俺が言つたら

「あの・・私高原初優と言います。

今年から・・・山本さんと同じクラスになりました。」

高原さんが緊張して言つたので

「ああ～確か学級委員長だつたよね？」

俺が思い出したように言つて

「あ、はい！覚えててくれたんですね。」

高原さんが少しすつきりしたように見せたので

「そりや・・・さすがに・・学級委員長とかは・・覚えないとな

俺が言つと

「それはそうですね・・あはは。」

高原さんが苦笑してたんで本題に入りたかったので

「ところで高原さん俺に何か用ですか？」

俺が言ったので

「えーと・・あの・・私は・・・1年生の体育祭のときこの山本さんを見てから・・好きになりました・・だから・・私と付き合つてもらえないませんか？」

高原さんが恥ずかしそうにして走つて逃げて行つた。

それを見て・・おれは・・

「はあ・・やつぱり・・体育祭でリレーやるんじゃなかつた・・。つぶやいて・・おれは明日からどう答えていいかわからないまま

家に帰つたのであつた。（第73章終わり）

## おれかの・・・？その2

私高原初優に告白された俺は

その日は何にもせず少し考えてた。その次の日

俺は普通に学校に行き教室に入つて夏季坂に

「おはよー」

俺が言つて夏季坂が

「山本おはよー」

返事をした。そして席に着くと

「山本さんおはよー」ざわこます。

高原が挨拶をしたので

「おはよー。高原さん」

俺が返事をすると高原さんは顔が赤くなり自分の席に急いで戻つた。俺はあまり反応できなくそのままにしていたが・・・やつぱり昨日の告白なきつとびっくりしたし周りにも聞こえたりして今日は・・・ちよつと俺と高原さんの話でいっぱいだった。

昼休み俺は一人でご飯を食うことにすると思い学校の中庭に行つた。そしてご飯を食べてる途中で

「あの・・隣いいですか？」

轟見が俺に声をかけてくれた。

「ああ、どうぞ」

俺は言つて轟見は俺の隣に座つた。

「今日は加奈子たちは？」

俺は轟見に質問をして轟見は

「今日は山さんと話したくて断つてきたんです。」

と言つたので

「高原さんのこと？」

俺が言つたので

「うん・・・私も帰りついたときに聞こえたから・・・」

糞見が答えると

「そつか・・・だけど・・・俺は高原さんとは付き合えない」

俺がそうこうと

「そうなの?」

糞見が質問をした。

「元々俺は・・付き合つ資格もない。昔みたいな失敗もしたくない  
そして高原さんと話したのも機能が初めて、付き合つても  
彼女がかわいそうだ・・こんな俺と付き合つなんて・・」

俺はそういった。だけど

「そうなのかな・・・だけど私は山さんと初めて会つたとき  
あ、この人といつか付き合つてみたいな。とか思つてたよ。  
だけどね・・山さん私も今もあなたのことが好き。だけど  
山さんと付き合つ資格がないのは私も同じだよ。山さんだけじゃ  
ない

誰も付き合つ自信がない。だけど好きだつていう気持ちは変わら  
ない

だから・・山さんもし・・断るなら・・ちやんといつてあげてね  
高原さんも自分の気持ちを伝えたら分かってくれると思つから・・

糞見が言つてくれた。

「ありがとう・・糞見。」

俺が行つた時昼休みのチャイムが鳴つた。

(第74章終わり)

返事

轟見に質問をされて俺は轟見には正直に答えた。  
そして・・放課後俺は高原さんに

「ちょっとといいかな？」

俺がそういうと

「はい、何でしちゃう？」

高原さんが言つたので

「えーと・・」いやちょっと・・だから屋上で  
話すね。」

俺が言つて俺と高原さんは屋上に向かつた。

「えーと・・」

俺が言いだと

「昨日はいきなりですいませんでした・・・」

高原さんがいきなり言つたので

「え・・?」

俺が言う前に高原さんが言いだしたのでびっくりした。  
「私も・・あの後失敗したな〜つと思ってました。  
初めて会つた人にいきなり告白すると山本さんも  
驚いたですよね・・・本当にごめんなさい」

高原さんが頭を下げる

「いや・・うちは別に・・・」

俺も睡然したので・・一応返事はした・・。

「私は元々人との話すのは好きじゃなかつたのです・・  
あと自分が好きだ。っていう人は自分が言う前に・・  
他の人からどんどん採られて言つて・・いつの間にか  
自分が好きだっていう人が・・いなくなると思いまして・・  
今回の山本さんも赤崎さんや岡崎先輩を見ていると・・  
なんか自分が・・早く自分が伝えたい気持ちをぶつけないと

と思い・・・こきなり話したのに・・・止められるといやですよね・・本当に「めんなさい」。

高原さんが言ったので

「そっか～。だけどねそれだけではうちは高原さんのことば嫌いにはならないよ。だけどね・・・つとも・・もう一応付き合ってくださいとは言われたことはあるけど断つたんだ。それは・・自分には男性とする俺は付き合つて行けないんだ。昔ある人を傷つけたから・・。だから高原さんと付き合えない。俺は自分の意見を言った。

「そうですね・・分かりました。」

高原さんも納得したので

「だけどね・・付き合つことはできないがこんな俺でもいいなら友達は歓迎するよ。だけど・・うちも女性と話すのがあまり好きではなくいつも羈見達には逃げてるんだ・・・。」

俺は言つた。それを聞いて

「そうですか～私はその言葉でもとてもうれしいです。なので私がから友達になつてもらえませんか?」

高原さんが言つたので

「そりやもちろんこちらからお願ひします。」

俺の答えを伝えてそのことを聞いた高原さんが

「ありがとうございます。」

泣きながら俺に何回も何回もありがとうつと言つたのであった。

(第75章終わり)

高原さんから告白を受けた俺は屋上に行つて俺は自分自身での答えを高原さんに伝えた。高原さんは涙を流したけど俺が言つてることを分かつてくれたのはいいけどそのまままじやかわいそだと思ったので…友達ならいですよ。つと自分は答えたが彼女もうれしそうに答えてくれた。

その後高原さんは毎休みに俺と一緒にいることが樂しく毎日俺と居ることが多くなつたのはいいけど…やっぱり女子は苦手なうちにほ・・ちょっとね…だけどそのことを高原さんは分かついてくれてただ単に俺の隣にいるだけで満足をしていたそだ。だけど・・このことを見ていて・・このまま終わるわけにも行かず・・もう噂では俺と高原さんは付き合つてゐるといついやがらせを受けていたけど俺はもう無視で、高原さんは何も言わずにしてくれていた。だけどね…

「ねえねえ…」

加奈子が俺に言つてきて

「やっぱり山ちゃんは高原さんと付き合つてゐるの?」

いきなり言われたので…

「いや…前にも言つたけど俺は誰とも付き合つ資格はないんだ。だけどね…それでも高原さんがいいって言つてくれたから…もう高原さんが気が済むまでそのままで…何もしてないからね

ね

俺はそういう理由でリオやコレット達にも説明して…

俺は少し疲れきった顔で家に帰つたのであつた…。（第76章終わり）

俺は高原さんとなぜかいつも隣にいるけど  
気にしなくのんびり生活をしていた。

「さてと帰るか」

俺はいつも通りに早く帰ろうとしていたら  
「山本、今日一緒に帰らない?」

夏季坂が言つてきたので

「お、珍しいな。お前から誘つてくれるなんて」「  
俺がそう言つたら

「そうだね~だつて・・このごろ高原さんと一緒に  
いるから・・あんまり話してないじゃん・・・。」

夏季坂が言つたので

「あ・・。そりやすまん。じゃあいつしょに帰ろうか」「  
俺が行つて一緒に帰ることになった。そして下駄箱に  
行つたときに

「お~い一緒に帰ろうぜ~」

金崎が言つてきたので

「ああ、いいぜ。」

俺が行つて一緒に帰ることになつた。しかし・・・

「このメンツで帰るのは初めてだな」

俺が言つたら2人は

「そうだね~」

「そうだな~いつもはね・・他の人につかまつたりして  
一緒に帰ることがなかつたし、山本帰るの早いから」

2人から言われ

「すまんすまん。」

俺が2人に謝つていた。帰り道に3人で楽しい会話をしたとき  
前にいたのはコレットと知らない男が5人もいた。俺は一瞬で

魔界人だと気づきテレパシーでラファエルさんに

「今大丈夫ですか？」

俺が言つてラファエルさんが

「大丈夫だけど、どうしたんだ？」

質問を帰つてきたので

「魔界人がコレットの前に5人います。」

俺が伝えると

「わかつた。私がこちらに向かうよ」

ラファエルさんが言つたので

「いえ、うちに任せてもらえませんか？一応一般には迷惑かけないでの

場所を変更しますけど・・・」

俺が言つたら

「わかつた。だが念のために私も行こう。場所は実戦室があるから  
そちらにテレポートで飛ばせばいいよ。大丈夫か？」

ラファエルさんが言つたので

「やつてみます。必ずコレットは傷を付けずにしますので。」

俺が言つて一旦テレパシーを切つた。そして金崎に

「コレットと夏季坂を頼む」

俺が言つたら金崎が

「ああ、わかつただけど無理はするなよ。」

つといったので俺はコレットのところに向かつた。

（第77章終

り）

俺はコレットがいるところに急いで走った。

そして魔界人とコレットの所に着いた俺は

「コレット大丈夫か?」

俺が言つたら魔界人は

「お前誰だ!普通の人間が俺たちの話の邪魔をするな」と言つたので俺は

「コレットここは俺に任しといて」

俺が言つたら

「え・・でも・・山さんが危険が・・・」

コレットが言つたので

「大丈夫。すぐ終わるから」

俺が言つて俺は呪文で

「俺から半径3m以内にいる人全員を実戦室にテレポート!」

俺が呪文を唱え俺と魔界人5人は実戦室に移動した。

それを見たコレットは

「山さん・・」

心配そうに言つたので金崎と夏季坂がコレットに近づき

「大丈夫だよ。山本ならね」

金崎が言つた。そして俺と魔界人は実戦室に移動され

「お前は何者だ!」

魔界人は切れ出したので

「俺の名前は山本連碁つと言つ。お前たちはコレットに何をしようと考えたのか。」

俺が聞いてみたので1人の男が

「お前には教えるか!」

威張つてたので

「そつか~じやあお前らはここから逃がすことはできないな」

俺が言つて魔界人が

「はあ？お前が俺たち5人に勝てると思うのか？」

そう言つたので

「勝てる勝てないより俺はお前らに勝たないといけないからの  
本気で行かせてもらう。」

俺はラファエルさんからもらつた魔力制御リングを外して  
今まで見えなかつた白黒の羽を出して、それを見た魔界人は  
「お・お前・まさか・天魔人か」

驚いた顔をしてたから

「ああ、そうだ。俺は天魔人。だから俺はお前らをコレットに  
何をしようとしたのか聞きたいが・・走にもいかなくなつたな  
だから俺はお前ら全員を相手してやる」

俺はそう言つた。

「たかが・天魔人1人の相手で俺たちが負けることはねえ・  
俺たちは天魔人でもエリートクラスだからな。」

そういつたので

「そつか～じやあいい相手になるな」

俺はそう言つて魔力を練つて魔界人に向かつた。（第78章終わ  
り）

## VS魔界人 その3

さて・・問題は俺1人相手は魔界人5人しかも魔力は俺より上が何人かあるが・・どうするか・・俺はそう思い。まず・・魔力が低い魔界人から狙つて行つた。走りながら魔力を高め1人に

「弾空波動拳」

俺は1人の腹に拳をぶつけて1人を吹っ飛ばした。そして1人がダウンをしたのであつた。それを見て「貴様！」

男たちは切れ出したので1人の男が魔力が高まり「ダークサンダー！」

呪文を唱え俺は少しかすつたけど大きなダメージでは無かつた。しかし・・

「おらおらどうしたどうした！」

4人はどんどん魔力を高め

「ダークサンダー！」

「ダークウインド！」

「ダークブリザード！」

「ダークバースト！」

4人が合体攻撃を仕掛けて逃げることができなく

「つち・・マジックシールド！」

俺は魔法盾を使つたけど威力に負け大ダメージを食らつた。だけどここで倒れるわけにもいかずに少し離れながら呪文を唱え

「メテオバースト！」

俺は隕石を出して男たちに攻撃をした。2人に直撃して氣絶をしたが・・2人は回避をしたのであつた。

だけど・・メテオバーストを使った俺はほとんどの魔力を

使い切りやばいと思い始めたけどまだ行けると思い  
近距離攻撃を仕掛けた。だけど魔力をほとんど使い切り

相手に買わされることが多くなり

「つく・・やつぱりだめか・・だけどこれで・・・」

俺は1回止め、魔力を高めた。そうこれで最後の一発にしようと思い  
「被空残弾空拳！」

俺は一瞬で1人の魔界人に近づき拳に魔力をためてそれを相手に  
ぶつけ1人の魔界人は吹っ飛び気絶をした。だけどもう1人いて  
俺はもう魔力を使いきった。

「お真21人で俺たち5人に相手によく頑張ったな。だけど  
もうお前は魔力を尽きた。お前を魔王様のところに連れていく」  
1人の魔界人は俺のところに向かい俺をつかもうとしたとき

「お前山本様をどこに連れ出そうとしているのか？あん？」

俺はその声を聞いて倒れてしまった。その後聞いた話では  
俺が倒れる前にラファエルさんが来て魔界人5人は天界の  
牢屋に入れられ、ラファエルさんから魔界の情報を聞いてい  
らしげが・・俺は魔力を使い果たししかも無理に魔法を使ったせいで  
2日間起きれなかつたそうだ。（第79章終わり）

「う・・・ここは・・?俺の部屋?」

俺はコレットを助けるために俺は魔界人5人と戦いを挑んだ。だが・・・3人目で魔力をかなり使い果たしてしまい・・・4人目で全魔力を振り絞つて4人まで倒したのはいいが・・・5人目のときに自分は魔力切れで何にもできなく・・・倒れてしまった。俺が起きたときには自分の家だとすぐに分かった。そして俺は起きるときに・・

「山さん大丈夫ですか?」

コレットが俺に声をかけてくれて

「コレットお前は無事なのか?」

俺はコレットに質問をして

「私なら大丈夫ですが・・山さん・・もしかして・・コレットが何か言いたそだつたのでコレットの隣にいるラファエルさんが

「そうだ。お前が見えると思うが山本様は天魔人だ。」

そう答えた。それを聞いてた俺は

「すまんな。コレット俺は誰にも俺が天魔人のことを秘密にしてくれっと俺から頼んだ。」

そう、俺は最初にリディアさんに気付かれてしまい

その後リディアさんがラファエルさんに伝えてラファエルさんも秘密にしてくれると言つてくれた。しかし途中で金崎も気付かれてしまった。いや、正直に言つとばれてしまつたと言つてもいい、だけど金崎も俺のことを秘密にしてくれるつと約束してくれた。しかし・・今回はそうもいかない。なぜならコレットが5人の魔界人と接触したから・・・ばれるのを覚悟してまで守らないといけない俺は・・

「山本様はコレットの護衛を頼んだのだ。だからお前には  
気付かれずにしてたから。山本様には悪くない。」  
ラファエルさんは言ってくれた。今日はそういうことで  
みんな帰つたけども夏季坂とコレットは今度改めて自分の  
正体について話さうかと思つてゐる。（第80章終わり）

## 俺の決意 その1

俺は魔界人の対戦後魔力を使いすぎたせいであまり体が動けなく3日間学校を休むことになった家でのんびりしていたら

「山本》いるか》？」

人の声がしたので

「はいはい、今開けます」

俺はドアを開けたら金崎がいて

「よ。体は大丈夫か？」

金崎が心配してくれたので

「ああ、だいぶ良くなつたよ。心配掛けてすまんな。  
まあ、ここで話すのもなんだし家に入つてくれ」

俺は金崎を家に入れた。そして金崎は周りを見ていて「どうとうばれてしまつたな・・・」

金崎が残念そうにしていたので

「まあ・・・あの状態は仕方ないよ。金崎あのときは  
ありがとうな。だけど大丈夫だつたか？質問攻めなど  
食らつてないか？」

俺は金崎に質問をしたら

「ああ・・・2人ともとこどん質問されたよ・・・。  
だけどコレットはラファエルさんだつけ？あの方が  
教えてくれたらしく夏季坂は俺から事情を話して  
納得したそうだ。」

金崎が言つたら

「そうか・・・ありがとう。すまんな」

俺が言つた。それを聞いて

「構わんさ。だけど山本これからどうするつもりなんだ？」

金崎が言つたので

「前にも話したように魔界人はもうゴレットは狙わないと思つ  
だけど・・元々原因はうちだから・・だから・・」

俺は言おうとしたら

「だからお前は・・おれたちの前からいなくなるのか?」  
金崎が言つたので・・俺は金崎に俺のこれからのこと  
を伝えた。  
(第81章終わり)

## 俺の決意 その2

「ああ、俺はここから離れると思つ。」

俺は金崎に言つた。それを聞いて

「やつぱりか・・だけど・・俺は山本  
お前がいなくなると全員が悲しくなるぞ・・  
それでもいいのか?」

金崎が言つたので

「ああ、それは分かつてゐる。だけど、もし仮に  
俺がここにまだいたらまた魔界人が現れても  
おかしくない。前は魔界人のエリート集団だつたらしく  
俺もぎりぎりで負けた。だけどな天魔人は元々  
存在してはいけないんだ。俺がいたらお前らまで  
迷惑かける。俺はそれはいやだ。だから俺は  
ここから去るつもりだ。だけど勝手には消えない  
前に1回したことがあつてな。糞見や加奈子との  
間に傷をつけてしまった。だから今回は俺は  
みんなに伝えてここから去ろうと思つ。手伝つてくれるか?」

俺が言つたら

「ああ、それは大丈夫なんだが・・前にも言つたが  
魔界人と決着がつくのは来年の卒業式ごろだつたか?」

金崎がちょっとした質問をしたので

「ああ、まだわからないがそのころ攻めてくるつといつ  
情報は流れてるみたいだ。だから俺はそれを阻止しないと  
いけない。まあ、そのときに俺は天魔人つという存在は  
消えるかもしれないがな。」

俺が答えたら

「そつか。じゃあ俺はお前と約束をしたい。」

金崎が真剣な顔で言つたので

「分かった。俺は金崎が決めた約束を守りつ。」

俺が言った。それを聞いて

「さんきゅな。まあ2つあるけどいいか？」

金崎が言ったので

「大丈夫」

俺が言った。そして・・・

「じゃあまず1つ目は山本絶対にまた俺たちの前に現わせ。俺も  
そうだけど、多分みんなもお前がいなくなつたらやつぱり  
楽しみが無くなる。だから・・お前は無事に帰つて俺たちの  
前に顔を出してくれ・・。これが1つ目だ。2つ目はそうだな・・  
時々でいいからメールを送つてくれないか?俺もお前といないと  
悲しむ。だけどお前が忙しくないならメールでもいいから  
送つてくれないか?頼む」

金崎が言ったので

「1つ目は分かりました。無事で帰つてきますので・・・  
その時はみんながいるときに現れますね。2つ目は  
そうですね・・・俺携帯電話持つてないからね・・  
手紙・・んー多分俺は天界とかそっち方面に行くから  
手紙遅れるのかな?まあ・・それも後から考えるとして  
この2つは約束しますよ。」

俺が言って金崎は

「さんきゅ。お前も元氣でがんばれよ!」

つと言つて金崎は外を出た。俺は数日後にみんなに俺の事実を  
すべて話そうかと思つた。(第82章終わり)

別れ・・・・・ だ

数日後俺はみんなを屋上に呼んだ

「いきなり集まつてもらつてすまん。」

俺はみんなにまず謝つた。

「山君からお話つて久しぶり~」

眞魅先輩が言つた。みんなも眞魅先輩につづつと  
うなづいてたのでまず話す前に金崎に

「金崎これで一応・・・」

俺が言いだしたので

「ああ、さんきゅーな山本」

金崎が言つて俺はみんなの周りに結界をはつた。それを見て

「山君これは何なの?」

コレットがいち早く俺に質問をした。

「いつでもしないとコレットやリオに止められるかもしれないから  
強力な結界をはつた。コレット、リオ決して結界を破壊しようと  
するなよ。大丈夫後で結界は消えるから。」

俺は言つて一旦呼吸をして

「みんなに話したいのは俺はここから離れることとしたから  
みんなに挨拶を・・・」

俺が言つたら

「山君またいなくなるの・・いやだよ・・・」

糸見が泣きながら俺に言つた。それを聞いて

「すまんな。どうしても俺はここから離れないといけなくなつた。」

俺は糸見に言つた。それを聞いて

「何で・・何で・・・山ちゃんはまた私たちの前からいなくなるの  
よ・・・」

糸見が俺に言つて俺は・・・

「糸見本当にすまん・・だけどな・・俺がここにいたらまた

お前らの迷惑にも掛かる。今はまだ安心だけど今後俺がもし  
この学校にいたら加奈子達いや・・・この学校のみんなが被害に  
あうかもしれない。だから・・俺は・・その前にここを離れるこ  
とに

決心をした。だから俺はみんなにお礼を言いたい。金崎と夏季坂。  
男友達で最初の仲間だ。今までありがとうな。加奈子、轟見。お  
前たちは

小さい頃から俺に優しくしてくれてありがとつ。でも・・勝手に  
いなくなつて

すまんだつた。しかし・・この学校に来てまた会えてよかつたよ。

高原さん

告白されたのはびっくりしたけど断つてじめんね・・だけど俺は  
誰とも

付き合つの資格はないんだ。だけビそれでもいこつと語りてくれて  
ちょっと

うれしかつたかな。そして・・眞魅先輩今まで俺のお世話をあり  
がとう

『じやいました。眞魅先輩がいなかつたら俺は前に進めなかつた。  
だけど・・

もう一緒に学校には行けないと思つ。『めんな・・・』

俺は言つてみんなの前で自分の正体を明かした。（第83章終わ  
り）

## 新たな旅たち

俺は魔力を少し抑えたものを開放してみんなに見せた。それを見てみんな驚いたのであつた。

「そう・・俺は天界人と魔界人の血を持つた。

天魔人つていつたらリオとコレットは分かるかな?

前にコレットお前が連れ去られそうだつた原因は

俺にあつたんだ・・元々は俺が天界に行つたときに魔法を使わなければ、コレットお前に被害が起こらなかつただから・・俺のせいで・・被害にあつた・・だけどもう魔界人には知られてしまつた。だから・・いつこの学校に攻められてもおかしくない状態だ。

だから俺はここから去ります。」

俺は言つたら、ある声がして

「いえ・・山様は天界のときに私を助けてくましたね。」

リディアさんが俺に言つた。それを聞いて

「リディアさん・・ですが・・」

俺が言つたら、

「いえ・・私は元々魔力がなく危ないところを助けてもらいましたので・・その原因は私にもあります・・本当にすいませんでした・・・」

リディアさんは頭を下げた。そして

「ラファエル様が山本様にこれを・・・

リディアさんが俺にメモ書きを渡して俺はそれを見て

「リディアさんありがとう・・・」

俺がリディアさんにお礼を言つて

「いえ・・私はラファエル様に従つただけですから」

リディアさんが言つた。そして

「さて・・そろそろお別れの時間かな?みんな今まで

ありがとう・・・俺は・・今までの思い出を大切にするよ

俺がいなくても、元気でな。じゃあ！また！」

俺はメモに書いてあつた場所に飛んだ。そして俺が言った後  
結界は消滅して・・金崎と夏季坂は

「山本。頑張れよ」

と言つた。だが・・女性陣は俺がいなくなつた後で  
かなり泣いてたそつた。（第84章終わり）

## 新たなる挑戦

俺はみんなの前から去りある場所の前にいた。そう・・父、母、おばあちゃんの墓であった。そして・・俺はお墓の前に

「んじゃ行つてきますね～」

俺は言つてラファエルさんから教えてもらつた場所に行つた。そこは遺跡っぽいところだった。俺は中に入つて奥のところに行つたら

「お待ちしてました。山本様」

俺の前にいたのは小さな妖精だった。

「あなたは・・・？」

俺が質問をしたら

「申し訳ない。私はここの管理人?と言つべきかな?  
まあ、ここは私しかいないですがね・・  
えーと私の名前はミーファーと呼んでください。  
あなたは今から魔界人が攻めてくる前に結界を  
3人でやるんでしょう?マスターは・・・どんだけ  
無茶をするのかな?・・・普通は10人いないと  
安全に結界ができるといつというのに・・・  
ミーファさんは名前を言つてからぶつぶつと  
言つてから俺に

「まあ・・マスターから言われたようだけど  
山本様はここでぎりぎりの時間まで私と  
修行をしてもらいます。いいですか?」

ミーファさんは俺に言つたら

「はい!そのつもりで來ました。ですが・・  
マスターつて・・?」

俺は質問をしたら

「ああ・・、すまんすまん俺のマスターは

山本様も知つてゐると思うけどラファエル様だよ。

の方は俺が出会う前はんー そうだな・・・

山本様と同じ?ぐらいだつたかな?魔力がね

だけど俺は元々契約つというのが嫌いでな

俺に勝つたら契約してやるよ。と言つた。

結局ラファエル様は100回以上まけ1000回目こ

やつと勝てたのかな?まあ、勝つたときには

今のラファエル様は現在の魔力に達してて

しかも王様になるとはね・・俺もびっくり

しかも勝つたのにもかかわらず結局俺と契約しなく

帰つちやつたよ。すごいよな・・だから

今回はあいつからお願ひされて俺も天魔人と

修行ができるから楽しみだわ。よろしくな。」

ミーファさんが言つて俺はこれからここで修行をすることになった。

「はあ・・・はあ・・・」

俺はミーファさんとの特訓をしていた。

「さすが・・天魔人ですね・・・ラファエル様と最初に出会ったときやりあつたのですが・・それ以上の魔力・・しかも・・私も本気をださないといけなかつたですよ・・」

ミーファさんは俺にほめてくれた。だが・・

「ですが・・やっぱり山本様は魔力の使い過ぎが激しいですねいくら魔力を上げていても・・魔力の消費がかかる魔法を連続に出すとすぐに魔力切れで何にもできなくなります。しかも・・メテオストライクは戦つてみて魔力の消費が激しくしかも唱えるにも時間がかかりすぎですね。だから山本様メテオストライクは封印しちゃませんか?」

私が見えて今後エリート軍団が来てもよけられるだけです。だから今後の課題は早くそして威力がある魔法を身につけることそして・・戦いながら結界をはるつという修行もしていきましょう

ミーファさんは笑顔で言った。

「ありがとうございます。ミーファさん頑張ります。」

俺が言うとミーファさんは

「いえいえ、多分私の予想ですが・・あなたはこの修行を頑張ればラファエル様と・・いやそれ以上の魔力を手に入れることができます。ですので・・頑張つてください。」

ミーファさんは言った。

「では今日は修行は終わりましょ。一応これだけは伝えときます。この修行は毎日やると山本様の体力と魔力がもちません。」

ですので2日に1回をやるペースでやります。あいてる日は山本様の自由とします。休んでもいいし、運動などしても構いませんがなるべく・・魔力を使わないでください。」

ミーファさんが言った。それを聞いて「分かりました。ですが・・これは・・魔力を使わないといけないのですが」

俺がミーファさんに見せたら

「ああ、通信機ですか～これならそんなに魔力の消費も激しくないから

大丈夫ですよ。だけど使い過ぎないようにね～」

ミーファさんが言って解散となつた。そして少し休んで俺は金崎に連絡することになつた。（第86章終わり）

## 休憩中のJと その1

俺は金崎に通信機を使った。

「金崎出でくれるかな～？」

俺は考えていて少しあつたら

「よ～山本元気か～？」

神崎が返事をしてくれて

「ああ、元気さいきなりかけてすまんだつたな」

俺が言うと笑いながら

「いいさいいさ、だつて俺が無理に山本に頼んだしな～  
気にしてることはな～いさ～」

金崎が気楽にかけてきて

「そつか～てか・・今こっちの時間はいつだ？」

俺が金崎に質問をすると

「ん～とね夜中2時

はつきり答えた金崎に

「え・・・すまん・・・」

俺が謝つたら

「気にするなつて言つたよ?まあ～大体2時まで俺は起きてるや  
しかも山本から連絡来るときに寝てたら申し訳ない。

忙しいのに・・まあ俺の場合は明日寝ればいいし～あはは～」

金崎の笑い声が聞こえて

「そつか・・なるべく次からは早めに電話するよ。」

俺が言つたら

「まあ～山本が忙しくなればね。しかし、今大丈夫なのか?  
そつちは・・激しい特訓じゃないのか?」

金崎が言つたので

「ああ、大変だけど何とかなつてるよ。俺をもつと特訓を  
してくれる人は結構厳しいけど元々優しい方だから

なんとかね・・・」

俺は反応をしただけど金崎は元気だけど他の人が気になつたので  
俺は振り切つて金崎に質問をした。（第87章終わり）

## 休憩中の「じと ゃの」

「とにかく……他のやつは……どうしてる?」

俺が言いにくそうに金崎に質問をした。

「ああ、言つてもい行けど山本落ち込むなよ。」

金崎が俺に言つたので

「ああ、分かつてる俺が原因だから……やつぱり

心配だ・・みんなに裏切つたから」

俺はみんなを守るために俺はここに逃げたことには変わりがなかつた。しかし

「じゃあ言つ代。まず、やつぱり今でも落ち込みが激しいのはコレットさん、糸見さん、加奈子さんの3人だ。

山本お前が昔糸見と加奈子との関係を眞魅先輩に聞いたから気持ちがわかるけどまたいなくなるとすごく悲しんでいた。今でもな。そして夏季坂は俺の説明で俺と夏季坂はお前を信じると言つてた。だからお前が帰つて来た時はみんなに恨まれても俺と夏季坂はお前を迎えてやる。まあ、そんな心配はしないだろう。だって俺と夏季坂以外にもリオさん、眞魅先輩、高原さんは山本を待つてると言つてた。山本がいなくなつた後リディアさんと俺がみんなに説明をした。もちろん結界のことは秘密としてな。それを聞いてみんなはやつぱり驚いたけど、高原さんが最初に私は山本さんが帰つてくるまで待つてますので。と言つたそうだ。それを聞いて眞魅先輩とリオさんも待つてるよ。と言つた。だからお前も全部が終わつた時、絶対にみんなの前に姿を出せよ。俺はお前と友達になつて本当にうれしいんだ。いつでもいいから

この通信機でまた連絡しろよ。今度は他の人の声も聞かせてやる。何か伝えたいことがあつたら遠慮なく言ってくれ。」

金崎は俺に言ってくれて

「ありがとう金崎。何かあつたらまた連絡する」  
俺は言って通信機をしまった。そして俺はミーファさんの所に戻つて行つた。（第88章終わり）

わるそろ・・

俺は金崎からも「うつた勇氣でミーファさんとの魔力＆実戦などで自分のミスを埋めていた。

そして・・特訓してから三ヶ月

「山本様大分よくなりましたね」

ミーファさんがとても喜んでいた。

「ありがとうございます。指導がよかつたもので」

そう、指導つと「うかただ単にお互いに全力で戦つてただけなんだけどね・・最初はミーファさんが全体の10%しか出してなくいつも自分がぼろぼろで訓練が終わっていたが、段々とミーファさんの本気を出してきて今ではほぼ100%の力でぶつかり

だけど・・未だに勝つてはいない。

「しかし・・ラファエル様のときもこんな感じでやつてたな」

ミーファさんが言つて

「そりなんですか・・・。ラファエルさんも同じ特訓を?」  
俺が質問をすると

「特訓つていうかラファエル様は俺と契約したいつと言つ情熱で頑張つてたからな」特訓つと言つか争いに近いかな?  
だけど結局あいつは俺とやつて1回ぐらいしか勝つてなかつたよ。山本様もこの調子でいけばいつか俺に勝てるよ。だけど俺も手加減はしない。今度から本氣で行くから頑張つてくれよ。」  
ミーファさんが言つて

「はい!ありがとうございます。これからもよろしくお願ひします。

俺が言つたらミーファさんが

「ん~これからは無理かな・・・。だって後1カ月でこの修行は終わ

るから」

突然ミーファさんが言って

「え・・どういう意味ですか?」

俺は質問をして

「えーとね一応俺はラファエルから4ヶ月間だけ頼むつと言われたんだ

多分その後3人で結界の特訓に入るからそれまでは俺が山本様に鍛えるつと言うことだ。」

突然に言われ俺はびっくりしたのであった。（第89章終わり）

## これから課題

簡単にまとめれば魔界人が攻めてくるまでに後1年半（18か月）それまでにまず4ヶ月は自分で基礎を慣れるための修行。そして4ヶ月はその基礎を鍛えて実戦までいくことつまり今の魔力では結界を作るときで魔力を尽くるからだ。それを補うためにミーファさんと一緒に特訓をして魔力と精神力そして自分の基礎能力を高めることが目標そして・・それができたら次は3人での結界を作らなくてはいけない。その時にコンビネーションがないとうまく結界が作れない。もし仮にできたとしてもすぐに壊れるだろう。だから残りの時間は結界を作ることをメインとしてやるつということを俺はミーファさんが言ってから初めて知ったのであつた。

「だから・・まあ俺は山本様と一緒にいることは後1ヶ月それまでは俺がお前をラファエル様以上に仕上げてやるだからお前も頑張って俺に勝てよ。だが、俺もそう簡単に負けられないからね。いいね？」

ミーファさんが言つて

「分かりました。後1ヶ月よろしくお願ひします。」  
俺は頭を下げた。そう、後1ヶ月俺は終わるまでに自分を鍛えないといけない。そしてみんなを安全に生活できるようにしていきたい。だから・・俺は辛いときでもがんばるしかない。

「そういえば・・山本様は契約とかはないのか？」  
いきなりミーファさんが言つて

「そうですね、元々自分は1人だったので・・。  
精霊などの契約は向いてないと思いますが・・。

俺が言つたらミーファさんが

「そつか。まあもしね、山本様が精靈とか契約したいとか

俺と戦いたいとかあつたら遠慮なく言つてくれ。

まあ、後1ヶ月あるけど一応先に言つとく。」

ミーファさんが言つて、

「ありがとうございます。」

俺は言つた。ミーファさんが

「では、今日は休め明日から忙しいからね」

ミーファさんが言つて、自分の部屋に戻つた。

（第90章終わり）

## 4か月間終了

「ふう～よく頑張ったな山本」

ミーファさんがかなり喜んでいた。

「ありがとうございます。」

俺は頭を下げた。それを見て

「いやいや、気にするな。俺もかなり満足をした。こんなに楽しかったのはラファエルが来た時以来そうだな・・もう10年は何にもしなかつたからのうちにとつてはすごく楽しい思いでさ～。」

しかし～まさか・・山本に2回負けるとわ・・いやいや、天魔人の能力より俺は山本がすごい行きよいで成長したのがびっくりしたさ～まあ、俺の修行はこれで終わりだがこれからが大変だぞ～あと約半年結界の修行だ。

今までみたいに自分の魔力でぶつけることはない次の修行は1人では何にもできない3人でのコンビネーションが必要だ。しかも精神を使うことが多いからがんばれよ。だけど、暇なときにはまた修行手伝うから気楽にこい。」

ミーファさんが言ったので

「はい！ありがとうございます。」

俺は頭を下げた。それを見て

「元気がいいな～だけど今日はもう休め。元気がいいのはいいのだが・・これから過酷が多いから早めに休んで明日への体力を温存するだね～。んじや俺も眠りに着くかな。多分俺は明日から魔力を回復するために起きないから俺と会うのは今日で最後だ。だけどまた会いに行きたかったら来てくれな。んじや

元気でな！山本」

ミーファさんが言って自分の部屋に戻った。明日から俺はラファエルさんのところに一旦戻つて結界の修行に励むのであった。（第91章終わり）

俺は朝起きてミーファさんの所に行つた。  
しかし・・ミーファさんは眠っていた。

自分から相手の魔力を見れるようになり

修行する前は魔力は膨大だったが・・

今となれば魔力が小さく感じる。それは・・

最後の特訓でお互いに全力でぶつかつた。

お互いに魔力を全力でぶつかり俺はぎりぎりに  
勝つたが・・さすがに・・昨日はしんどかったので  
早く眠つた。その後一晩寝たら俺は魔力をほとんど  
回復していた。しかしミーファさんは精霊なのに  
魔力回復するのに時間がかかると言つていた。

しかも・・普通は魔力を使つたら全回復するのは  
2日間はかかるらしい。しかし・・ある特定の人は  
5・6時間で回復すると聞いた。俺もその1人だった。  
天魔人だけど元々はその親が魔力が高いほど回復量と  
魔力量の差が普通の天界人と魔界人とは大きく違うらしい。  
今俺は訓練後すぐに寝たけどそれでも6時間。もう俺は  
回復をしていた。だけどミーファさんは寝ていたから  
俺は準備をしてミーファさんに向かつて

「今までありがとうございました！ミーファさんの  
おかげで俺は成長できました。またいつかきますので  
その時はよろしくお願ひします。」

俺は言つてミーファさんの前から去つた。俺は次の特訓  
そして・・最後。そう、3人での結界を作ることだった。  
元々それをするために俺は第1段階から8か月間魔力を  
上げたり、戦闘のときの対応などの訓練をしていた。  
俺はラファエルさんの所に向かつた。（第92章終わり）

## 最終訓練前に・・ その2

俺はミーファさんをお別れ後トレーニング室に行つた。  
そして・・少し待つていたら

「山本様お疲れ様でした。」

ラファエルさんとリディアさんが来て

「ありがとうございます。今日からまたお世話になります。」

俺は頭を下げた。それを聞くと

「ああ、こちらこそよろしくお願ひします。ですが・・・」

ラファエルさんが少し困った顔をしてたので

「どうしたのですか？」

俺はラファエルさんに質問をした。

「ん」とね・・後から山本様に会いたいっていう人がいるのですが

ラファエルさんが言つたので

「自分ですか？分かりました。」

俺は言った。

「まあ～あつたことがない人ではないからね・・あはは」

ラファエルさんが言つた。

「それはどういう意味ですか・・・？」

俺は疑問に思つたので聞いてみたら

「まあ・・会えば分かるよ・・まあ・・後からのお楽しみかな

一応今後の課題を言うね。」

ラファエルさんが言つたので

「はい！お願いします」

俺は言った。それを聞いて

「じゃあ今後の課題。簡単なことは私とリディアと山本様

3人で結界を作ります。それは大丈夫なんですが・・  
もしかしたらその結界を作る間に敵が襲いかかる可能性も  
低くはないなので結界を作りながら戦う訓練をします。

しかし結界を作るのにも精神と魔力がいります。そして戦うときも魔力を使うのですが・・リディアは元々魔力が低いので私と山本様でその特訓をします。結界も1重だけじゃいつ壊れるかわからないので壊れないためにも結界を強化の訓練もしますので・・大変ですが・・頑張っていきましょう」ラファエルさんが言って

「はい！よろしくお願ひします。」

俺は言つた。そして後から俺に会いたい人との出会いが待つていたのであつた。（第93章終わり）

「一応説明は以上だけど・・できますか?山本様  
ラファエルさんが言つた。

「はい!頑張ります!」

俺が言つたら

「ありがたい・・今日から～つというわけにはいかないが  
明日から本格的に行くぞ。しかし・・ミーファから聞いてたけど  
ずいぶん魔力が上がつていつか私とたたかってほしい。まあ  
今はそういうことではなく山本様に会いたいと言う人と  
話したらしい。」

ラファエルさんに聞いた俺は

「分かりました。ですが・・誰でしょうか?」

俺は名前を聞いてなかつたので

「ああ、まああつたらわかるさ。もう話が終わつたから入つてどう  
ぞ~」

ラファエルさんが言つたらドアから出てきたのが

「よ。山本久しぶり~」

金崎がいてその後リオ、高原さん、眞魅先輩が入つてきて  
「これは言つたい・・・・・」

俺は疑問に思つて言つた。そうしたら

「山本すまん・・・お前が言つた後にラファエルさんに  
すべてのことを話してもらい俺はそのあとにこつそりと  
ラファエルさんに通信機のことを聞いて山本とラファエルさんとの  
通信機でいろいろ情報を交換してたわけ、だけど・・・」

金崎がちょっと苦笑して

「それはね。私が4日前にラファエルさんと金崎さんが2人で  
話してるところを見つけちょっと追いつめてみたの~  
ノリノリで眞魅先輩が言つて

「なるほど・・それは仕方ない・・すいません・・ラファエルさん  
本当にすいません・・。」

俺が謝つたら

「いえ・・大丈夫ですよ。皆さんも山本様に心配だったし・・  
さすがにコレットが来たら・・止められるでしょう・・。  
それだけは守ってくれるっと言つてくれましたし・・  
では・・明日からお願ひしますね。では。」

ラファエルさんとリティアさんは頭を下げてトレーニング室から  
出て俺はこの後みんなと話していた。（第94章終わり）

## 金崎、眞魅先輩の思い

ラファエルさんリティアさんが部屋を出たとき

「本当にすまん・・山本」

金崎が言って

「気にしないよ。だけど・・他の人も今日会うこと知つているよね？」

そう・・今日はいな季坂、加奈子、糸見の3人がいないことについて聞いてみた。

「まあ・・ちょっとね・・さすがに俺は眞魅先輩と元々2人で行くつもりだつたんだ・・。行く時間を聞かれてしまって・・行けなかつたらね・・後から何をされるか・・あはは・・。」

金崎が言ってそれを聞いて

「それはひどい。誰だつて山君を会いたがつてるじゃんそれを・・こそそして・・まあ私も会いたかつたしいいだけどさすがに糸見と加奈子、コレットの3人に言うとね・・山君の修行を止めるかもしれない・・。山君がいなくなつた後みんななり泣いたけど

私は山君が必ず帰つてくると思い前向きに頑張つていたそれは後から問い合わせた金崎君から聞いて、しかも私より先だつたのは高原さんだよ。一応私が卒業した後ずーと隣にいたからなくなるのは気付いてたんだつてだけどいつか戻つてくるつと信じてたから泣いたけどすぐに立ち直つてたよ。すごいと思うよ・・リオも私の後にいつか帰つてくるつと思はずーと山君を待つてたから私が2人だけに伝えた。

眞魅先輩が言って

「まあ、夏季坂にも言いたかつたんだが・・あいつに

話すとね・・糲見達にも聞こえてしまつ・・だつて  
同じクラスだから・・。だから今回は伝えてない。」

金崎が言って

「そつか・・。助かつたさんきゅう俺も金崎達に  
会えてうれしかつたけど・・今こんな格好ですまない。」

俺がそういうと

「気にしないよ?あ、それと山君店長に辞めるつと言つたらしいけど  
山君がいつか帰つてくるかもしれないから店長からまた戻つてき  
たら

いつでも戻つてこいーつと言つてたよ。」

眞魅先輩が言って

「ありがとうございます。」

俺が言つてリオと高原さんに話しかけたのであつた。(第95章  
終わり)

## リオ、高原の思い

金崎、眞魅先輩からいろいろ話を聞いたところで  
俺はリオ、高原さんに声をかけた

「2人ともありがとうね・・・」

俺は言つたらリオが

「私は山さんのことを信じてました。しかし・・・  
あのときまで私は山さんが天魔入つていうことを  
初めて知りました・・・。それは・・・私が気づいて  
なかつたのがちょっと悔しいかな・・・。ですが・・・  
前に私とコレットが困つてるときに山さんが助けて  
もらひ本当にうれしかつた。いきなりの別れでしたが  
私は山さんを信じてました。だから・・・今あえて本当に  
うれしかつたよ・・・。ラファエル様に聞きましたが  
山さんこれから大変な修行に入るでしょ?私は  
山さんのお役には立てませんが・・・、ですが・・・  
山さん無理しないでください・・・。私も他のみなさんも  
心配しています。ですから・・・元気な姿で帰つてきてください。  
私はいつでも山さんのことを持つてますから」

リオは笑つて俺に言つた。

「ありがとう。リオ。いつか俺も元気な姿で帰つてくるよ  
それまでに待つててくれないかな?」

俺が言つたら笑顔で

「うん!もちろん!まあ、多分コレット達に殴られるかもよ?  
すごくつらかったから・・・覚悟してね」

リオが言つたら

「ああ、分かつてゐるよ・・・」

俺は苦笑しながら高原さんに話しかけた。

「高原さんもありがとうね。」

俺が言つたら

「いいえ、私は山本さんにはじく会いたかったです。  
金崎さんや眞魅先輩が声をかけてもらつたので  
私はすごく会いたかった。山本さんと突然のお別れは  
辛かつた。ですが・・私もいろいろ山本さんを見て  
いつか戻つてくると思ってました。だから・・今会えて  
本当にうれしく思います。リオさんと一緒にこれからも  
山本さんが無理をなされると聞きました。ですが・・  
私は本当は止めたい・・ですが・・私は元気な山本さんを  
また見たいっと思います。ですから・・無理だけはしないよつて  
無事に帰つてきてくださいね・・。」

高原さんが俺に言つてくれたので  
「ありがとう。高原さん。」  
俺は2人にも迷惑かけたなあ・・と思つた。（第96章終わり）

## 4人の思い後

俺は4人の話を聞いてすこしみんなの顔が見れて本当によかつたと思う。そして・・・  
「そういえば・・山君これから修行なの?」  
眞魅先輩が俺に質問をしたので  
「いや・・ラファエルさんが今日は休みで  
明日から修行だと言ってたね。」

俺が言つたら眞魅先輩が企みがあり

「じゃあさ〜今日はこの後暇だよね?山君は泊る所決まつてるの?」

眞魅先輩が聞いてきたら

「ん〜・・泊まるところは・・ないから

トレーニング室で寝るかなつと思うけど」

俺は言つたらそれを聞いて

「じゃあさ〜今日はリオの家に泊まらない?リオがいきなり言いだしそれを聞いて

「そりやいいな〜」

「お〜リオちゃんいい!」

「私も今日は山君さんと居たいです・・・。」

3人が言つたんだけど・・リオは

「もちろんみんな泊つて〜大歓迎だよ〜」  
リオはノリノリだったので

「俺の拒否権は?」

俺がいつも通りに聞いてみると

「〜〜〜駄目です!」

4人が同時に言われたので俺はそのままリオの家に向かつた。リオは俺のことを気遣つてくれて今回は天界にあるリオの家にお世話になつた。その後俺と金崎は

リオの部屋に待たされ後からリオ、眞魅先輩、高原さんが夕ご飯を作ってくれみんなで食べみんなが寝るまで大部屋でいろいろ話したのであつた。その次の日眞魅先輩達は学校があるので俺と別れ俺はトレーニング室に向かつた。（第97章終わり）

「では、今からまずは結界の訓練をします。」

ラファエルさんが言つて俺とラファエルさんそしてリディアさんの3人で結界を作る訓練を始めた。

元々一人で結界を作るのだが・・今回ばかりでは

1人ではすぐに壊されてしまうらしく強力な魔力が3人以上じゃないと今回の目的が達成できないらしい。

しかもそれを完成できるのは早くて3ヶ月。だけど

俺は結界など2度しかしてないので3人でのコンビネーションがいいか、悪いかは別として最低4ヶ月はかかる。その間に魔力上げと結界を作る途中の戦闘などしていかないといけない。

俺にはそれができるだろうか・・と今でも不安でもあつた。

「では山本様まず今までの修行を見てみたいのであそこにあるリンクゴを結界で囲つてください。」

ラファエルさんが言つて

「はい、分かりました。」

俺は返事をしたらリンクゴに向かつて結界を作った。なるべくは大きめにしないでリンクゴの大きさに合わせて結界を作った。

「うん。結界の大きさはいいでしょう。では」

ラファエルさんは結界で囲まれている、リンクゴを手に持つて「うん。結界の強さ。これもよしとしましょう。」

ラファエルさんは満足そうにしていていた。だけど・・

「ですが・・やっぱり結界を作る速度がちょっと遅いですね。まあ、山本様はあまり経験がないから仕方ないでしきう。

今後の課題に入れときますね。ですが・・すぐになれるでしきう。

ラファエルさんが言つて

「はい、分かりました。」

俺は返事をした。それを聞いて

「まあ～慣れつていうものもあるしじゃあこ'トライア一回やつてみて」

ラファエルさんが言ってリティアさんが

「はい、分かりました。」

と言つて、俺の結界の周りにもう一つ結界を作り上げた。しかも  
うちが作るのに10秒かかったのにリティアさんは5秒もからな  
かつた。

その後うちはラファエルさんから重大なことを聞かされた。（第9

8章終わり）

結界・・・(後書き)

お久しぶりです・・。この頃忙しく・・  
書けない日があつたり・・今思えば・・  
文章短すぎ・・とか思う・・。  
さてさて・・次はある人物が現れます。  
多分知ってる名前かな〜?

## 新たな仲間？その1

「まあ、見ての通りリーディアは戦闘型じゃなく援護型だから早いのは仕方ない。ですが・・山本様も練習があれば早く作ることができますよ。」

ラファエルさんが言って俺は

「ありがとうございます。がんばります！」

俺は言ってラファエルさんが

「そうそう、今のうちら3人では辛いと思い助つ人を呼んだから。ラファエルさんが言って

「それは・・・？」

俺が質問をしたら2人の男女が現れラファエルさんが

「紹介をしよう。この2人は前にうちが王様をする前にお世話をなつた

魔法世界から来た。フラユンス・メディアさんと川崎 励さんだ。

「ラファエルさんが紹介されたので2人は

「魔法世界から来ました。フラユンス・メディアと申します。

ラファエルさんから事情は聞きました。私でよければこれからもよろしくお願ひします。」

フラユンス・メディアさんは頭を下げる

「私は川崎 励と言います。フラユンス・メディアの妻です。

元々私も山本さんと同じ住人ですのでよろしくお願ひします。」

2人は頭を下げる。それを聞いて

「自分の名前は山本連碁と申します。よろしくお願ひします。」

俺は頭を下げる。それを見て

「山本さん硬くならないでいいですよ。私たちもあまり硬くならな  
いほうが

樂ですしそれとあまり年齢が変わらないから普通に話しかけて

ね～

川崎さんが言つてくれて

「ありがとうございます。」

俺は頭を下げる。それを見て

「あ、一応山本様のことばラファエルさんにすべて話してもらいました。

まあ、まだラファエルさんが知らないこともありますし、聞きた  
いことが

あつたら質問しますね。」

フラコーンス・メディアさんが言つて

「もう一つ忘れていました。。。私のことは川崎と言わずに勵つと  
呼んでください。

「ひとつほうが氣楽でいいので。」

川崎さんが言つたのでそれに付け加え

「じゅうちもフラコーンス・メディアと言つこへいでしょ？だから呼  
びやすい名前で

「いいよ。まあ勵はウン君つと今でもこいつけどね。」

2人は結構話題が立つていたけどラファエルさんは俺に2人の過去を  
少し話してくれた。（第99章終わり）

## 新たな仲間？その2

「この2人は最初に私と会ったのはこの天界にある伝説の武器を取り返してくださいました。その時は私はまだ王様じゃなく2人には会つてません。2人は魔王クンドンを倒してくださった中での2人です。まずユン王様は格闘魔法の使い手で励王女様は全世界での援護型での最強と呼ばれる方で今日は2人にお願いを申し出たら手伝つてくださると言つてくれました。」

ラファエルさんが言つて励さんが

「ラファエルさん。私は王女様つて呼ばれたくないよ。私は今の暮らしすぎるほど幸せ。だつてユン君に出会つてそして、最初のほうはユン君も天界を許さなかつたけども最終的には魔法世界と天界を協力し合つたことになりラファエルさんと仲良くなりました。しかも前は私たち魔法世界に大変な時天界の皆さまが私たち魔法世界を救つてくださいました。だから今度は私たち魔法世界の住人を代表として私とユン君がお手伝いします。もし・・2人ではきついのであれば護衛としてキトさんティオさんひとりさんをお呼びしますが。今では私たちで何とかします。」

励さんが言つてフラユンスさんも

「そうですよ。うちは父から王様に変わつただけだけどいまだに王様つという感じが持てない・・だから普通に接して構わないよ。うちも魔王クンドンを倒せたのは励のおかげでもあるし天界の方々も手伝つてくれた。

だから俺たちは天界を守りたい。そして励が住んでいた世界も救いたい。だから俺たちは自分の意思で手伝う。それだけだ。あ、そうだ山本さんも天魔人だからつと言つわけじゃないけども

ラファエルさんが言つてたんだけど山本さんは格闘が主にメイン  
?」

フラコーンスさんが言つたので

「はい、自分は元々魔法が嫌いで格闘でなるべく魔法を使わずにやつていきたいと思いましたが・・・今では・・・魔法がないと守れなく・・・」

俺は少し落ち込んでいたら

「そうちかーだけどねうちも魔法は嫌いよー。魔法の使い方を間違えれば

人に傷つけてしまふからね。だけどうちは励とあつて改めて魔法があつた

からこそ俺は格闘魔法になろうと思つてた。だから山本さんは格闘魔法で

いくならうちが教えてあげますよ?」

フラコーンスさんが言つてくれたので

「はい! ありがとうございます。」

俺が言つたらラファエルさんが

「ん~じゃあ1回やってみようか。」

いきなりお互いがびっくりするような言葉をラファエルさんが平氣で言つたのであつた。(第100章終わり)

ラファエルさんから助つ人として呼ばれた魔法世界から来た川崎さんとフラユンスさんが来てお互いに自己紹介をした。その後彼らはラファエルさんリディアさんと一緒に3人での特訓を始め最初のほうは自分がリディアさんの足をひっぱってなかなか最初のほうは進まなく後から段々と3人のコントロールが行きまくうまく行けないけども大分よくなつたらしい。しかし・・これをもつと大きくそして作りながら戦闘をしないといけないらしい。まあ、ラファエルさんからは「大分よくなりました。さすがです。これを維持しながら戦えるようにしていきましょう。」

言われたので俺は

「はい！分かりました！」

俺は言った。その後5時間ほどかかつてようやく

ラファエルさんが自分の理想するような結界ができる満足したので

「じゃあ今日は終わりましょうか」

ラファエルさんが言って今日は解散をした。その後俺は

トレーニング室でのんびりしてきました

「あら、山本さんちょっと隣いいですか？」

川崎さんが言って

「ええ、いいですよ？」

俺は言った。それを聞いて

「ありがとう。山本さんは今回のこと早く終わりたい？」

いきなり突然に言われたので

「そうですね・・早く終わりたいですね。川崎さん」

俺は言つたらちょっと不機嫌そうに

「励つて呼んで～まあ・・いまだに・・キトさんとトイオさんも  
川崎様つて言われるけど・・励つて呼んでほしい・・。」

川崎さんが言ったんで

「分かりました。励さん」

俺は言つたら笑顔で

「ありがとう。山本さんには謝らないといけないね。」

川崎さんが俺に真実を話してくれた。（101章終わり）

いきなり川崎さんから謝れたので

「どうしたのですか？突然」

俺はびっくりしたので川崎さんに聞いてみた。

「最初はね山本さんが天魔人っていうことを知らなかつた場合ね  
本当はユン君が山本さんの代わりに結界を作ることになつてたの  
だけどね・・・さつきのラファエルさんから聞いたと思うけど  
昔私は普通の女の子だつたのよ。そして小さいころにユン君と  
出会つて私たちはお互いい好きだつたんだけど・・・8年後かな  
ユン君が魔王クンドンにつかまつて私はユン君を助けるために  
魔法世界に行つて旅をしたの。いろいろなことが起きたけど  
その間にいろいろな人と出会い何とかユン君を助けたの。  
だけどね・・・もうその時ユン君はほとんど魔力をすわれてしまつ  
てね

魔力を完全に戻すのに結構かかつたの。だけど・・・魔王クンドンを  
次元に封じ込めたのはいいだけど・・・魔界人によつてまた封印を  
解かれてしまつてね。結局私たちは魔法世界のエリートクラス  
キトさんとティオさん途中で仲間になつたことりさんティオさん  
の師匠さん

そして天界人のエリートだつたパージアスさんそして天界人から  
エリートクラスで何とか戦つたんだけど歯が立たなかつたの・・・  
そして・・・ユン君が完全に回復してない魔力をまた無茶をして  
全魔力を使って魔王クンドンを倒したの・・・だけど今現在  
まだ完全に治つてない魔力でまた戦うのがもう・・・  
いやなのよ・・・見つけるのが・・・ユン君がいろいろな人を助けたい  
という気持ちはわかるけど・・・私はユン君をしなさせたくない・・・  
その時に山本さんがいてくれたから・・・何とかユン君は結界のメ  
ンバーには

参加しない方向でラフア エルさんから言つてくれたからホットしてたけど

コン君はその敵の邪魔を防ぐつと言つてたから・・なんとかなるけども

もしね・・またコン君が危険なことをしようとしたときは・・・。

「川崎さんがちょっと悲しそうな顔をしたので

「分かりました。そのときは絶対に自分が止めますから。」

俺が言つたら

「お願いします・・」めんね・・

川崎さんから少し涙を見た俺は川崎さんに質問をした。(第10  
2章終わり)

「励さん少し聞いてもいいですか？」

俺が質問をしていたら

「私が分かるならどうぞ。」

泣きながら答えてくれて

「ありがとうございます。では・・川崎さんは

俺と同じ世界にてなぜ魔法が使えるようになったのですか？」

俺はちょっと不思議そうに思ったので聞いてみた。

「そうですね・・・。まず・・魔王クンドンを倒す前の話を  
します。山本さんが言つ通りに私は正式には今も魔法は使えませ  
ん。

ですが・・普通の人間が魔法世界に行つて旅をするつと言つのは  
無茶がありますね。私の父親は元々魔法世界の住人で母親は普通  
の人間

私が生まれ1回だけ魔法が使えるつと父が言つていました。その  
後ユン君と

出会い私はユン君が好きでした。ですが・・魔王クンドンがユン  
君を捕まる前に

ユン君には婚約者がいたんです。その婚約者が私に助けてください  
と泣きながら言われ私に10回分の魔力が入つている杖をいただ  
きました。

しかもその杖は他の杖よりも強力な魔力が入つてたらしく私は  
危険と感じたときのみ杖の力を使って旅を続けました。

ですが・・・その杖をいただいた方はもう杖に全魔力を使つたそ  
うで

私と別れた後に亡くなつたそうです・・それを知らずに私は知ら  
ずのまま

旅をしていきいろいろな人を助け新しい仲間が増えなんとか魔界

に行け

魔王クンドンに挑みながら私はユン君を助けに行きました。

ユン君を助けた後私は残り回数がない杖の力で何とか魔王クンドンを行け

ンを

次元に封印することができたんですが・・最後にクンドンが私に向かつて

魔法で攻撃をして私を守るためにユン君は・・なくなってしまったの

それを見た私は悲しくなりました。だって・・好きだった人がいなくなるのは

どんだけ悲しいかわからないじゃないですか・・だから私はユン君を助けてほしい

っという願いをしたら私の中にある全魔力のおかげでユン君が復活したのです。

多分聞いたことがあると思いますがリザレクションと言えばいいでしょうか？

死者を復活する魔法は禁断の魔法と言われるのを私は使いました。

その後

私はティオさんやキトさんに魔法を教えてもらつたためにがんばつて特訓を

したのよ。

「ちょっと恥ずかしそうに言つた川崎さんを見たのであつた。（第

103章終わり）

## 過去話（フランク編）

俺は川崎さんから話を聞いていた。

「私はキトさんやティオさんに魔法を教えてもらおうと思つてたの  
ずーとコン君に迷惑かけたくないから・・・。だけど  
キトさんは魔法剣士。ティオさんは魔法使いでのエリートクラスの  
人だから・・魔王クンドン後でもかなり忙しいときの合間に私の  
お手伝いをしてくれたんだけど・・やっぱり・・普通の人間だか  
ら・・。

私はその時はまだ魔法を1つも使えなかつたの・・・。そのこ  
とは

コン君も知つていたんだけどね・・・。私はコン君に内緒でやつ  
てたから、  
そしたら、コン君からリングをもらつたの。これは励が魔法を使  
えるように  
なりますように。私に渡してくれたのが原因だつた・・・。そ  
れはね

後からキトさんとティオさんから聞いた話だけどコン君が自分の  
魔力を

削つてこのリングを作り始めたことを・・それを聞いて私はコン  
君に  
私のために・・こんなことしなくていいのに・・・。と私は泣きな  
がら

コン君に謝つた。だけビコン君が励が毎日特訓をしていて俺は  
何にも励にはできなかつた。だから・・あまりいい魔法は使えない  
かも

しれないけどもせめて援護魔法だけでも。つと言つてくれた。

そして2年がたつて今魔界が天界や私がいた世界を攻めてくると  
いう情報が

流れた。私は自分の世界を守りたいと思つたんだけれど・・・コン君がまた

無茶をすると思うから・・そのことを私個人でラファエルさんに伝えたんだけどね  
でもコン君がそれを知つて自分が出ると言こ出したのはすぐシヨツクだった。

もう、コン君の倒れる姿は見たくないの・・だけど山本さんが天魔人だと

知つた時は私からお願ひをしたかったの同じ世界の住民としてね・・。

だけビラファエルさんがもう山本さんに会つてることでお願いしたっという

ことで・・無茶なお願いですが・・私からも言わせてもらいます。山本さん私の世界を守つてくれませんか?」

川崎さんがお願ひを申したので

「励さん。大丈夫ですよ。自分はもともと天界や俺がいた世界を守りたいと思つ

だけど俺も仲間を裏切つた。しかも2回だけれどそれはみんなを守るために

そうしたのです。ですからラファエルさんからお願ひされた時は俺は自分から

頼みたかった。人をまで世界を救うより自分からつとな。だから俺はまだ

未熟だけれどがんばります。」

俺は川崎さんに自分の気持ちを伝えたのであつた。(104章終わり)

「じゃあ俺は励さんにお願いがあります。」  
俺は川崎さんにお願いをした。それを聞いて

「私でよければ・・・。」

川崎さんが答えたので

「ありがとうございます。俺はフランクスさんを止めるはずなことは多分できないでしょう。だけど励さんなら止めると思つので励さんがフランクスさんを止めてください。もし自分が見て励さんが危なかつた場合は止めます。だけどね自分は励さんに止められたほうが

安心するのですよ？自分も昔ちょっといろいろして人様に迷惑をかけた

ことがあります。ですが・・・普通なら親が止めるはずなのにうちを止めたのは親戚の先輩でした。しかも、その後うちをよく見て遊んでくれたり勉強を教えてくれたりしてうちは邪魔だと思ったんだけど

今と思えばそれがなければ今の自分がありません。だから一番近くにいる人しかもズーと一緒にいられる人が止めたほうが自分は安心すると思います。だからお願ひします。」

俺は川崎さんに頭を下げた。それを見て

「わかった。私が止めるよ。だけど駄目だった場合はお願ひね。山本さん

今後結界を作りながらの戦いはつらいと思つ。だから多分山本さんの相手は

コン君になるとと思つよね。私はそれは仕方ないと想つ。だけどコン君が

無理をしたら絶対に止める。その時は「めんなさい。」

川崎さんが俺に頭を下げるまで

「わかりました。自分も気をつけますのでお互に頑張りまよ。あ・・・すぐ時間が過ぎてしましましたね・・・すいません。もう遅いから励さんは早くお休みになられたほうがいいでしょう。自分はもう少しここにいますので。」

俺は言つた。それを聞いて

「そうですね。じゃあ・・私はこれで。また明日から大変だと思いますが

頑張つていきましょう。」

川崎さんが言つて去つて行つた。俺は明日からも頑張るつと空に向かって  
言ったのであつた。（第105章終わり）

## ラファエルから突然

俺は川崎さんからいろいろ過去のことを聞いた。

俺は川崎さんは魔法世界の住人だと思ってたら

俺と同じ世界の住民だった。それははつきり言って  
びっくりしたのであった。だけど川崎さんは自分が  
生まれた世界を守りたいつという熱心は俺にも伝わる。  
だって・・それは・・自分の世界を捨てる人なんて  
居ないだろうから。だから俺は協力をした。だけど  
本当は俺よりラファエルさんのほうが適してるのに  
川崎さんはラファエルさんを頼んで俺になつたそうだ。  
それは・・川崎さんは自分生まれた場所を守るために  
ラファエルさんが無理をしてまた倒れてしまつたり  
大怪我をしてしまうじゃ ないかとすごく不安だつたそ�だ。  
だから俺に頼んでしまい、申し訳ないと思つたから  
昨日俺に謝つてきたのであった。だけど俺は

全く考えてなかつた。俺が川崎さんなら同じことをしてたと  
思つたから。だから川崎さんからラファエルさんが無理をしてたら  
止めてくださいといふ言葉を聞いて、俺はどうしても危ないときは  
止めます。という言葉をかけて昨日は就寝をした。そして朝  
いつも通り3人での結界作りをしていて大分型になつてきた。  
「山本様大分よくなりました。では今から結界を作りながら  
あそこにある的を狙つてください。」

ラファエルさんが言つたので

「はい、分かりました。」

俺は言つて片方に魔力をため的に狙つてみた。しかし・・  
的の少し左に当たつた。それを見て

「気にしないでください。最初はだれも当てるとは言つてませんの  
で」

ラファエルさんが言ったので何回かやってみたりよひやく戦ったのであつた。

そして・・・ラファエルさんから

「今日はここまでにしましょう。あ、明日は日本さん私と戦ってもらえませんでしょうか?」

いきなり言われ

「え・・・」

俺はびっくりした。普通は戦つひとつつ言葉をラファエルさんから言われることがなかつたから。

「あ、いきなりですいません・・・まあ全力で狙つてください。ですが

ただし、私も同じ条件ですが片方だけで戦つてもらいます。いいですね?」

ラファエルさんが言われたので

「はい・・・分かりました。」

俺は明日ラファエルさんと戦つことになつたのであつた。（第1  
06章終わり）

## ミーファさんからの提案

訓練終了後俺は外に出ていた。それは・・・  
明日ラファエルさんと戦うということだ。  
俺はラファエルさんに勝てるだろうか?と  
今でも思う。その時に現れたのが

「山本様お久しぶりです。」

俺の前に現れたのはミーファさんだった。

「お久しぶりです。」

俺は挨拶をした。それを見て

「あれから順調か?」

ミーファさんから言わされたので

「まあ、そこそこ」

俺は苦笑しながら言った。

「なんだなんだ。元気がないぞ?どうした?俺に話せる  
ことなら行ってみ~」

ミーファさんから言わされたので俺は明日のことを  
伝えた。それを聞いて

「そうか~同じ意見での戦いか~俺も見てみたいかな。  
まあ、多分ラファエルは本気で行くと思う。あいつなら  
片手でも行けるから。だけど山本様は片手では経験がないから  
多分満足できる戦いはできないだろうな。多分ラファエルのこと  
だから

「明日結界作りながら対戦だろ?」

ミーファさんから言われ

「そうですね・・・」

俺は少し落ち込んだ。それを見て

「まあ・・・だからなんだ今から山本様にあることを

覚えてほしい。」

ミーファさんから言われ

「それは？」

俺が質問を返した。

「それはね。山本様精霊と契約しないか？」

ミーファさんから突然言われ

「俺に・・？」

俺は言った。

「そうだ、お前は素質がある。だけどやりすぎると魔力が持たん  
だけど精霊は1回出せば当分魔力は持つ。しかも自分から戦わずに  
いけるからな。だけど精霊は最初から出すと山本さんが戦わなく  
なるのが

大きな欠点となるから使うとしたら魔力が無くなりかけ。つまり  
結界を作る魔力になつた時に精霊は来てくれるさ。だから精霊契  
約を

してみないか？」

ミーファさんから言われ俺はミーファさんに自分の意思を  
伝えたのであつた。（第107章終わり）

「自分は精靈契約できますか？」

俺はミーファに質問をした。

「ああ、1回だけ精靈契約をして1回出せばあとは自分が精靈に命令をすれば精靈は山本さんに答えてくれるさ。まあ、大丈夫だろう。」

ミーファさんから言われ

「じゃあ・・お願いします。」

俺は言った。それを聞いて

「そかそか。じゃあ山本様の属性に会つ精靈を呼んだんだ」

何か俺が精靈との契約を待つてた。という状態だった。しかし・・戦うということはそうなるのだろう。

俺の前に現れたのは

「私の名前はシャドウと言います。山本様はダーク魔法を使いになると聞いたのでぜひ私と契約をお願いします。」

シャドウという精靈が俺に契約したいと言った。

「ああ、シャドウはねダーク魔法使いにすごく興味があるんだけど元々精靈契約つと言うのは人が魔法を使うときの技が多いいほど属性に合つた精靈との組み合わせがよくなるのよ。実際精靈を呼ばなくとも威力は上がるし、魔力の消費も少ない。だから精靈契約は本当はいいだけいろいろな魔法を使う方や

魔力が膨大な人は契約をしても意味なくなるからの。他の精靈は自分達が合う属性の人間との契約は結構しているがシャドウだけは・・

なかなか契約を結んでくれる人がいないのよ。あ、それと精靈は契約ができるないと段々魔力が下がるということもあるから俺の場合は特別だから契約しなくてもかまわないけどシャドウな

どは

ダーク魔法使いが数人しかいないからなかなか組めないから山本さんは

ダーク魔法が結構使うからもしよかつたら契約してあげて。」

ミーファさんから言われ

「じゃあお願ひします。シャドウ。俺の力になつてくれませんか?」

俺が言うと

「ぜひ! お願ひします。マスター」

シャドウが言つて契約の印にミーファさんから

「じゃあ契約となるものはこのリングに精霊の部屋つと言つものが  
あるだけど

そこに入つていつでも呼び出せるようにできているんだ。しかも  
大怪我をした場合でもこの中に入れれば1時間程度で全回復するよ。

だけど山本様の魔力は少しすわれるけどね。」

ミーファさんから言われ俺は精霊契約を初めて行って  
シャドウが俺の精霊になつてくれたのであつた。（第108章終  
わり）

## ラファエルとの戦い その1

俺はシャドウとの精霊契約が終わりその次の日ラファエルさんとの戦いが今・・・。

「えーと今回はお互いに片手のみで。しかもお互いに結界を作るという訓練と思ってください。時間は無制限つと言いたいところですがそれだとラファエルさんが有利になるので今回は制限時間を5分間にします。2人ともいいですね?」

川崎さんが言つたので

「わかりました。」

「うむ。問題はない。」

俺とラファエルさんは答え俺とラファエルさんとリティアさんは結界を作り川崎さんが

「では。はじめ!」

とこう合図があり俺とラファエルさんの戦いが始まった。

俺から攻めた。俺は魔法を唱え

「ダーク真空拳」

俺はラファエルさんの前に近づき拳で腹に当てた。

しかし・・・あんまりダメージがなかつた。それを見て

俺はちょっとヤバいなっと思い一旦後ろに下がつた。

それを見てラファエルさんが一気に上級魔法を唱え

「ジャッチメント!」

唱え、俺の上に光の刃が降つていき俺は直撃を食らつてしまつた。

食らつた俺はヤバいと思い。最後の賭けに出た。

それは少し魔力を残し自分のステータスを大幅上げ

シャドウの精霊召喚に賭けようと思つた。俺はリングの中にはいるシャドウに声をかけてみた。

「シャドウ。お前の力を借りたい。」

俺はシャドウに伝えたら

「承知。我がシャドウは山本様に力を貸します。」

シャドウが言ってくれたので俺は

「ありがとう。シャドウ

とお礼をしたのであつた。そして・・・

「ラファエルさんそろそろ全力で攻めますね。」

俺はラファエルさんに伝え、

「わかりました。では私は全力で山本様と戦います。」

と帰ってきたので俺は最後の賭けに出た。（第109章終わり）

## ラファエルとの戦い その2

俺は最後の賭けに出るために一旦後ろに下がった。

そして魔法を唱え

「ダークバースト！」

俺は唱え少量の魔力を残し全魔力を使って俺は  
闇を制す者我が力を貸してくれたまえ、その精霊は  
シャドウ。さあ・・目覚めよ！

俺は呪文を唱えシャドウを出した。それを見て

「精霊か・・」

ラファエルさんがつぶやいた。それを見てラファエルさんも  
呪文を唱えようとしたときに俺は

「ダークコーリング」

と唱えラファエルさんの動きを少し止めた。そう俺が使った  
ダークコーリングは相手の魔法を3分間のみ限定だけど  
使えなくなるつという魔法であった。そしてシャドウは

「ダークグラビティ」

唱えラファエルさんの周り半径1メートル以内に重力をかけて  
「そこまで！」

という川崎さんの声を聞いて俺はシャドウに

「ありがとう。」

といつた。そしてその言葉を聞いたシャドウは呪文を説いて  
俺のリングの中に戻つた。

「まさか・・山本様が精霊との契約とは・・驚いた。」

ラファエルさんが言って

「まあ～ラファエル様にまともに戦えるのがこれぐらいしかなかつた  
からね」

ミーファさんが現れラファエルさんが

「やっぱり・・お前か・・」

と言いつつミーファさんが

「まあ～ねこのままじゃ山本様が負けるのがわかつてゐるから。

だからもともと精霊契約を勧めたんだけど・・まあ良いパートナ

ーが

いて私もよかつたよ。」

ミーファさんが言つて

「はあはあ・・ありがとうござります。」

俺は頭を下げた。だが・・

「まあ・・山本様もう少しダークバーストの威力を落としたほうがいいかも

あれじゃ・・無制限だと魔力が持たない。それと・・無制限だと

ラファエル様は

おそらくオリジンを出してシャドウが負けるだらう。今回は良かつたけど

今後の課題にはつなかつたね。」

ミーファさんが言つたので俺は

「はい！ありがとうございます！」

お礼を言つたのであつた。（第110章終わり）

反省・・・そして

時間制限マッチで何とか勝てた俺は  
ミーファさんと励さんを呼んだ。

「2人に頼みたいことがあるんだ・・・」  
俺は2人に言つてみた。

「私でよければ。」

「私に力になれば協力しますよ。」

2人は答えてくれて俺は

「2人ともありがとう・・・」

俺は答えた。そして・・・

「まず・・・今日の反省で俺はやっぱり魔力を  
使い過ぎるつという1つ問題がある。」

それを克服するために俺はもう1回魔力なしの  
特訓をしようと思っている。そこで・・・2人に  
手伝つてほしいことは・・・まず・・・2人に  
魔力を吸い込んだりその魔力を使って魔力を  
他の人でも使えるリングとかできないかな?」  
俺は突発に2人に質問をした。答えは

「ん、それはできますけど・・・」

励さんが少し不安そうになつた。ミーファさんは  
「できると思うけど俺の力ではそれを作ることは  
できない。だけど魔法世界の住民は魔力を高めるために  
魔力を抑えるリングをつけてるつと言つ情報はあるね。  
だから魔力を保存するなら作れると思うよ?」

ミーファさんが言つて、

「できるだけね・・・山本さんもしかして・・・

魔力をすべてリングにため込むつもり?」

励さんが言ったので俺は

「ああ・・・。それしか方法がない。俺は半日すると  
かなり魔力が戻るけど魔力を使わないことを条件にすると  
これが手っ取り早いかな・・・。つと」

俺は言った。それを聞いて

「分かりました・・・。では私は一旦戻りますが・・・。

山本さん無理だけはしないでください。」

川崎さんが言って姿を消した。俺はミーファさんに  
「さて・・・これからミーファさんに頼みがある」

俺はこれからのことすべて話した。（第111章終わり）

「俺に何か伝えたい」とでも？」

「えーと・・・。多分俺はこの戦いで天魔人の能力を消えるかも知れない。だからミーファさんにある魔法のことを聞きたい・・・。」

俺はミーファさんに聞いてみた。

「俺がわかる魔法なら。」

ミーファさんが言つて

「それは・・・天魔人は異次元の魔法は使えるのでしょうか？」

俺は一つ気になつたことがあつた。それはテレポートは一瞬で飛べる魔法だけど異次元を次元に移動することができるのか俺はわからないからミーファさんに聞いてみた。

「ああ、多分できると思うが・・・俺も見たことはない。

多分禁断の魔法だろう・・・。」

ミーファさんが言つたので

「ありがとうございます。」

俺は頭を下げた。ミーファさんが

「どうしてそんなことを聞くんだ？」

疑問に思つたミーファさんが俺に質問をして

「多分今回の戦いではフラコーンスさんが無理をすると思う。川崎さんはフラコーンスさんを大事に思つてゐる。だからもしかしたら結界を閉じるまでにフラコーンスさんは1人で多くの魔界人と戦うだろう。最悪結界の中に残つてしまつかもしれないだから俺は異次元魔法を使えるようにしたい。だけど・・・それは魔力が大幅にいることや今の俺じゃ力不足。だから・・・俺は・・・さつきの言つていたリングに全魔力を吸つてそれを励さんに使ってほしく俺は思つてゐる。だけど

俺は今日やつていて結界を作りながら対戦をしていくと魔力が持たない。だから途中で俺と川崎さんがチョンジして俺がフラコーンスさんを入れ替わりして戦つたほうが早いと思つ。だから・・・ミーファさんに手伝つてほしかったんだ・・・。

俺はすべてのことと言つとミーファさんが

「そつか・・・だけでもしかしたらお前は結界の中に入つてしまつぞ？」

もし入つてしまつたらお前はもうお前を待つてる人と会えなくなつて

しまう。それでもいいのか？」

ミーファさんが言つたので

「ああ、俺は会えなのは俺が責任だ。だけどね。俺は・・・みんなが被害にあうよりは俺が・・被害にあうのが一番いい。」

俺は答えた。それを聞いて

「そつか・・じゃあ・・俺は何にも言わない。俺は最後までお前の力になろうじゃないか！」

ミーファさんが笑顔で俺の気持ちを答えてくれたので

「最後までお世話になります・・・」

俺は頭を下げたのであった。

(112章終わり)

俺はミーファさんにして話して俺たちは魔力の特訓を始めた。リングができるまでに俺は無駄な消費をしてシャドウを召喚をしてシャドウとたたかっていた。数日後川崎さんから「一応頼まれたものは作つて置いたけど……無理だけはしないでね……」

川崎さんが心配そうにしてたので

「ああ、大丈夫さ。それより励さんはフラウンスさんを守つてあげて……俺のことは心配しないでいいから必ず……。フラウンスさんを無理はさせないようにするから……」

俺は川崎さんに伝えた。それを聞いて「うん……。ありがとうございます。だけどね……私は山本さんにも無茶はしたくないの……。だから……無理だけはしないでね。山本さんの帰りを待つてる人がいるから……。」

川崎さんが言ったので

「ありがとうございます。無理だけはしないように努力をします。」

俺はそう言ってリングをはめ現在俺の魔力をすべて吸い込んで魔力をリングにためて魔力が亡くなつた俺は再びシャドウと魔力がないけどたたかつた……。まあ……最初のほうは俺は力不足だつたのでシャドウにぼこぼこにされたんだけどね……アハハ……。その後何とか戦えるようになつたけど……いまだに勝てなくなり俺は魔力が高くなり始めたときにリングに魔力を吸收してもらいながら特訓を始めた。

そして・・・朝、昼は結界の練習をし、夜は魔力なしの  
特訓をして数か月俺たちは最後の調整を始めた。（第113章終  
わり）

## 最終段階

ミーファさんに頼んでいて数日後  
川崎さんから魔力を吸う（ためる）&魔力解放する  
リングを受け取った。

「ありがとうございます。励さん」

俺は川崎さんにお礼を言った。

「いえいえ・・・ですが・・・無理だけはしないで  
ください・・・」

川崎さんが言つたので

「ああ、分かりました。あ、そつだ。川崎さんは  
結界とかは作れますか？」

俺が突然に言い出したので

「ええ・・私はこのリングで何回か使つたことがありますが・・・  
何ででしょうか？」

疑問に思つたので聞いてきた。

「もしかしたら・・・結界が簡単に成功するわけじゃない。  
もしかしたらフラゴンスさんが無理すると自分は考へてるので  
最悪俺がサポートでフラゴンスさんと戦うかもせんが  
この前の戦いを見てても自分は片手だけじゃ・・・シャドウを  
出さないと戦えません。しかもシャドウを出すのにある程度  
魔力を消費しないといけないので・・・できれば最終調整のときには  
変わればいいのでお願ひします。」

俺は頭を下げた。

「分かりました。その時は私と変わりましょ。ですが・・・  
無理だけはしないようにしてくださいよ。山本さんだつて  
待つてる方がどんだけ心配して・・・いなくなつたら・・  
どんな気持ちか・・ね。」

川崎さんが言つたので

「分かりました・・。  
俺は言ってリングをはめて最終調整に入つたのであつた。  
( 114  
章終わり )

## 最終決戦の前に その1

リングを受け取つてから数カ月後俺はリングをつけたまま特訓をして・・大分魔力が上がつた。というかどんだけ魔力を上がつたのかも俺は知らない。なぜなら元々の魔力はすべてリングに吸収しているから・・。

そして・・最終決戦の前日俺はミーファさんと夜訓練をしていて川崎さんから俺に

「ちょっと来てください。」

と言われたので俺は特訓をやめてミーファさんと一緒にトレーニング室のほうに向かつた。そして

「山本様忙しい時に呼びだしてすいません。」

ラファエルさんから言われて

「いえいえ、自分に何か？」

俺は言った。それを聞いて

「明日やつと終わる。だから最終調整としてもつい回説明をしたいけど・・大丈夫ですか？」

ラファエルさんが言ったので

「ええ、お願ひします。」

俺は言った。今いるのはラファエルさんリディアさん

川崎さんフラユンスさんミーファさんの5人だ。

「まあ・・一応他の人は俺たちがやばいときに呼びだが俺たちの周りにいても・・もしかしたら被害が起きるかもしれないから今回はこの6人で防壁をする。俺とリディアと山本様は魔界人からの侵入を防ぎながら結界を作る。ミーファとフラユンス様は前列で防壁をしてくれ。」

決して無理だけはしないように。これは戦争するわけではないのですから。川崎様はあまり魔法を使わないようにサポート役でお願いします。」

ラファエルさんの説明が終わり俺たちは  
「 「 「 「 分かりました。」 」 」  
と言った。そして・・話が終わりラファエルさんから  
「山本様に会いたいという方がいらしゃって・・・  
大丈夫ですか？」  
俺に聞いたので  
「うちに?はい、大丈夫ですが。」  
ラファエルさんは  
「いいそうです。どうぞお入りください。」  
と言って入ってきたのは眞魅先輩、高原さん、夏季坂、金崎  
リオの5人だつた。（第115章終わり）

## 最終決戦の前に その2

「やつほ～山君～元気～？」

「山本さん元気ですか？」

「山本～久しぶり～」

「山本元気してたか～？」

「山さん元気でしたか？」

「みんなから声をかけられたので

「ああ、俺は大丈夫みんな無理して來たのか？」

俺はみんなに言つた。

「いや～明日でこの戦いが終わる～とラファエルさんから  
聞いたから・・それを聞いてこのメンバーも応援として  
行きたくて無理にお願いを・・ね」

金崎が言つてみんなもうなずいた。

「そつか・・。みんなありがとう。でも確か・・  
明後日には・・卒業式じゃなかつたっけ？

大丈夫なのか？」

俺はみんなに質問をした。眞魅先輩が

「みんな卒業式より山君のことが心配だから來たのよ。  
だから心配しないの～。多分みんなは一緒に卒業式を  
迎えたいと思つてるよ～」

眞魅先輩が言つて俺は

「ありがとう・・でも・・俺は留年は確定だから・・。」

俺は言つた。それを聞いて

「あ、それはないですよ？一応学校には私が伝えてありますので  
卒業はできますが・・。しかし・・大学はいけませんが・・。  
ラファエルさんが言つたので

「そうですか・・いろいろ迷惑かけました・・。一応大学は  
あきらめてたから気にしませんよ。」

俺は言つた。それを聞いて

「じゃあ山本。俺たち浪人生活だな。がんばろうぜー。」

金崎が言つたので俺は

「え・・?」

俺はびっくりした。高原さんは

「私と金崎さんリオさん夏季坂さんはみんな山本さんと一緒に  
行きたいつという気持ちがありまして・・一応親に伝えた  
了承もらえたので来年はみんなで大学受験大変だけど  
頑張りましょう。」

と言われた。俺は

「もう・・。みんな・・ありがとうな・・・。だけど・・。

浪人はすごく大変だよ・・。一緒に行く大学も・・レベルがね・・

。

俺はそこを気にして。それを聞いて

「あ、それは大丈夫」私の学校を受けるから過去問題は私がかき  
集めて

くるから大丈夫だよ。だから心配しないでね～もちろん分か  
らない所は

私がビシビシ教えてあげるから～」

眞魅先輩が笑顔で言つたのであった。

(第116章終わり)

## 最終決戦の前に その3

「じゃあ・・大変だけど頑張るわ・・。3人はあの後・・どうなつたの?」

俺は轟見、加奈子、コレットの3人が心配だつた。

「この頃・・は大分良くなつたんだけど・・まだちょっとね先生から聞いたんだけど・・3人は無事に大学は合格したんだつてだから大丈夫かな?だけど一応卒業式に山本さんが元気な顔を見せたら喜ぶと思うよ。」

高原さんが言つた。

「だけど・・多分・・3人に殴られるかもしれないから覚悟したほうがいいかもね・・。」

金崎が言つたので、

「ああ、分かつてる・・それは自分が悪いからな。」

俺が言つて夏季坂が

「それはないよ。だつて俺も最初はすゞく悲しかつた。だけど金崎から聞いて山本は俺らを守るために自分からみんなに言わずに行つたのは仕方ないよ。」

と言つた。リオが

「うん。私も最初はすゞく悲しくコレットちゃんとすゞく泣いたよ・。

だけどね・・後から金崎君に聞いたら・・コレットちゃんが狃われた時

山さんが助けてくれたけど・・。もし山さんがそのままいてくれたら

うれしかつたんだけどね・・。だけど山さんは私たちを守るために今戦つてるもんね・・。だから無理だけはしないよつとしてね・。

「わんがいなくなると私たちも・・・」

と言つた。それを聞いて

「分かつた・・無理だけはしないよ」<sup>ハサウエイ</sup>「・それは約束するよ。でも・・みんな本当にありがとう・・・。すげえうれしい。来年こそみんな一緒に大学に行こう。」

俺が言つてみんなが

「「「「「うん!（もちろん…）」「」「」」

といった。これ以上遅くなるのは厳しげの俺はみんなを帰れさせラファエルさん達に

「みんなを連れてきてくださいありがとうございました。

ラファエルさんリディアわんミーファわんフラゴンスさん

励さんみんな今日までお世話になりました。明日までがんばりますので

よろしくお願いします。

俺は頭を下げた。そつ・・俺は明日で終わると思いつの後ミーファさんと

訓練をして明日を迎えるのであつた。

## 最終決戦　その1

俺はみんなの声を聞いて少し特訓をしてその後

明日があるので就寝をした。そして・・決戦

「そろそろ魔界人が来る前に結界を完成するぞ」「

ラファエルさんが言って俺たちは結界を作り始めた。

完成するまでには最低3時間は必要になる。完璧にするためには5時間はかかるので作る途中に結界に1つでも穴があつたりしたら失敗になる・・だから俺たちは少しずつそして二度と壊されないためにも何重も結界を作りながら作っていくのだ。

最初のほうは順調だつたが・・段々と魔界人たちが結界に攻撃を仕掛けた。それをフラコーンさんが止めに入つて大分厳しい決戦になりそうだと俺は思った。フラコーンさんが

「ちょっと力解放するね。」

と言い少し魔力を高め

「チャージ1・・・チャージ2」

と全魔力がフラコーンさんの全身をまとまり

「行くよ・・・」

と言つて一気に魔界人を氣絶させていき4時間後フラコーンさんもかなりつらそうになつて行き俺は

「励さん俺と変わってくれませんか?」

俺はフラコーンさんの状態が危ないと気付き川崎さんに伝え

「でも・・私じゃ・・魔力不足だから・・・」

川崎さんが言つたので俺は

「じゃあこれをつけて・・・」

俺は付けてあるリングを川崎さんに渡した

「これは一応川崎さんがフラコーンさん魔力で魔法が使えると聞いたから俺の全魔力を3・4ヶ月間ためておきました。

だから・・・励さんなら使えると思う。このままじゃ・・・

「ラゴンスさん無理しそうだから・・お願ひします。」

俺は頭を下げた。それを聞いて

「分かりました・・。だけば山本さんも無理しないでくださいね。」

川崎さんから・・言われ

「ありがとうございます。励さん」

俺は笑顔で答えた。そう・・これが俺の最終決戦となることはみんな知らなかつた。（118章終わり）

## 最終決戦 その2

もうすぐ結界が完成にするのだけど・・・  
フラコーンスさんがそろそろ魔力の消費が激しく  
無理して戦つてるので俺は

「フラコーンスさんをこっちに戻しますんで  
ミーファさん後はよろしく頼みます。」

俺は言つてミーファさんは

「おう。任せとけ！」

と答えてくれた。そして俺は魔力をため

「エックスチェンジ！」

唱えて俺とフラコーンスさんがいた場所を入れ替えをした。  
フラコーンスさんはびっくりして

「まだいけるのに・・・」

とつぶやいたけどミーファさんが

「俺も見てたけどもうフラコーンス様あなたは魔力がもう  
ないはず・・・だから山本様に任せるしかないのです。」

と言つてフラコーンスさんは

「そつか・・・後は頼みます・・・」

とつぶやいたのであつた。俺は結界に呪文札を張り付けて

「7属性封印！」

と言つて結界に魔法をかけた。そして・・・段々と結界が  
完成をしていきラファエルさんが

「山本様そろそろ完成されるんでこっちに・・・」

という声がしたんだけど俺は

「すまん・・・俺はこっちに戻れそうにないかも・・・」

と言つた。俺の目の前にいたのはラファエルさんと同じぐらい  
魔力を持つた魔界人のエリートだったの

「今俺が戻るとこいつの魔法で結界が壊される・・・」

「属性封印は結果が完成してからしか発動しないから・・・。  
だから俺はここに戻る・・・みんな・・・ありがとうな・・・。」

だから俺はここに戻る・・みんな・・ありがとうつな・・。」「

「マスター——！——！」

とテレパシーで声が聞こえたので俺は  
「ンヤ～カスマダ～・ニシマスター・ジナ～・・・・・・・・

前編二十一

後は頼みます。  
一

と語って俺は最終魔法を呟えた。

## 最終決戦 その3

俺はラファエルさんと同じ魔力を持つた奴と  
周りにいる魔界人の中でもエリートクラスの魔界人に  
対して禁じられた魔法を唱えた。

「究極魔法アルテマ！」

俺は光属性最強の技を俺から半径4m以内に全体攻撃をかけた。  
しかし、それだけじゃ……よけられると思いもう一つ魔法をかけた

「ダークグラビティ！」

そう……俺も直接食らうけど全員に確實に当たるよう元に  
回避不可能にした。俺はラファエルさん達に  
「みんな……今までにありがとうございました……」

俺は笑顔で言つて光の中に消えていった。

その後結界は完成したんだけど……

「ラファエルさん今から……山本さんを……」

川崎さんが言つた。しかし……

「無理です……川崎さま……さつき山本様が7属性封印したので……

この5属性は闇、光、火、水、土、雷、風属性はすべてはじかれ  
私には

どうしようもないです……すいません……」

ラファエルさんもすごく悔しがついていて

「山本さん……無理だけはしないように言つたのに……  
あの子たちにはどう説明すればいいの……。」

川崎さんが……泣きながらフラコансに抱きついて……

「励……」

フラコансさんが……声をかけたけど……川崎さんは涙を流した。

それを見て

「川崎さん……止めなかつたのは……私にも責任があります……」

必ず・・山本さんは生きているはずです・・私がいつか・・

山本さんを探せる方法を見つけてますので・・・。」

リディアさんが言つた。一応も「魔界人が他の世界に攻めてくる」とは

無くなつたが・・山本も・・戻つてくることはなかつた・・

そして・・次の日にラファエルさんとリディアさんフラコンスさん川崎さんはコレット達がいる学校に向かつたのであつた。（第1

20章終わり）

卒業式・・・

「ラファエルさん達はコレット達がいる学校に向かつた。

そつ・・今日は卒業式。卒業式後みんなは大きな桜の木の所に集まる予定だつた。ラファエルさん達が来て金崎が

「ラファエルさんこっちです〜」

と声をかけたので4人は

「「「「皆さん卒業おめでとうござります」」「」「」「

と声をかけた。それを聞いて

「「「「ありがとうございます」」「」「」「

金崎達は言つた。眞魅先輩は

「あれ?山君は?」

眞魅先輩は探してたけど山本がいなくて聞いてみた。

「すいません・・山本様は・・結界を守るために・・

山本様の最終魔法・・で居場所が・・把握できずに・・

今検索中です・・。生きてる堂かもわからないので・・。

本当にすいません・・。

川崎さんは泣きながら金崎達に謝つた。

「じゃ・・もう山本は・・この世界にはいないのですね・・。

夏季坂が言つたので

「そうなります・・私たちの力不足で本当にすいません・・。

ラファエルさんが謝つた。それを聞いて

「よ・・。

俺はみんなが暗そうしてゐるところを見て声をかけたそれを聞いて

「山本(山君)(山本様)(山本さん)?!」

みんながびっくりして俺は

「お・・おう・・。ただいま・・そして卒業おめでとう・・。

俺は声をかけた。だけど俺の服はボロボロだった。まあそりゃう技直接食らつて生きていたのも不思議だしな・・。

「山本様無事だったんですね・・・」

川崎さんが泣きながら俺に行つた。俺は

「ああ、俺も生きて帰れるとは思つてもいなかつたよ・・・。

まあ・・この通りもう魔法が使えなくなつたがね。」

そう。魔法を一気に使うのは魔法が使えなくなるという意味でもあり  
強力な魔法だつたので直撃食らえれば即死に近い状態にはなるが・・  
俺はなぜか無事だつた・・。それは・・俺の親が俺を助けてくれた・・。

本当に・・馬鹿親だな・・とか思つてたり・・。

「でもよかつた・・。山本さんにまた会えるなんて・・もう心配し  
たんだよ・・。」

高原さんが言つたので

「ごめんな・・高原さんみんな・・心配をかけて・・でももう大丈  
夫・・・

攻めてくることはないから・・。」

俺は言つた。そのあと加奈子、櫻見、コレットから殴られたのは分  
かつてたけど

3人もすごく俺に会つて笑顔になつた・・。そして・・

「じゃあ・・今から家でお祝しましょ~」

眞魅先輩は俺たちを卒業祝いするために案内されたのはおばあちゃん  
の家だつた。

俺は入る前に

「ただいま・・おばあちゃん・・もう俺は天魔人じゃないけど・・  
これからお世話になるね」

と言つて俺たちはその後パーティーを楽しめたのであつた。（第1

21章終わり）

祝い／

俺たちはおばあちゃんの家に入り、みんなで祝う準備をして1時間後みんなで卒業パーティーを始めた。  
その中にいたのは俺、眞魅先輩、高原さん（いまだにさん付け）コレット、リオ、加奈子、糸見、夏季坂、金崎、店長、リディアさんラファエルさん、フランクスさん、川崎さん、ミーファさんの15人での

パーティーを開いたのであった。料理とかは俺が作ろうとしていたら眞魅先輩が店長を呼びだし2人で作り始め俺はしなくていいと拒否され

出来たのが凄く・・豪華なパーティーとなつた。さすがに1つのテーブルでは

全員入れないので2つ奥からテーブルを出し・・、3グループに分けて

座つた。そして・・

「――乾杯――」

みんなで言つて後はいろいろ各自話していくところにリディアさんから

「あの・・山本様」

俺に言つてきたので

「何でしちゃうか？」

俺が言つた。リディアさんから俺に見せたものはリングだった。

「これは・・山本様が持つべきものです。」

言つて渡されたのは契約されたシャドウのリングだった。

「『めん・・もう俺はこれを受け取る資格はないんだ・・・。』あ

の時に

俺は全魔力を使いもう魔力を練ることもためることもできなくなつた。

だから・・俺が持つていっても意味がないんだ・・。同じ天魔人である

リディアさんが持つべきなんだ・・。

俺は言つたら川崎さんが

「それはないと想いますよ?まあ・・天魔人には戻れるかは分かりませんが

山本さんは何年かすれば魔法は使えるようになります・・。

川崎さんから言われリディアさんが

「それなら・・山本様が持つていてください。私も自分で持つより山本さんなら任せれるので。」

リディアさんからリングを受け取つた俺は

「ありがとうございます。」

と言つた。少ししたらラファエルさんが

「あの時はもう山本様がいなくなると焦つてましたよ・・。ビリヤ  
つて

「こつちに戻れたのですか?」

と聞いてきたので俺は

「俺にもよくわからないですよね・・。7属性封印はどの属性の持ち主がいても

どれかに当たれば結界を通ることができないので・・俺は闇だから・・

通れないはずなんだけど・・多分・・俺のおばあちゃん。お父さん、お母さんが

助けてもらつたかもしれません・・。」

俺は言つた。俺は多分3人に助けてもらつたと信じている。そうでないと

あの時俺は死んでたかもしれないから・・。それを聞いて

「山本様これからどうするのですか?」

ミーファさんから言われ

「ん・・まあ・・俺はこの1年間は勉強して4年間の大学に入る

かな・・。

それ以降は決めてないから・・。その時に決めると思こますよ。

俺は言つてミーファさんは

「そつか・・。じゃあまた何かあつたら遠慮なく言つてくれ。」

ミーファさんは笑顔で言つた。シャドウもテレパシーで

「これからもよろしくお願ひします。マスター。」

俺の頭に伝えてきたので俺は

「ありがとう。シャドウ・・。これからもよろしくな。」

俺は伝えたのであった。（122章終わり）

またねー！

俺はラファエルさん達と話した。その後

「山郡へこつちばかり話してないでこつちにも来てよ～」

眞魅先輩が言つてきたので俺は

「はいはい・・今行きますよ～。では楽しんでくださいね」

俺はラファエルさん達に挨拶をして眞魅先輩がいる場所に言つた。

「お待たせ～」

俺は言つたら眞魅先輩達が

「――遅い～～～」

と言われた。

「じめんじめん。」

俺は謝つた。そう・・今回のメインはこつちだからの・・・卒業だしね。

やつぱり内緒にしていたのが原因で俺は今度加奈子、鶴見、コレット

一人ずつデートを申し込まれた。といつか罰ゲーム?と言えばいい

かな?

俺は内緒にしていた自分が悪いから全く気にしないけどね・・・。

「山本～明日からバイト入れるか～？」

店長さんが俺に聞いてくれたので

「はい・・うちでよければ・・よろしくお願ひします。」

俺は頭を下げた。それを聞いて

「おう!だつて・・眞魅ちゃんだとね・・みんなが・・眞魅ちゃんばっかり

みるから・・仕事にならなくてわ～。やつぱり指揮を取る山本がいないとな

とうかもう正社員になるか?」

店長が変なことを言つてきたので

「正社員は・・困りますね・・大学に入るといつ約束をしてしまつたので・・。」

俺が正直に言つたら

「そつか～それは仕方ないな～まあ・・明日からバイトよろしくな～」

店長が言つて俺はありがとうございます。と言つた。

「山本さんこれから浪人生活大変ですが・・一緒に頑張りましょう」  
高原さんが言つたので

「ああ・・」ちらりとよろしくお願ひします。」

俺は言つた。後から眞魅先輩から聞くと糸見は将来国語教師か本関係の仕事に

就きたいと言つたのでそつち関係の大学を加奈子はスポーツ推薦でオリンピック選手がよく出る大学にコレットは大学に入ろうとしたけども

ラファエルさんから高校までという約束だつたので女王の役目もあり天界に

戻るということだ。俺はリオも戻るではないかな?つとリオに聞いてみたら

「私は・・コレットちゃんみたいに天界に戻つても暇だからね～だから

山さんと大学に行きたいだもん～。」

リオがノリノリで言つた。パーティ一は2時間で終了しリオ、コレット

ラファエルさん、リディアさんは天界に帰り、フランクスさんと川崎さんは

魔法世界に帰り、ミーファさんは自分のいた世界、眞魅先輩達は自分分の家に

帰るといつことなので俺は

「さよなら～」

俺は言つたら川崎さんが

「これがそれがなんじやたこだよなー。」とはおおむね二つの道。

川崎さんが言つてみんなが一斉に

「「「「「またね！」！」！」

と言つた。それを聞いて俺は

「ああ、またなー。」

と言つてみんなは帰つて言つたのであつた。

(終  
わ  
け)

## またねー！（後書き）

ん～短くてすいませんでした～（汗  
毎日？見てくれた方本当にありがとうございます。  
多分次書くのがもう最後だと思いますので  
また会えたらその時まで・・・。  
というか・・・もう早く会えるのかな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4871o/>

---

学生時代

2011年3月23日13時04分発行